
史上最強の弟子！天道優！

爆裂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

史上最強の弟子！天道優！

【Nコード】

N6646M

【作者名】

爆裂

【あらすじ】

天道優は死に際に心を殺され、砕かれた魂は輪廻の輪を介さずに新しい命を得た。再び輪廻の輪に帰るには、新しい人生を生きなければならぬ。

そして転生した世界は『史上最強の弟子ケンイチ』の世界。彼は誰も自分の前で死なせない事を決意し、武術を志す。入門した道場『梁山泊』で彼はどんな出会いをし、どんな経験をするのか？

プロローグ 最後と最初（前書き）

原作有りの小説に興味が湧き、始めてみました。

プロローグ 最後と最初

真っ暗だ・・・

いや・・・正確には闇も光さえも無い。ただ無限に広がる空間。

その中に俺の意識だけが漂う・・・これは無か・・・？

『聞こ・・・か・・・聞こえ・・・ますか？』

頭の中とも、外とも分からない場所から声が聞こえる・・・。

「ああ。聞こえる。」

ぼんやりとした意識の中で、そうに答える。

「・・・思い出せましたか？」

こちらを窺う様な声。

「俺は・・・。」

頭の中を過る耐え難い記憶。それは苦痛と絶望と共に俺を攻め立てた。

「・・・クツ！ガアアアアアアアー！！」

幾度かの絶叫を繰り返し、漸く俺は意識を立ち直した。

「ハア・・・ハア・・・こゝここは何処なんだ？」

「ここは虚無の廻廊・・・。命の奔流の行き着く場所。死を迎えた魂が輪廻の輪へと帰り、再び旅立つまでの生命の休息点。分け隔てられた命は此処で一つに成る・・・。」

「つまりあの世か？」

「そう…。貴方は死に、ここへ戻った…」

やっぱり俺は死んだのか。

「だったら俺も輪廻の輪とかに帰るのか？」

「ええ。本来ならば、貴方は帰る筈でした。輪廻の輪の元、新しい命へと・・・。しかし死の間際に貴方の魂は壊された。それこそ輪廻の輪へ戻れない程に・・・お分かりでしょう？」

そうだった。生前・・・死ぬ間際に俺の自我は壊された。家族は殺され、恋人は犯され、仲間達の首は晒された・・・。

血の涙を流しながら俺はソレを見たんだ。四肢を切り落とされ死ぬ者。遊び半分に傷を抉られ、のたうつ者。親しい人たちが肉塊に変わる姿を・・・。

その全てを見せ付けられた俺は、身体より先に心を殺された。

「私は輪廻の輪から弾かれた貴方の魂を拾い集めた。しかし貴方の魂は絶望の記憶に耐えられず、幾度も壊れました。それこそ人が知る数では無い程に。」

「では何故俺は此処に？」

「貴方の魂は破壊と再生を繰り返した結果、魂に耐性が付いたよう

です。身体だけで無く、魂に耐性が付くとは……人の命とは興味深いものです……。」

「ならば今度こそ俺も生まれ変われる？」

今度こそ仲間達と共に逝けるのか？

「いいえ。再生した魂は既に貴方が死した時とはまったくの別物。残念ですが、貴方は貴方でありながら、全く別の貴方なのです。謂わば貴方は、輪廻の輪を介さず生まれ変わった。」

「良くは分からないが、俺は輪廻の輪とかには逝けないという事か？」

「はい。新しい命はその人生をまっとうしなければ輪廻へと帰れないのです。お分かりでしょうか？貴方は新しい人生を生きなければならぬのです。」

「転生……か？」

「そうです。その魂に見合う人生を生きてください。再びここへ戻る時、輪廻は貴方を受け入れるでしょう。理解できましたか？」

新しい人生の選択を迫られるなんて考えた事もなかった。あの絶望の後に、続きの人生があつたなんてな。

「理解した。だが了承する前に訊きたい事が有る。」

「何でしょう？」

「俺と共に死んだ……仲間達は無事に逝けたのか？」

「……。」

やや間を置き、声は答えた。

「……貴方は本当に優しいですね。」

そうだろうか？

「心配は要りません。貴方以外の人の魂は一つになり、やがて生まれ変わるでしょう。」

「そうか。よかった。」

ホッと息を付く。

「それでは、そろそろ貴方も旅立って頂きます。宜しいですか？」

「ああ。願います。」

「前世での記憶はどうしますか？辛いのであれば、忘れる事もできますよ？」

「いや、出来たら覚えていたい。死んで逝った仲間達を、せめて俺だけでも覚えていてやりたいんだ。」

「そうですか。では最後に……。」

再び薄れる意識の中、声の主は姿を現す。

それは俺の最愛の人の姿。

彼女が最後に残した言葉。

「ありがとう。」

「・・・これで良いのですか？」

「はい・・・。私は彼の最後と最初に立ち会えた。これほどの幸せはありません。」

「・・・。」

「私も、もう逝きます。」

「貴方が最後でしたね。では、次に会うのはまた貴女が生を終えてからです。」

「はい。・・・優、貴方の新しい人生が幸福なものでありますように・・・。」

プロローグ 最後と最初（後書き）

プロローグはちょい暗め。本編は基本明るく行こうと思っています。
シリアスは苦手です・・・。

第一話 転生！入門！梁山泊！（前書き）

本編始動です。

第一話 転生！入門！梁山泊！

この俺、天道優てんどうゆうが転生して約十年の月日が流れた。

俺が生を受けた天道家というのは、武門の家柄で、古くは陰陽の流れを汲む流派として代々その技を伝えられて来たそうだ。

俺が長男であればその技を継ぐ所なのだろうが、生憎、俺には歳の離れた兄が居る。そしてすでに天道流の流派は兄が継ぐことになっていた。

次男という立場のお陰で、伸び伸びと過ごせるものの、不満が無い訳ではない。

「兄さん。何で俺はいつも基礎鍛錬しかさせて貰えないんだ？」

「仕方無いだろう？父さん達が許してくれないんだから。」

「うーむ。謎だ。」

前世で俺は自分の無力さを知った。都合良く武門の家柄だったため、これ幸いと鍛錬を始めたのだが、

両親は一切技の習得を許可してはくれない。俺はいつも道場の床が汗で水溜りになるまで、基礎の反復練習のみが続いた。

私の息子達は優秀だ。別に親馬鹿を言うつもりは無い。武道家として、息子達を見てもその才能は相当なものだ。長男の始など、あと数年もすれば天道流を継ぐことだろう。

問題は次男の優の方だ。あの子には確かに才がある。それも天道流でも始祖以来と言えるほどに。

だが、だからこそあの子は危うい。性格的に問題は無いのだ。寧ろ温厚で、他者との友好を築く事が得意で親しみ易い雰囲気を持っている。

危険なのはその思想だ。幼い頃あの子に戦いの心構えを説いた。

「活人拳を旨とするのが我が流派だ。優、お前は倒した敵に対してどう向き合う？」

何気ない問い。幼い優に大した答えを期待はしていなかった。だがあの子の答えに私は慄然した。

「分からない。」

「分からない？」

「もし、その敵と分かり合えるなら助けと思う。」

「む。ならば分かり合えなければ？」

「・・・・。」

長く、本当に長く悩んだ末に優は答えた。

「分かり合えない敵を助けて、家族や友達に害が及ぶなら僕は・・・。」

僕は殺すかもしれない。そう答えた。その時私は気付いたのだ。優の中の覚悟に。

『殺す覚悟』

それは、およそ五歳の子供がするものではない。言葉だけならば何かテレビや本の影響だと思えただろう。しかし優の眼は死というものを直に感じ取った眼だ。命の遣り取りをしなければこの眼はできない。

だから私は思い至ったのだ。この子には武を教える前に教えなければならぬ。

活人拳の本質『生かす覚悟』を。

だが、どうすればいいだろうか？生憎と私はこの手の思想の指導には疎いうえ、度々家を空けなければならぬ。

・・・そういえば居たな。一人、この手の専門家ともいえる男が。

私の頭に浮かんだ友人・・・漂々とし、いつも何かを考えているようなちよび髭の男。

『哲学する柔術家 岬越寺 秋雨』

彼に預けてみるのもいいかもしれない。

優視点

転生して十六年が経った。

「もう嫌だ！父さん！何で俺だけ来る日も来る日も基礎鍛錬なんだよ！？いい加減技とか教えてくれい！」

今日は珍しく家にいる父さんに俺は直訴した。

「いや、まあ、跡継ぎには始も居ることだし。お前はそんなに頑張らなくとも良いんだぞ？」

バツが悪そうにはぐらかす父さん。だが俺は力を付けていたい。あの日のような惨劇に抗うために。

「だったら独学でも学ぶ。」

いざとなれば何処か入門できる道場でも探そう。今よりはマシな鍛錬はできるだろう。

「ふう……。仕方が無い。」

父さんは深く溜息を付いてから提案した。

「下手に癖を付けても困るしな。父さんの知り合いに一人、高名な格闘家の師匠が居る。そこで学んでみるか？」

「デケー！そしてボロー。」

俺は父さんに紹介された道場の前に立ち、思わず感想を漏らす。門には梁山泊の看板が付いており、ここが目的の場所だと示していた。

「すいませーん。何方かいらっしやいませんか？」

重い門を開け、中へ入る。

「アパー？どちらさんよー？」

「うお！？」

不意に背後から掛けられた声に驚く。振り返ると、2メートル近い巨人が俺の後ろに立っていた。

「アパ巨人？」

「アパ巨人違うよー。アパチャイはアパチャイよー。」

「ああ、すいません。アパチャイヨーさん。」

「アパチャイヨー違うよ。アパチャイはアパチャイよー。」

「ですからアパチャイヨーさん？」

「・・・うつ。日本語ムズカシイよー。」

巨人は体育座りで拗ねてしまった。少しからかい過ぎたか。

「すみません。アパチャイさん。アパチャイさんは梁山泊の人ですか？」

「そうよー。アパチャイ、梁山泊よー。」

直ぐに立ち直るアパチャイさん。中々気の良い人のようだ。

「そうですか。こちらに岬越寺 秋雨先生は居られませんか？」

「居るよー。秋雨、今、兼一の修行で庭に居るよー。」

兼一？弟子の人だろうか？

「秋雨ーお客さんよー！」

アパチャイさんに中庭に案内へされると、そこには座って優雅に茶を啜る男性が居た。ただし、座っているのは椅子ではなく、俺と同年代の少年の上だ。少年はプルプルと振るえながら腕立て伏せを続けている。

「おや？どなたかね？」

「こんにちは。天道優といいます。」

「おお。君が天道君の息子の・・・」

「はい。父よりこれを預かってきました。」

俺は父さんからの紹介状の手紙を岬越寺先生へ手渡す。

「ふむ・・・。」

手紙を開き、目を通す岬越寺先生。

「フグオーーー！！」

その間も兼一？という少年は腕立て伏せを繰り返している。

「成る程・・・」

手紙を閉じると髭を撫でながら俺をジッと見つめていた。その姿は、

「THE・ナイスミドル。」

「光栄だね。」

フツと笑みを零す。あれ？声に出てた？

「ここではなんだ。中へ入りたまえ。お茶でもだそう。兼一くん、君も暫し休憩だ。」

岬越寺先生は立ち上がり、居間へと進む。俺はその後を付いていく。

「た、助かった。」

後ろではそんな声が聞こえた。

居間へ着くと大きめのちゃぶ台を挟んで俺と岬越寺先生が席に着く。

「あら？お客さまですか？」

襖を開け出てきた、これまた俺と同じ位の年代の少女。あの子も弟子なのだろうか？

「ああ。美羽、済まないがお茶を頼むよ。」
「はい。」

美羽と呼ばれた少女は奥へと去って行った。

「さて、本題だが優君。」
「はい。」

「君は武術の経験は有るのかい？」
「いいえ。自分の道場ではもっぱら基礎鍛錬のみで、此れといった技は教わっていません。」

「やはりそうか。」
「と、いうと？」

「君の身体を見た所、武術に必要な基礎は出来ているものの、身の

「こなしは素人だったからねえ。」

「凄いな。見ただけでそこまで分かるとは。流石、父さんが紹介するだけあって、この人も達人級なのだろう。」

「ところで、君はどんな武術を習いたいのだね？」

「あ……。」

「そいえば決めてなかったな。ただ強くなろうとは思っていたけど、具体的にはノープランだった。」

「正直、決めていませんでした。ただ強くなろうとは思っていたんですが……。ここではどんな武術を習えるんでしょう？」

「ん？まあ、色々と教えてはいるが……。」

「中国拳法はどうね？」

「アパー！ムエタイがオススメよー！強くなれるよー！」

「うおっ！？」

「気が付くと居間にはアパチャイさんと、怪しい中国人な出で立ちの男性が居た。この道場の人たちは何故気配を消して現れるのだろうか？」

「こらこら。お客さんを驚かすものじゃないよ剣星、アパチャイ君。」

「

「岬越寺先生が二人を窘める中、俺は思案した。」

「ムエタイに中国拳法……か。」

「岬越寺先生は何を教えているんですか？」

「私かい？私は柔術だが？」

ムエタイ、中国拳法、柔術。一気に選択肢が増えてしまった。ん？
そういえば先程庭で修行していた彼も柔術だろうか？

「そういえば、先程庭で見かけた彼も柔術を？」

「いや、彼には私も教えているが・・・。」

「兼ちゃんの事ね？彼は三つ全部習っているね。」

「全部！？」

剣星と呼ばれた怪しい中国人さんが補足してくれた。しかし三つ全部・・・。そんな身に付くものだろうか？

「三つ同時に習って習得できるだろうか？と、思ってるね？」

「う・・・。」

俺の思考を読んだかのように岬越寺先生が指摘する。この人は心でも読めるのだろうか？

「心でも読めるのだろうか？っと思ってるね？」

「う・・・。そうです。」

「はっはっは。心配は要らないよ。私達が教える以上、中途半端に終える事は絶対に無い。必ず物にしてみせるよ。」

「なるほど・・・。」

「決まった武術が無いのならば、どうだい？いつその事、君も全部教わってみては？それから興味の湧いた武術一本に絞ってもいい。」
「名案ですね！是非それで！」

俺はその提案に飛び付いた。

手続きが済むと、早速今日から修行を始める様だ。俺は中庭へとやってきた。念のため実家の道着を持ってきてて正解だったな。

中庭では、さつき腕立て伏せをしていた兼一と美羽が縁側でお茶を飲んでいた。どうやら俺にお茶を出した後、こちらにも持ってきたのだろう。中々気の利く娘だ。

「兼一君、喜びたまえ。君にも仲間ができたぞ。」
「へ？」

こちらに振り向いた二人に俺は挨拶する。

「天道優です。今日からこちらでお世話になる事になりました。宜しく。」

「まあ！」

「ななな・・・！？」

美羽が嬉しそうな顔をする。けど、兼一は何故か俺を見て驚嘆している。

「か、かか考え直せー！！」
「え？」

俺に駆け寄る兼一。

「ここの修行は地獄だぞー！！ききき、君みたいな女の子には過酷すぎる！！」

「へ？女の子？」

兼一は俺を女と勘違いしているみたいだ。確かに小さい頃から良く女の子には間違われていたが・・・。

「兼ちゃん、この子は男の子ね。」

剣星さんが兼一を諭す。

「ほ、ホントに？」

「ホントね。胸、無いね。」

そりゃ男だから胸は無いが、見分けるポイントはソコですか剣星さん。

「本当さ。ほら。」

俺は兼一の腕を取り、自分の胸に持っていく。そして触れる瞬間、

「あっ（１オクターブ高い声で）！」

「う　○：×　@＊やー！！！」

一気にパニクる兼一。おもしろー！

「もう！そんなに強く触っちゃイヤ（１オクターブ高い声で）」

「ごごご御免なさいいいい！！！」

慌てて兼一が土下座を始める。

「責任、取ってくださいね（１オクターブ高い声で）」

「せせせ責任！？！」

更なる追い打ちに最早、兼一はしどろもどろだ。

「これこれ、優君。兼一君が混乱しているじゃないか。」

俺は岬越寺先生に窘められてしまう。だが先生、貴方も口元がヒク付いてますよ？

「すみません。あまりに反応が面白くて。」

一応、素直に謝る。まだ横では剣星さんが爆笑しているが。

「兼一君、間違いなく優君は男だよ。」

場を収めるためもう一度岬越寺先生が言う。

「そ、そうでしたか。」

なんとか混乱から復帰した兼一。俺は再度胸を触らせる。

「あっ！」

「ヒッ！！！」

「もうええっちゅうねん！」

剣星さんからツツコミが入る。

いや、被せは笑いの基本だからね？

「天道優です。改めて宜しく。」

「白浜兼一です。宜しく。」

「風林寺美羽ですわ。宜しくお願いしますですわ。」

「コント？が終了し、自己紹介の後は直ぐに修行開始となった。

「取り敢えず優君がどの位やれるのか確認したいので、今回は兼一君と同じメニューで行きたいと思うが、構わないかい？」

「はい。お願いします。」

中略

「ハア・・・ハア・・・終わったか・・・。」

今回は実家でやるように基礎鍛錬だったが、環境が変わるとやはり疲労度も違う。体力に自身は有ったが、ここでの鍛錬は密度が違うようだ。

「はう・・・。」

隣では兼一がグロッキーと化してる。口から魂が抜け出て逝きそう
だ。

「中々やるじゃないか優君。初日でここまで余裕があるとは思わな
かったよ。」

「基礎鍛錬だけは、実家でこなしてましたから。」

「成る程。天道君の指導の賜物だね。」

父さんに感心する岬越寺先生。逆に言えばそれしかやらせて貰え無
かったんだけどね。

「ほら、終わったぞ兼一。」

「はうう……」

兼一に肩を貸して立ち上がる。

結局、この日は帰り道をフラフラ歩く兼一を見て居れず、彼の家ま
で送り届けた。案外近所で驚いたが。

兼一はもうリタイアかと思われたが、帰り際の美羽の笑顔で持ち直
していたので大丈夫だろう。

翌日、高校にて。

「あれ？」

「優君！？」

「まあ！」

通学中、校門の前でバツタリと兼一と美羽に会った。

「なんだ。二人も同じ高校だったのか？」

「今まで出会わなかったのが不思議なくらいですわね。」

「大きな学校だからね。そういう事もあるのかもね。」

そんな話をしながら校舎へ向かった。

「あれは兼一か？」

放課後、緊張した面持ちで空手道場の方へ向かう兼一の姿を見かける。気になった俺はコッソリ後を付けてみた。

「ここからじゃ覗けないか。」

予想通り空手道場へ入っていく兼一。その様子を見守るため道場裏に回り込むと、そこには先客がいた。

「なんだお前も観戦かい？天道優。」

「誰だお前？」

ニヤケ顔で俺の名前を呼ぶ男。何処か掴み所の無い雰囲気で、手にした電子手帳（？）らしき物をピコピコと弄っている。

「天道優。身長169cm、体重60kg。成績は優秀で常にトップ10をキープ。容姿端麗、というか女顔で今月だけでも女子に一度、男子には三度告られる。実は絵画の才能があるも美術部には属さず。ってどこか？」

「説明どうも。」

つてか、絵の事なんて何処で知ったんだ？高校で披露した覚えはないんだが。取り敢えずドヤ顔でこちらを見る男に俺は付け足しておく。

「情報が古いな。身長は今月、夢の170台に到達した。あと、三度じゃなく四度だ。」

「ふむ。成る程成る程。」

ピコピコ

情報を更新しているらしい。

「それで？お前さんはどちらさん？」

「ふっふっふ。俺様はこの学校の情報通。新島春男様だ！あ、これ俺の著書ね。」

自己紹介と共に手渡された本のタイトルにはこう書かれていた。

『ケンカ理論』

「それで？その新島様が何で空手道場を覗いているんだ？」

「恐らくお前と同じさ。兼一だよ。」

「兼一がどうしたんだ？」

コイツも兼一の知り合いなのか？

「奴は空手部の大門寺と退部を賭けて勝負するらしい。フヌケンとまで言われたイジメられっ子の兼一がそこから這い上げれるのか？奴は絶好の観察対象さ。」

「観察ねえ……。」

「おっと、助けようなんて考えるなよ。」

「しないさそんな事。」

確かに人道的には助けるべきかもしれない。が、ここで力を発揮して見せれば一目置かれ、イジメの対象から抜け出せる。幾ら他人が助けようと、最後に自分を救うのは自分自身なのだから。

もし、空手部の人間がやり過ぎるようなら、俺が兼一を抱えて逃げ出せばいい。俺には人一人抱えようと逃げ遂せる自身は有る。伊達に鍛錬だけは積んでいないからな。

「そろそろ始まりそうだな。よっ……と。」

道場の換気用の窓へぶら下がる。

「うぬう……。」

新島はどうしても届かない様だ。

「ほらよ。」

新島の腕を掴み上げ、隣の窓にぶら下げる。

「おおすまねえ。お前良い奴だな。」

「そりゃどうも。」

結果的に言えば、兼一は勝った。八卦掌の歩法、扣歩と擺歩を用いて大門寺を転ばせたのだ。

負けた大門寺が半狂乱で辞めたくないと言っている。

「この試合、僕の反則負けですね。」

泣き喚く大門寺に同情した兼一が言う。空手の技では無いから反則負け。兼一らしいっちゃらしいがそれは火に油つてもんだ。周りの部員が色めき立つ。このままだと、練習と称してリンチが始まりそうなのな雰囲気だ。

「これまでだな。」

「お、おい！」

窓を居りると俺は、新島の制止を振り切り道場へ乱入する。ただし女声で。

「兼一くうん！」

「あ、へ？優く・・・」

「もう、今日は一緒に帰るって行っただじゃない。早く行きま・・・しょー！！！！！」

「ええええええー！！？」

事態を把握していない兼一を引き摺り、道場から逃げ出す。部員達もポカーンとしている。

「おい！早く捕まえろ！！！」

立ち直った部員が声を上げる。

「え！？でも女子相手に・・・」

「馬鹿野郎！！ガクラン着てる女子がいるかー！！！」

へっへー！もう遅せえよ！俺達は大急ぎでカバンを取ると、学校から抜け出した。

何故か抜け出した先で、別れたはずの新島が待ち構えていてフヌケンの汚名を撤回した。

よかったな兼一。少なくとも一人はお前を見直した人間が居たことになる。いや、二人か。俺を含めて。

第一話 転生！入門！梁山泊！（後書き）

書き溜めた内容なので、各話分の長さが安定しなさそう。
最後まで読んで貰えたら光栄です。

第二話 間違いを正す力（前書き）

原作の中にオリ主を挟む難しさに悪戦苦闘。キャラの言い回しとかも確認が必要になってきますね。

マンガ版とTV版がごちゃ混ぜになると思いますので、時間軸の狂いはご容赦の程を。あくまで原作に似た世界（逃げ口上）と言う事で^^^

第二話 間違いを正す力

兼一が大門寺を倒した（反則負けらしいが）翌日、授業の休み時間にクラスを尋ねる。

「あは・・・あは・・・あは・・・」

何故か兼一は鬱っていた。自嘲気味の笑いに隣で美羽が困惑している。

「それから兼一君はお花に水をやり、幸せに暮らしましたとさ・・・めでたし・・・めでたし・・・あは・・・あは・・・」

おお、良い感じにラリってらっしゃる。

「どうしたんだ美羽、兼一は？」

「さあ？私にも分からなくて・・・」

「お答えしよう！！」

「出たな宇宙人。」

しかし新島は俺の言葉をスルーして美羽に自己紹介を始める。

「初めまして。俺様、兼一と優の親友で新島春男と申します！」

「誰が親友だ、誰が。」

会って二日目だろうが。

新島の説明によると、昨日の一件で兼一に目を付けた空手部の筑波副主将が、兼一をシメると息巻いているそう。

「なあんだ。そんな事でしたら兼一さん、やっつけちゃえばいいんですよ。」

美羽は軽く言う。が、大門寺をやっと倒した兼一には荷が重いだろう。俺？俺だったら身体能力にモノ言わせてどうにでも成る。多分・・・メイビー・・・

「ぶつぶつ・・・ぶつぶつ・・・」

・・・少なくとも、この気弱な性格さえ矯正できれば兼一でも良いトコまで行くと思うんだが。

俺と兼一、美羽は放課後、梁山泊で対策を練る事にした。

「それで？その筑波とかいう副主将はどれ位のレベルなんだ？」

「新島さんの話によると、標準的な黒帯クラスですわね。」

「成る程。そうなると兼一には厳しいか。せめてまともな技がもう少し欲・・・し・・・い？」

「じーーーーー。」

なんだこれ。

三人、額を付き合わせて相談中に目の前で俺を凝視する女性がいた。何故か逆さまで。というか天井を歩いてらっしゃる。

「誰……キミ？」

「初めまして。天道優といいます。美人な貴女は何処の天井下がりさんでしょう？」

「ボク……美……人？」

「ええ。まあ、標準的な美的感覚の自分から言わせてもらえば。」

それもかなりのの。

美羽も美人の枠内なのは言わずもなだが、彼女はまた別の方向性を持った美人だ。格好も別方向で、着物姿で胸元を見ると、中に鎖帷子を着込んでいる。背中には刀。

「香坂。香坂しぐ……れ……」

「香坂しぐれさんですか。どうぞ宜しく。」

「ん……」

しぐれさんは小さく頷くと今度は兼一を観察し始める。

「……負け犬。」

「へ？」

「負け犬の目になって……る。」

「ガーーーーーン!!」

うーん手厳しい。そして鋭い。指摘された兼一はしおしおと頂垂れ

てしまった。

「ま、負け犬・・・」

「はっはっは。安心したまえ兼一君。」

どこからとも無く岬越寺先生がやって来た。

「そんな時に効く薬があるよ。」

「本当ですかあ！」

途端に目を輝かせる兼一。

「それは・・・」

「それは？」

「修行だよー!!」

「ギャーーーーー!!!!」

兼一は即効で縛られて連れ去られてしまう。

「やれやれ、どう足掻こうと結局やれる事はそれしかないか。」

俺も二人の後を追う。

次の日の放課後から空手部の部員が、校門を見張っていた。100
%兼一目当てだろうなこりゃ。

「どうする兼一？」

「裏門も待ち伏せですわ。」
「か、かくなる上は・・・」

「いいですか二人とも。これは戦略的撤退ですからね！逃げてるんじゃないんですから！！」

「はいはい。」

「はいですわ。」

校舎裏の金網をよじ登りながら兼一が力説している。意外に逞しい奴だ。美羽も同意見らしく嬉しそうに兼一を見ている。

しかし、マンモス校といえどそう何日も逃げ遂せることはできなかったようだ。俺は校舎裏で対峙している筑波と兼一を見つけた。腑抜けと言われたのを機に戦いを決意した兼一だったが、筑波の正拳突きと回し蹴りにあえなく沈む。

「馬っ鹿！あんなテレフォンパンチ喰らって！」

それでも戦意は失っておらず、懸命に筑波の足を掴む兼一。

「取り消せえええ！！」

「クッ！！離せよクズヤロウー！！」

追い打ちを掛けるように筑波が兼一の腹に蹴りを入れる。俺は駆け出し、筑波の足を踏み付けて蹴りを止める。

ドシュ！！

「もういいだろう。勝負は着いた。」

「なんだあテメエは！？」

「ゆ、優くん・・・」

兼一の声は届くも、俺は筑波から目を逸らさずに言う。

「勝負は着いた。これ以上は無意味だ。」

「チツ！！」

一旦間合いを空け、ファイティングポーズを取り直す筑波。

「まあ、誰でも良い。消化不良だった所だ。今度はテメエに相手してもらおうか。」

ああ。やっぱりそういう流れになるのね。

「フツ・・・お前の相手は兼一さ。いづれ兼一がお前を倒すさ。」

「ケツ！このクズに俺が倒せるかよ。ただのド素人じゃねえか！」

「今はな。だが、人間は進歩する。『男子三日会わざれば刮目して見よ。』だ。」

「馬鹿馬鹿しい！お前もここでぶっ飛ばしてやるぜ！」

いきり立つ筑波。どうしてもここから逃がすつもりは無いらしい。

「仕方が無い。奥の手を使わせて貰おう。」

「奥の手だと!?!」

すうー………

「キャー………!!痴漢よ………」(女声MAXボリューム)
!!!」

俺の悲痛(?)な叫びに周辺の人間が騒ぎ始める。

「痴漢だつて!?!」

「何処だ!?!」

「な!? テメエ!!」

「ほれほれ。早く逃げないと不名誉な罪でしょっぴかれるぜ。」

「クソ! 覚えている!!」

捨て台詞を残して去る筑波。

「もう忘れたよ。」

舌を出しながら、俺は倒れている兼一を担ぐ。

「ゆ、優君。」

「大丈夫か兼一?」

「ま、負けちゃったよ。」

悔しさを滲ませる兼一。

「今回はな。しかしお前は生きてる。生き延びたんだ。生きていれ

「は何度でもチャンスはある。」

「ゆ、優くん……。」

「俺の宣言を嘘にしてくれるなよ?」

「うん。そうだね。」

俺の励ましで幾らか元気を取り戻してくれたみたいだ。このまま梁山泊へ向かおう。あそこなら傷の手当てもできる。

梁山泊に着き、中庭の水道で兼一に傷を洗わせる。

「ダイジョブかよ兼一!」

「派手にやられたなあ!」

それを見守るアパチャイさんと……鬼? もとい、顔に一字の傷跡のある、アパチャイさんと並んでも見劣りしない大柄な男性。

「あのー貴方はどちら様でしょう?」

「ああ!? 誰だこのガキ?」

「アパー! そういえば逆鬼は優と会ってないよー!!」

兼一から俺に目を移す。逆鬼という男性。

「始めまして。数日前からこちらに入門した。天道優です。」

「ああ、そうかお前が秋雨の言ってたガキか。」

俺に受け答えるも、チラチラと凹んでいる兼一を見ている逆鬼さん。気になってしかたないのだろう。乱暴な言葉使いのわりに面倒見の良い人ようだ。

この後、兼一の傷を見た美羽が騒ぎ立てるも、逆鬼さんが、「男には女に見せたく無い顔がある。」と言って引き止めていた。

道場に行くと、兼一が岬越寺先生に傷の具合を見て貰っていて、悔しそうに思いを語った。

「僕はただ、間違ってる事を間違っていると言いたただけなんだ。でも其れを口にしただけじゃ何も変わらない……。だから自分が正しいと思った事を、実際にやろうとしたら……。力が要るんです！」

その言葉をいつの間にか道場の皆が聞いていた。そして……

「良し！！明日より技の稽古に入る！」

そう岬越寺先生が宣言した。

「アパパ！兼一、優！！アパチャイ準備オーケーよ！」

既にグローブをはめたアパチャイさんはヤル気満々である。よっぽど教えたかったんだねえ。

兼一を小脇に抱えて外へ飛び出して行った。

「ゆ、優君助けてえー！！！」

「アパチャイさんあしたからですよー（棒読み）」

「聞こえるかああああー！！！」

第二話 間違いを正す力（後書き）

初日からアクセス数が5000件超え！原作の力を思い知りました。
オリジナルの方は最初三桁以下だったというのに・・・イカン！鬱
ってきた（||。||）

感想、シナリオへのリクエスト等待着てまーす¥^^/

第三話 脱・イジメられっ子！（前書き）

筑波戦決着！

楽しんでいただければ恐悦至極！

第三話 脱・イジメられっ子！

兼一の決意により端を発した技の稽古。俺と兼一は岬越寺先生の前に向き合った。

「では先ず私、岬越寺 秋雨が対空手用の技を教えよう。」

「別に僕は復讐したい訳ではないんですが・・・」

初めての技の練習に戸惑っている兼一。言いたい事は分かるが、対策は取っておくべきだろう。

「ふむ。だが優君、またその副主将が君達を襲う確立は有るのだから？」

「そうですね。兼一の後、俺にも向かって来ようとしてましたから。確立は高いと思いますよ。」

「だろうね。そこで逆鬼君、君からも何かアドバイスを。」

何気に残るで佇む逆鬼さんに岬越寺先生が話を振る。

「俺は弟子は取らねえ主義だ！」

「『』なら、何故ずつとそこに居る？」「『』」

師弟の考えが揃った瞬間だった。

「先ずは投げ技からだ。二人ともこの投げられ地藏グレートを使って練習だ。」

道場の真ん中に、なんと言うか・・・道着を来た等身大の地藏が居た。しかしどの辺りがグレート？

「これは岬越寺先生の自作ですか？」

「お？分かるかい？」

「一応絵画が趣味なモノで。」

「ほほう。私も美術関係には凝っていてね。今度じっくり話してみたいね。」

「ええ。是非。」

そんなこんなで修行は続き、次に習うのは馬剣星先生の中国武術。ここでも逆鬼さんはこちらを見ている。

「兼一、また逆鬼さんがこっち見てるぜ。」

「うん。僕ら嫌われてるのかな？」

「そうじゃ無いみたいだけど・・・」

すると馬先生に注意される。

「これ集中するね。」

「はい。」

馬先生から習った技は攻防一体の技。避けながら相手の足を折り、頭突きを繰り出す烏牛擺頭。

手本の相手に美羽が呼ばれるが、頭突きの代わりに頭でグリグリと胸を弄る馬先生。そして美羽に怒られ逃げていく。

「兼一。」

「何だい優君？」

「この技だけは完璧にマスターしようぜ。」

「ああ！そうだね！」

「せーの、ハッ！」

「グリグリ・・・グリグリ・・・」

「わーん！お二人が馬さんに毒されていきますわー！！！」

嘆く美羽を尻目に俺達の修行は続く。グリグリ・・・

「よし！次はアパチャイの番よ！」

「きゃーーーー！！！」

アパチャイさんの姿を見るなり逃げ出す兼一。が、しぐれさんの鎖鎌に捕まり引き戻された。アパチャイさんの修行は単純にミット打ちなのだが、先に始めた兼一はカウンターの一撃で沈む。

「兼一ーーーー！！！」

「やつぱり、手加減を知らないんですね。」

「仕方ないよー！次、優の番ねー！」

冗談じゃない。あんなパンチ喰らったら俺もヤバイ！俺は兼一と逆に、あえてしぐれさんの背後に隠れる。

サッ・・・ササッ・・・

「どうしたよー優？なんで隠れるよー？」

「流石にアレは死にますよ！しぐれさんバリアー！」

「バリ・・・アー？」

「そう、両手広げてバリアー！」

「バリアー。」

何やら面白いのか、素直に従ってくれるしぐれさん。この人案外ノリが良い。

「うーん。アパチャイ君の授業は手加減を覚えてからにしようか。」

ここで兼一の容態を見ている岬越寺先生から待ったが入る。ナイスタイミング。そして兼一よ君の犠牲は忘れない。

そんな感じで修行の日々が続くと、在る日修行を眺めていた逆鬼さんが兼一に声を掛けてきた。

「おい、ガキ。中々頑張るじゃないか。正直、三日と持たないと思ってたぜ。褒美に俺も一つ技を教えてやるぜ。」

「おや？君は弟子を取らない主義じゃなかったかい？」

そう言つて茶々を入れる岬越寺先生。

「今日は特別なんだよ！今日は・・・」

「今日は？」

「今日は俺の誕生日なんだ！」

「「嘘付くのメチャメチャ下手！！」」

しかし、羨ましい。羨ましいが、仕方ないので地蔵の陰から窺うことにする。

「じーーーーー」。

チラリとこちらを見る逆鬼さん。

「じーーーーー」。

「・・・・」。

「じーーーーー」。

「・・・・」。

「・・・・空手かあ（ボソリ）。」

「分かった分かった！オラ！そっちのガキも来い！」

痺れを切らした逆鬼さんが俺を誘う。

「え！良いんですか！？何だか催促したみたいで気が引けるなあ。」

そう良いながらも嬉々として付いて行く。

「ったく、白々しい奴だぜ。」

修行を始める前に逆鬼さん、いや教えて貰うので逆鬼先生に訊かれる。

「お前ら、どの位強くなりたんだ？」

その問いに兼一は、「いつか、大事な友達を守ってあげられるくらいに」と。

俺は「誰も目の前で死なせないくらいに」と。
だが、爆笑する逆鬼先生。そして返す言葉は、

「バツキャロー！男なら世界最強ぐらい言つてのける！！」だった。

『世界最強』

それだけの力があれば、守れないモノは無いかもしれない。

例えそこに辿り付けないとしても、そこを目指し、近づければ確実に救える命は増える。俺の中の疑問が一つ、氷解した瞬間だった。

兼一も無くした自信を取り戻していた。もはや負け犬の目は何処にも無い。

逆鬼先生に師事してから数日後。思いの他、再戦は早かった。ケンカに負けた不良を美羽が介抱している所に筑波が絡み、それを兼一が制止したというのが成り行きだ。俺は校舎の塀に座り、戦いを見届けることにした。

「またデメエは観戦か？」

筑波が俺を見上げる。どうやら一度倒した兼一よりも筑波の関心は俺に向いているようだ。

「ああ。そうだ。言っただろ？お前は兼一が倒すんだよ。」

「舐めやがって次はもう容赦しねえぞ！覚悟するんだな。そして次はお前だ。前は上手く逃げられたが今回は逃がさねえぞ。」

「何言つてんだ？逃げたのはそっちだろう？」

クククツと挑発気味に嘲笑う。

「クソが！調子に乗りやがって！」

いいぞいいぞ。怒ってる怒ってる。兼一、相手は頭に血が上っている。しかも一度勝った事で油断している。絶好の機会だ。これを逃す手は無いぜ。

そしてケンカは始まった。

「うおおおおおー！！！」

「うふっ！！！」

何と、一撃目に逆鬼先生から教わった山突きが筑波の腹にクリーンヒット！！

「よぉーし！」

俺は思わずガッツポーズ。

「ぐっ・・・おお・・・」

これは効いてる。鳩尾入ったか？

「や、山突きだと！？こんなもん試合に使う奴はいないぞ。」

「これは試合じゃない！ケンカです！」

「死なす！！」

筑波が不用意に蹴りを放つも、それを避け兼一が烏牛擺頭を決める。が、直ぐに極めを離す。折れる前に離れたのか。本当に優しい奴。しかし直ぐに勝負は決した。筑波の力んだパンチを掴み、兼一の背負い投げが決まったのだ。

「大丈夫でしたか？」

美羽が傍に駆け寄り、俺も塀を降りる。

「良くやったぜ！一方的だったな！」

俺と美羽は兼一に称賛を送った。

その後、保健室に筑波を届けて俺達三人は帰途に着いた。

梁山泊にて、勝利の報告をした兼一だったが、次ぎの日その顔は浮かないものだった。

「はぁ……」

「どうしたんだよ兼一。元氣無いな。昨日の勝利でもう不良に絡まれる心配は無いだろう？」

「優さん。それがですわね……」

美羽の説明に寄ると、筑波と繋がりがあった不良グループが兼一に目を付けだしたという。

そして、実際に動いている奴らは『技の3人衆』と呼ばれ、不良の中でも一目置かれる存在だそうだ。

「上手い事行かないものだなあ。」

筑波とのケンカで兼一をイジめる人間は居なくなったが、その名声がさらに危険を呼んでしまった。皮肉なものだ。

「号外！号外だよ！」

「新島じゃないか。」

何やらチラシを撒きながら練り歩く新島。まるで瓦版だ。

「よお！お三方。」

「今度は何をしているんだ？」

「これさ。これ！」

新島から渡されたチラシには、昨日のケンカの詳細が事細かに記されていた。

「ノオオオオー！！！」

大急ぎで撒かれたチラシを広い集め、兼一が新島に喰って掛かる。

「どういっつもりだー！」

「怒るなよ兼一い。親友の出世を宣伝するのは当然だろう？」

さも当たり前のようにうそぶく新島。まったくコイツは何がしたいんだろうな。

「む！？兼一、隠れる！」

「え！？」

不意に新島が声を上げ、兼一は俺と美羽の背に姿を隠す。新島の目の先には男子生徒が三人。

先頭の男が新島の撒いたチラシを拾い読み、呟く。

「ふん！筑波のマヌケめ。ラグナレクの面汚しだ。」

そついうと、投げたチラシを空中で粉碎した。

「ひえっ！」

後ろでビビッた兼一の声がする。かなり速いな。身のこなしからしてボクサーか？後ろの男の内、デカイ方は明らかに柔道体型。もう

一人は・・・知らん。敢えていうならチビ。

「筑波はシメろ。兼一はキサラ様が連れて来いとのことだ！」

「おう。」

「はいよ。」

指示を受けた二人は行き、先頭の男も歩き去った。何とか見つからずにすんだか。

「僕を探してるよ！見つかったら袋叩きかなあ・・・」

「お友達になりたいだけでは？」

「んな訳ないでしょ！」

美羽のボケた発言に強くツツコむ兼一。

「うう。怒鳴られた・・・」

涙目の美羽。スマン美羽、流石にフォローする気が起きん。

「アレが不良グループ、ラグナレクの連中だ。」

「アレが・・・。」

「兼一大変だなあ。お前、目立ちすぎたからな。今頃街中でラグナレクの兵隊がお前を探してる筈だぜ。」

「いや、目立つ宣伝をしたのはお前だろ。」

「そつだ！！全部お前が悪いんだー！！」

再び兼一が新島に喰って掛かる。

「まあ、落ち着け兼一。友人としてアドバイスしてやるぜ。」

「アドバイス？」

「医療費は十万円を超えると、税金から控除されるらしいぞ。」
「ガーーーーン!!!じゅ、十万……」

打ちひしがる兼一。やっぱ新島の助言なんて碌な事じゃねえな。

第三話 脱・イジメられっ子！（後書き）

中々主役の戦闘シーンまで行き着かない。殆ど解説に回ってます。仕方ないですね。対筑波戦は兼一のイジメられっ子脱却の儀式なので、邪魔する訳には行かないということで。

第四話 新島春子と申します（前書き）

短いかも。ほぼギャグです。

第四話 新島春子と申します

「たまの休みというのは良いもんだ。」

日曜日、久しぶりに修行も休みを貰った。俺の休みはオマケで、メインは自信を無くした兼一のために美羽とのデートだとか。べ、別に羨ましくなんかないぞ！一人で街に繰り出す自分が虚しいなんて少しも思っていないぞ！本当だぞ！

「嗚呼、しぐれさんでも誘えば良かった。そうすれば兼一たちとダブルデートも出来たのに。」

言っても仕方無いので、本来の目的地を目指すとする。行き先は画材屋。前世からの趣味だった絵描きをそろそろ再開しようと思ったのだ。理由は色々あるが、一番は梁山泊での出会いだろう。先生達や兼一、美羽と関わる事で、少しずつ過去のトラウマを克服している。

「必要なのはキャンパス、絵の具、鉛筆に・・・」

「君、可愛いね。何処行くの？ボク達と遊ばない？」

俺に話し掛けて来たのは、校内で見たラグナレクの技の三人衆の一人のチビ。それと取り巻きが4〜5人。

「どうしたの？訊いてる？」

どうやら俺を女と間違えてナンパしているらしい。俺は敢えて乗っかってみた。

「はい、突然で驚いただけですう（裏声）。」

「そつかあ。それでどう？俺達と遊ばない？」

「御免なさい。行くところがありますからあ（裏声）。」

「何処行くの？連れて行って上げるよ？」

なおも食い下がってくるチビ。

「あのお、画材屋に買い物に（裏声）。」

「じゃあ俺達が連れて行ってやるよ。」

コイツしつこつ！

「いえ、そんな悪いですよ（裏声）。」

「いいのいいの。何だったら俺が買ってあげるよ？」

「マジで!？」

「え？今何か変な声が・・・。」

いかんいかん本音が出てしまった。

「コホン。でもご迷惑でしょう（裏声）。」

「ダイジョブダイジョブ。俺達この辺じゃ知られた顔なんだぜ。小遣いには不自由してないから。」

どうせカツアゲした金だろ。丁度いい。ついでにラグナレクの情報でも引き出そう。

「それじゃ、お願いしちゃおうかなあ（裏声）。」

「ヒヤホー。ラッキー。そんじゃ行こうぜー!」

「はい（裏声）。」

「ところで君、名前は？」

「新島春子と申しますう（裏声）。」

「今日はありがとうございましたあ（裏声）。」

俺はラグネレクのエスコートで休日を楽しんだ（笑）。

「ええっ！もう行っちゃうの？」

不満気なチビ（古賀というらしい）に済まなそうに答える。

「御免なさい。お家の門限が厳しくてえ（裏声）。」

「それじゃ、代わりに電話番号教えてよ。」

「いいですよお（裏声）。」

教えたのは当然新島の番号。春子じゃないよ。春男の方だ。

「それでは、失礼しますう（裏声）。」

「じゃーねー！！」

姿が見えなくなるまで手を振る古賀。はよ行け。

「いやー実に有意義な休日だった。」

高い画材も買って貰え、ラグナレクの情報まで手に入った。本当に男って馬鹿な生き物だ。おっと、これは悪女の考えだった。俺は男だけだ。

「しかし、待てよ・・・」

ホクホク顔の俺だったが、思い返した事実には愕然とする。

「せつかくの休日が男とデートってどうよ？」

兼一が美羽とイチャついているときに俺ってやつはOTL

後日、ラグナレクの情報を流しに行くと新島が不思議そうに唸っていた。

「うーん。」

「どうした新島。」

「天道か。昨日、俺様の所にラグナレクの古賀という男から電話があつてな。直ぐに切れたんだが・・・何処から俺様の情報が漏れたのか・・・」

「そうか。情報管理は徹底しておけよ。」

「勿論だ。しかし春子とはいいたい・・・」

「・・・・。」

新島に古賀から得た情報を教えると、報酬に本をくれた。

タイトルは『可愛い子猫100選』。

なんでやねん。

要らないので美羽にあげると大変喜ばれた。兼一、美羽への贈り物をするなら猫関係だ。

第四話 新島春子と申します（後書き）

優は女顔ですが、コンプレックスは無いです。寧ろ活用してる感じ
です。

オリ主設定（前書き）

一応書き出してみました。

オリ主設定

キャラ設定

天道 優てんどう ゆう

高校一年生

前世で彼は残忍な方法で殺される。それは家族、親友、恋人を自らの前で縊り殺されるというもので、死んだ後も心を壊す程の強烈な記憶となってしまう。

神によって幾度も復元されるも、魂が記憶に耐えられず崩壊を繰り返す。結果、その魂はまったくの別物へと変化。輪廻の輪を介さずに新しい命を得た。

外見は黒髪黒目。女顔では有るがそれを恥じてはおらず、寧ろ積極的に活用しようとする。

性格は温和で優しいが、敵対者、特に命を軽んじる者には容赦がない。兼一曰く「梁山泊で一番怒らせていけないのは岬越寺師匠。新白連合で怒らせてはいけないのは優」との事。

転生後も死んでいった者達の事を覚えていたいと、記憶の消去を拒否。皮肉にもそれが元で彼の目は悲しみを湛えている。

武術の才能に恵まれており、共に修行する兼一は度々才能の違いに凹まされる。

前世から趣味の絵画を始めるが美術部には属さない。成績は優秀で

常にトップ10入りしている。

使用武術

柔術・空手・ムエタイ・中国拳法・剣術（主に刀）。

オリ主設定（後書き）

プロットとか書かない方なんです。行き当たりばったり至上主義！

第五話　じじいとネズミと妹と（前書き）

ようやく梁山泊の人間全てと顔合わせが済みました。

第五話　じじいとネズミと妹と

「壁？」

梁山泊の門をくぐるとそこは壁でした。

「おや？お客さんかな？」

「壁が喋った！？」

「壁じゃなくじじいじゃよ。」

見上げたそれは、規格外にでかいお爺さんだった。もしかしてアパチャイさんよりでかい？

「ワシはこの梁山泊の主、風林寺　隼人じゃ。皆からは長老と呼ばれておる。お前さん、お名前は？」

「なるほど貴方が美羽のお祖父さんですか。初めまして、天道優といます。」

ぺコリと頭を下げる。

「ホッホッホ。礼儀正しいのお。君の事は皆から聞いておるよ。ワシは度々、家を空けておつてのう、会うのが遅れてしもうた。済まんかったの。」

「いえ、それは作者の限界……もとい、他の皆さんには善くして貰ってますから。」

「そうかそうか。立ち話もなんじゃ。入りなさい。」

「はい。」

「優ちゃん今日は一人かね？」

道場に入ると、馬先生が一眼レフ片手に俺を向かえた。

「今日は二人は部活ですから。」

俺は部活に入っていない。なので、部活の日は先に道場に行く事がある。

カシャ、カシャッ！

馬先生がシャッターを切る。被写体はしぐれさん。

ザクッ！

きわどいショットを撮ろうとしたカメラに、しぐれさんの手裏剣が突き刺さる。

「れ、レンズがー！！」

「はぁ、懲りませんね馬先生。」

「優ちゃん、男がエロに懲りるときは死ぬときね！」

むう、素晴らしい信念だ。内容は兎も角。

「そんな馬先生にプレゼントです。お納めください。」

「ん？何ね？・・・こ、これはー！？」

渡したのは、俺が試し描きに描いた美人画。モデルはしぐれさん。

「優ちゃん！いつの間にこんな物描いたね？良くしぐれどんがモデルを許したね。」

「フツ・・・甘いですね。馬先生。俺は一度見たものはどんな表現も可能なですよ。」

説明しよう！天道優は転生人間である。彼は脳内で想像（妄想？）したものを自由にキャンパスに表現できるのだ。

「しかしこの絵……。憂いを秘めた表情と、決して露出度が高くないのに漂う色香……。」

「ご満足いただけただけでしょうか？」

「優ちゃん！おいちゃん、これほど弟子を取って嬉しかったことは無いね！この絵は永久保存版にするね！」

俺の手を取り、感動の涙を流す馬先生。

「喜んで頂き光荣至極。つきましては、修行の際はより実践向きな技のご教授を。」

「優ちゃんも中々悪ね。」

「お代官さま程では……。」

「フツフツ……。」

「フツフツ……。」

傍からみると気持ち悪い二人。

「ホッホッホ。仲良くやれておるようで結構結構。」

長老に会い、これで梁山泊の人間全てに会ったと思っていたが、一人・・・いや、一匹残っていた。

ネズミである。今、しぐれさんの肩の上でふんぞり返っている。

「・・・闘忠丸。」

「彼の名前ですか？」

「・・・そう。」

「宜しく闘忠丸。」

「チュー!!!」

「挨拶が遅い・・・と、言って・・・る。」

「それは失礼。」

何気にプライドが高そうだ。だが仕方ないだろ？ネズミに挨拶する日が来るとは思わなんだ。

「では、少々待たれよ。」

カバンの中から画材を出すと、サラサラと描く。どんな絵かといえば、兵を率いるジャンヌダルクの絵画の模倣だ。ただ登場人物が皆動物。そしてジャンヌダルクは闘忠丸。それも美化180%増量版劇画タツチ。

「闘忠丸殿。今回はこれでご容赦を。」

絵を渡す。

「チュ、チューーーー!!!」

「こ、これはー！・・・と、言って・・・る。」
「ヂューー！」

「特別に許す。と、言って・・・る。」

「喜んでもらえたか。」

兼一と美羽が帰って来た。兼一は早くラグナレクと戦えるようになる為にと、相談の結果土日は梁山泊に泊り込みで修行するそうだ。

「それなら長老、俺も泊まり込んでいいですか？」

「ほう。優ちゃんもやる気十分じゃな。」

「兼一には負けてられませんから。」

「構わんよ。部屋は空いとるからのお。」

こうして、梁山泊への泊り込みが決定した。

泊り込み初日。

「岬越寺先生。これは何ですか？」

怪しい器具に固定された兼一が疑問を投げ掛ける。

「これは私が独自に開発した柔軟マシン！股割り君グレート！」

「またもグレート。」

「身体の硬い武術家など居ないからね。その証拠に優君を見たまえ。」

グニューー

俺は練習前の柔軟体操を始めていた。足を百八十度開脚で前屈中だ。

「うう・・・柔軟性でも優くんに負けている・・・」

「まあ、俺は昔からやってたからな。」

「僕が優君に勝っている所は有るのだろうか・・・。」

「ええっと・・・」

顔をききつらせて言いよどむ美羽。代わりに俺が答える。

「有るに決まってるだろ。」

「具体的には？」

「具体的には・・・優しさ？・・・とか。」

「何故に疑問系！？そして少な！」

セティングが終わった岬越寺先生が話を進める。

「準備オーケーだ。美羽、押してやりたまえ。」

「はい。」

ギリギリギリ・・・

「ギャー！ムリムリー！！」

だが、しばらくすると兼一は大人しくなる。

「おお！羨ましい奴。」

構造上、くっ付かねば押せない器具。自然と兼一の背中に美羽の胸が押し付けられる。それゆえ兼一は痛みと快感のジレンマに陥っている。

ムニユ・・・ムニユ・・・

「と、テレビアーン・・・」

クツ・・・分かるぞ兼一、その複雑な心境。

「ハッ！まさか岬越寺先生、そこまで計算に入れて？」

「フツ・・・分かるかね？」

「恐ろしい・・・。」

その後、兼一は柔軟。俺は岬越寺先生から小手返しの指導を受ける。

「お兄ちゃんをイジメるなー!!」
「え!?!」

しばらくして突如、道場に何者かが乱入。美羽を兼一から押し退け、威嚇する。

「ほのか!?!」
「おや?お客さんかね?」

突然の珍客にも、落ち着き対応する岬越寺先生。

「い、妹です。」
「わー!兼一さんの!?!可愛いですわー!?!」

既にメロメロな美羽。兼一は困り顔だ。

「へー兼一に妹が居たのか。」
「ぬおー!?!」

兼一の妹、ほのかが美羽と俺を交互に見つめる。

「・・・。」
「どうした?」

一変して黙りこくる。

「読めたのだ。」
「へ?」

「お兄ちゃんはこの二人に誑かされていたのだ!?!」

「はー！？」

つまり、ほのかは兄の様子を見て、女二人（俺は男だが）に誘惑されてここに居ると勘違いしたのか。

兄妹で俺を女と間違っ辺り、血縁を感じさせる。

「ガルルルル！」

威嚇するほのか。なにこれ、可愛い。

そして同時にイタズラ心が湧いてくる。俺は瞬時に移動すると、ほのかに見せ付けるようにして兼一にしなで掛かる。

「もう、兼一君ったら！こんな可愛い妹さんがいるなんて。教えてくれれば良かったのにい。優ちゃんか・な・し・い（裏声）。」

「いー！？」

「えー！？」

何故か美羽まで驚きの声をあげているが、構わず続ける。

「もう！私と兼一君の間に隠し事はないしよお（裏声）。」

「お兄ちゃんに近づくなー！！」

「へへーん。捕まえてごらんなさーい（裏声）。」

俺は兼一を担いで逃げ回る。うーん、イジリ甲斐が有る所もソックリだ。散々構ってやると、お土産を置いて帰って行った。

「先程、兼一さんと優さんの後ろに薔薇の花が見えましたわ・・・。

」

「イカン！美羽、帰って来い！そっちは行ってはいけない領域だ！

！」

日が暮れると、昼間姿を見せなかったしぐれさんが帰って来た。

「しぐれさん。おやつに兼一の妹が持って来たカステラがありますよー。」

「妹……?」

「ええ。中々可愛い子でしたよ。その子が持って来たお土産のカステラですよー。食べませんか?」

「うん。後で……食べ……る。」

どうやら、着替えにでも戻るようだ。

「待ってますよー。」

「うん……。」

スタスタと足早に自室へ帰るしぐれさん。

「ホッホッホ。優ちゃんと兼ちゃんが来てから皆が明るくなった様じゃのう。」

満足気に髭を撫でながら長老。

「そうですか?」

「本当じゃよ。特にしぐれはお主の事を気に入っておるようじゃの

う。」

「マジで！？俺、浮かれちゃいますよ？ヒヤホー！」

「ホッホッ。しかし、女の方が強いというのも男として格好付かんじゃろ。」

シオシオと萎れる俺。

「うう・・精進しますよ。」

「うむ。その意気じゃ。」

「って、長老！何、カステラに手を伸ばしてるんですか！？フライングですよ！」

「いけずじゃのう。」

後日談 白浜家にて

「兼一、あなた、彼女が出来たそうじゃない。」

兼一の母、さゆりが兼一をからかう。

「か、彼女（美羽さんのことかな？）？そ、そんなんじゃないよ。」
「彼女だ！？ふしだらな女なら父さんは許さんぞ！」

兼一にやたら過保護な父、元次が声を荒げる。

「それで！？どんな娘なんだ？」

「ほのかの話ではとっても綺麗な娘で、名前は確か・・・優ちゃんとか。」

「・・・！！！」

「アラ？どうしたの兼一？」

「ご、誤解だーーーー！！！」

白浜家に響く絶叫！はたしてこの小説はやオイ編に突入するのか！
？続かない！！

第五話　じじいとネズミと妹と（後書き）

爆裂

「どうも爆裂です！」

優

「こんにちは。優です。今回は『白夜叉と鈴鳴の鬼』からゲストが来ております。どうぞ！」

光軍

「いやいや、お呼び頂きまして。」

洋基

「やあ。洋基やで。」

爆裂

「何故後書きにお呼びしたかと言いますと、事の始まりは光軍さんから感想を頂きまして、爆裂からコラボを申し込んだという訳ですな。」

優

「そして今回はその告知だと？」

爆裂

「そう。」

洋基

「という事は、もう内容は決まっとんの？」

爆裂

「.....。」

優

「まだみたいだ。」

爆裂

「仕方が無いじゃん！コラボなんぞ初めてな上に、残ってるストックの何処に挟めば良いか分からねえんだから！」

優

「それで良く企画発表したな。」

爆裂

「そうでもしないと踏ん切りが着かなそうだったからな。」

光軍

「自分を追い込んでみたと？」

爆裂

「その通り！打たれ弱い俺がコラボなんかして、読者や光軍さんに失礼がないかと考えたら、PCの前でガクブルな訳ですよ。」

洋基

「まあ、そう硬くならんと、気楽にしいや。」

爆裂

「おお。いい奴だな君。本編ではオイシイ役回すからな。」

洋基

「頼むで（ニヤリ）。」

光軍

「（ハッ！？コイツ計算ずくか！！）」

爆裂

「優は死体役ね。」

優

「はああ！？何処の世界に主役が死ぬコラボがあんだよ！？」

爆裂

「作者はキャラにとっては神なのだよ！という事で、コラボは番外編と表記すると思いますので、読者の方々、興味がありましたらご覧下さい。」

爆裂・優・光軍・洋基

「」「」「どうぞ宜しく。」「」「」

洋基

「『白夜叉と鈴鳴の鬼』も見てや。」

解説マン

「『そう言いながらも不安を胸に虚勢を張る一同であった』」

爆裂・優・光軍・洋基

「「「「「うっざあああああああああああ！」「」「」

第六話 通りすがりの最強の弟子（前書き）

続けざまに投稿。ネタに走りすぎかも？

第六話 通りすがりの最強の弟子

馬先生の修行が始まった。

「次は、突きを速くする練習ね。手をこう構えるね。」
「こうですか？」

俺と兼一も構える。両手を挙げ、片方の手を前に、もう片方を後ろに突き上げる構えだ。

「次に肩を入れ替えて、腕を下から上に振るね。完全に力を抜いてね。歩きながら交互にね。」

その練習に、馬先生の指示で町内を一周する事に。

「くすくす・・・くすくす・・・」

異様な動きに商店街を通る人たちがこちらを笑う。

「うう・・・苦しいというより恥ずかしい。」
「まっただ。」

俺達は恥ずかし気に、それでも手を抜かずに練習を続ける。すると美羽が追い付き、同じ構えを始める。

「美羽。」

「美羽さん。」

「お付き合いしますわ。」

良い娘だ。

商店街を抜けて、空き地に差し掛かったとき、俺達を待ち構える人物が居た。

「見つけたよ白浜兼一！」

「ゲッ！」

そこに現れたのはラグナレクの古賀。と、その取り巻き達。顔を見られては不味い。とっさに顔を逸らす俺。

「武田さんに君を連れて来いって言われててさあ。けど、ただ連れて行くだけじゃ面白くないからね。適当に痛めつけてやるよ！」

古賀が兼一に襲い掛かる。

「気を付ける兼一！古賀の得意は蹴りだ！」

「分かった！」

何とか初撃を避ける兼一。しかし不味いな。今回は敵も多い。俺も闘いに参加しなければならんだろ。どうにか顔を隠さなければ……ん？足元に倒れていたゴミ箱の中にヒーローのお面。しかも・

・・・

「これは!？」

「死ねえー!!」

兼一と古賀の鬪いに空気の読めない雑魚が割って入り、兼一に殴り掛かる。俺はそれを飛び蹴りで吹き飛ばす。

ドガッ!!

「空気を読めよ雑魚が!」

「チッ! 誰だお前!？」

ナイス振りだ古賀。待ってましたとばかりに俺。

「俺か? 俺は通りすがりの仮面ライダーだ! 覚えておけ!」

「へ?」

「・・・。」

シーーーーーン

どうやら俺の華麗過ぎる登場に、ラグナレクの連中は心を奪われて
いるらしい。

「カッコイイですわー!!」

美羽の評判は上々だ。

「ぼさつとするな兼一！来るぞ！」

「分かった！」

他の雑兵を片付けるため、俺と美羽は背中合わせに敵と対峙する。

「美羽、そちら側は任せるぞ？」

「はいですわ！」

散開し各々の敵に向かう。

「オラァー！！！」

雑魚のパンチを逸らし、

「（アノ声で）ATTACK RIDE! RYOZANPAKU!
SAKAKI！」

ドゴー！！

カウンター気味に正拳突き。

「ぐはっ！」

「まだまだあ！！（アノ声で）ATTACK RIDE! RYOZANPAKU! APACHAI! ティー・ソーク！」

ムエタイ式肘打ちが決まる。

「舐めやがつて!」

「（アノ声で）ATTACK RIDE! RYOZANPAKU!
AKISAME! 背負い投げ!」

ドシャ!

「ぐふっ!」

俺の頭の中で鳴り響くのはガックンのあの主題歌。

「テンション上がってきたぜー!」

ドカツ! バキ! ズガン!!

「うおー! マリスミゼル復活希望!」

ディケイドの活躍は続く。

俺達が雑魚を片付けたとほぼ同時に、兼一が古賀を倒した。

「か、勝った...」

「ナイスファイト兼一。」

「ご苦労様ですわ。」

無事窮地を脱したのに、兼一は不満そうだ。

「でも二人が十人以上倒したのに、僕は一人だけ……。」

「そんなことは無いぞ。この古賀は新島が言っていた技の3人衆の一人だ。他は雑魚だったし。このまま修行を続ければ残りの三人もイけるかもな。」

「本当！？やったー！ところで優くん、そのお面は？」

「気にするな。こっちの事情だ。」

「そう……。」

「頼む。天道君！展示する絵画が足りないんだ。君の力を貸してくれ！」

放課後の教室で、美術部の田中がそう言っただけに頼み込んできた。毎月掲示板に載せる絵が不足していると言う。

「えー。そんなもん先々月の絵でも載せときゃいいだろう？誰も気付かないって。」

「そうも行かないんだ。生徒会が各部の活動状況を調べ回ってるから、バレると予算を減らされるんだ。」

「……デッサンで購買のタコヤキパン五個。水彩だと十個で手を打とう。」

「うぐ・・・デッサンで。」

「ケチ。」

「こっちも厳しいんだよ。」

こんな所にまで不景気の波が押し寄せているのか。

「モデルはなんでも良いのか？」

「任せるよ。ただ、出来れば季節を感じさせるものが良いな。」

「りょーかい。」

季節といえば景色？動物？花？今がシーズンの花って何だろう？丁度いい。園芸部に行って兼一に訊いてみよう。

「何を描こうかな。」

「キヤー！！止めてえ！！！」

「む！女性の悲鳴が！？」

園芸部のビニールハウスに向かう途中、女子生徒の叫び声が聞こえて来た。

そこには兼一と、女子生徒を羽交い絞めにしながら相對する大門寺と、その仲間数名。

大門寺は手に持った白浜専用と書かれた鉢植えを、叩き付けようと振りかぶる。

「てい！」

ズザー

「ナイスキャッチ！」

間一髪、鉢をキャッチする。

「おいおい。何をやってるんだ空手部。」

「誰だお前？」

「俺は通りすがりの美術部員（仮）だ。訊いてるのはこっちだぜ。兼一に無様に負けた大門寺君？」

「お前っ！！」

顔を真っ赤に、怒りを露わにする大門寺。

「ほい兼一。」

鉢を兼一に返す。

「ありがとう優君。」

「兼一、あの人質は？」

「同じ園芸部の泉さんだよ。」

「そうか。」

仕返しに人質かよ。という教育受けてんだ。あ、同じ高校だった
OTL

「あ！安永先生！大門寺君が酷い事を！！」

「なに！？」

サッ！

「キャッ！」

注意がそれた瞬間に泉を取り戻す。

「おいおいマジかよ？今時こんな手に引つかかる奴居るのか？」

駄目元でやったら成功しちゃったよ。

「あ！テメエ！！」

「人質くらいしっかり掴んどけよ。空手部、脳みそ足らな過ぎー。」

「ぐぬぬぬ。お前らやつちまえ！！」

襲い掛かって来る空手部員。

「行くぞ兼一！」

「うん！泉さんこれ宜しく。」

鉢植えを泉に渡し、兼一も部員たちを迎え撃つ。

「兼一！あまり暴れると他にも被害が出る。速攻で終わらせるぞ！」
「分かってる！」

ビニールハウスという狭い中だが、大した数でもないので直ぐにケリが着いた。残りは大門寺ただ一人。

「さあて、大門寺君。正当な勝負の仕返しに、こんな姑息な手段を使うなんてんね。オマケに俺の前で植物とはいえ、命を傷付けようとするとは・・・覚悟はいいかい？」

「ヒッ！！」

「こっちでお兄さんとお話しようか？答えは訊いてない！」

「ギャーーーー！！」

意外と被害は少なかった。暴れた片付けを済ませると、兼一に教わった草花をデッサン ついでに気絶した大門寺のマヌケ面もデッサン

「なあ兼一、この似顔絵タイトルはどうしようか？」

「タイトルなんか要るの？」

「俺としては『成れの果て』なんてどうだろう？」

「酷い・・・」

「私は『末路』がいいと思います。」

「・・・辛辣だなあ泉。」

第六話 通りすがりの最強の弟子（後書き）

ツレに「ディケイド面白いね」って言ったら、「今更!？」って言われた。

番外編其の一（前書き）

キャラが増えると総じて表現も難しくなるものですな。

番外編其の一

優サイド

「バイト？」

「そうだ。」

金曜の午後、夕食を食べながら兄貴がそう切り出して来た。

「お前がお世話になってる梁山泊の月謝はウチの財布から出しているんでな。それを働いて返して貰おうという事だそうだ。」

天道流の道場の収入は、門下生の月謝だけでは無い。色んな仕事を請け負って稼いでいる。つまり武術を生かした何でも屋だ。内容は多種多様で、要人警護から工事現場の作業員、犬猫の搜索まで何でも有りだ。ただ例外として、『活人拳』を謳っているので暗殺はお断りしている。

「異論は無いけど、どうして急に？」

「まあ、お前も技を習い始めた訳だし、そろそろ仕事を任せてみようという事らしい。」

「見てもいないのに分かるのかよ。」

「知らないのか？父さん、ちよくちよく岬越寺先生からお前の修行経過を聞いてるらしいぞ。」

マジかよ！？知らなかった。梁山泊紹介して貰ったのは父さんだし不思議は無いけど。良く連絡先が分かったな。偶に旅先から連絡が来るだけで家族も行き先を知らないのに。岬越寺先生恐るべし！

「それで？仕事の内容は？」
「それはな……」

兄さんから聞いた仕事の内容はとある山の調査。今年に入ってからその山では神隠しや、季節外れの濃霧が発生しているらしい。麓の村では祟りだの鬼の袖引きだの言われているそうだ。

「調べても何も出なかった場合はどうすんの？」

「それはそれで構わないさ。依頼者としては一度調査したという事実が有ればそれで良いらしい。体面が保てるからな。その場合は遭難や異常気象と発表するさ。」

「了解。」

「場所が遠いから俺のバイク貸してやるぞ。」

「おお！サンキュー！」

「壊すなよ。」

「ところで山って何処の？」

「確か、妙人山と言ったな。」

洋基サイド

「皆に集まって貰ったのは他でもない。」

深刻な面持ちで話し始めたのは桂 小太郎。仲間を集めた彼は自身

の計画を説明した。

「ここ最近、我らが学ぶこの私塾の財政事情は貧迫しているしている。特に食費がかさみ、そのエンゲル係数は増加の一途を辿っている。そこで俺は考えたのだが・・・」

「グガー・・・グー・・・オバちゃん、イチゴパフェ追加・・・グウ・・・」

「ええい！寝るな銀時！人の話を聞けー！！」

桂は銀時の襟首を掴み振り回す。

「まあまあ、ツラ先輩。そう熱くならんと。」

だが、桂の怒りは宥めようとする洋基にも飛び火する。

「ツラじゃない桂だ！他人事のようだが洋基！問題の食費増加は貴様と銀時が原因なのだぞ！」

「うげ！やぶ蛇やった。」

「貴様が食事に、銀時が糖分摂取に金を掛け過ぎるせいで、この私塾は傾き掛けているのだ！」

怒りの収まらない桂に高杉が冷静に話を促す。

「それで？ツラ、何かお前に名案でもあるのか？」

「うむ。実はとある山で神隠しや鬼が出ると噂が有ってな。麓の村で問題になっているらしい。度重なる訴えにお上も重い腰を上げ、解決した者には金一封が授与されるという。」

「それを俺達で解決しようっちゅう訳やな？」

「そっという事だ。」

説明が終わると、高杉は立ち上がり背を向けた。

「眉唾だな。俺はもう少し現実的な方法を探すぜ。」

そう言い部屋を出て行った。

「ふむ、仕方が無い。ではこの三人で山に向かうとしよう。」

「そんでヅラ先輩。山の名前はなんて？」

「確か、妙人山とか言ったな。」

「本当にこっちの道で合ってるんだろ？ ツラ！」

桂の案内で妙人山に来た洋基・銀時・桂の一行。銀時が入山して何度目かの確認を取る。

「ヅラじゃない桂だ。間違いない。その証拠に段々と霧が深くなっているだろう？ 村人の証言では、その立ち込めた霧の奥深くで事件は起きるという。」

「ヅラ先輩。具体的にはどんな事件があったん？」

「人によつては鬼が出たと言い、また別の者は幽霊だの祟りだのと言う。そして迷い込んだ人間は神隠しのように居なくなる事もあるそうだ。」

だが、銀時は桂の言葉に悪態を付く。

「ケツ！大方この霧もただの異常気象だろ。神隠しも唯の遭難事故に決まってるあ。俺は幽霊やら祟りやらは信じない質なんでね！」

「じゃあ、何で俺の手を握り締めとるん？銀先輩。」

「ああ！？そりゃ、お前がこの中で年下だろうから、氣遣ってやってるんだよ。別に俺は怖くないけどね！」

「そんじゃ、何で手が小刻みに震えとるん？」

「そりゃ糖分が切れたせいで禁断症状が出てきただけ！」

「手もジツトリ汗かいとるし。」

「この頃多汗症気味でね！」

「嘘コケー！糖分不足の禁断症状なんか初耳やで！怖いんやろ！？なあ？幽霊とか祟りとか自分、苦手なんやろ！？」

小馬鹿にする洋基に銀時が反論する。

「ばばば馬鹿！お前！この俺が！？まさか！ありえねえー！」

「白夜叉が幽霊が怖いとは誰も思わんやろなー！聞いたら幻滅やわー！」

「お前いい加減にしろよ！？怖くねえって言ってるだろうが！」

「シッ！何か聞こえるぞ！」

騒ぐ二人を桂が静める。

ブロロロロロ・・・

「まさか本当に幽・・・」

「やめろー！！言うんじゃない！銀さんそういう直接的な表現嫌い！アレはスタンドな？スタンドで行こう！スタンドでお願いします！」

「ではあの音がスタンドが出す音だとして、どうする銀時？音の原因を倒せば事件は解決となるやもしれんぞ？」

だが、及び腰の銀時。

「馬鹿！相手はスタンドだぜ！？俺ら陰陽師とか霊能力者じゃないだ。そうだ！今からその手の奴呼んで退治してもらおう！」

「でもそれじゃ、金一封貰えへんで？」

「ならばコイツで様子を見るか？」

桂が懐から取り出したのは、マヌケな顔をしたコケシのような物体。

「それは何なん？」

「爆弾だ。」

「馬鹿者！爆弾などと無粋な呼び方をするな！コレはジャスタウェイだ！ジャスタウェイはジャスタウェイであってそれ以上でもそれ以下でもない！」

「そんな物騒な物どこで？」

「光軍に貰った。」

さも当然のように言う桂。

「ははは。ご都合主義ご都合主義。深くはツッコまへんで。」

洋基も触れるつもりは無さそうだ。

「ではいくぞ！てりゃあああ！」

桂がジャスタウェイを音のする方へ投げ込んだ。

ドゴーーーーーン！！

優サイド

妙人山に着いた俺は、山の頂上に続く山道を兄さんに借りたXJR 1200で走っていた。だが、いまのところ不自然なものは見当たらない。

「兄さんに聞いた通り、ただ霧が深いだけだな。」

・・・!

「ん?今声がしたような?」

コロコロ・・・

道路にコケシのような物体が転がってきた。すると・・・

ドゴーーーーーン!!

爆発した。

「危な!もう少し進んでたら巻き込まれるところだ!」

コケシが転がってきた方向に数人の男の影が見える。

「おい!今の爆弾投げたのはアンタ達か!?」

声を掛けると、男達が慌てた声を上げた。

「おいヅラ！人間だぞ！一般人爆破してどうする気だ！？」

「はっはっは。何を世迷言を。今の爆発は地下のマグマが噴出しただけだ。俺が投げたジャスタウェイのせいだとどうやって証明する？」

「コイツ最悪だ！惚ける気だよ！いいよ訴えられたら俺は告訴側の証人やるから！お前をアルカトラズに送ってやる！」

「銀時！貴様友を売る気か！？」

「先輩達、とにかく揉める前に謝らんと！」

何やら揉めている二人をもう一人が諫めていた。

「成る程。目的は同じみたいだな。」

洋基・銀時・桂から話を聞いたところ、彼らも俺と同じこの山の異変の調査・解決が目的だった。

「だったら俺も合わせて四人で協力した方が良いと思うんだがどうかな？」

「俺は構わんでー。」

「ああ。」

「異論はない。それで優殿、お主はこの山について何か掴めたのか？」

「いや、山道は一通り見て回ったけど変わった物は無かった。残りは山頂だけだ。」

「ならば一先ず山頂を目指すべきか。」

??? サイド

研究施設らしき場所で機械を見詰め、一人の男がほくそ笑んで居た。

「もう少しで完成だ。これが完成すれば世界はひっくり返る事になるぞ！ふははははは！！」

続いてしまった……。

番外編其の一（後書き）

書ききれずまさかの番外編其の二へ！
こんな感じでどうでしょう光軍さん！

番外編其の二（前書き）

コラボ終了！勉強になりました。

番外編其の二

「なんだろうな。あの建物は？」

俺達は妙人山の山頂に奇妙な施設を発見した。ここまでの道中は俺のXJR1200に無理やり四人乗りで来たのだが、バイク、傷付いてないよな？壊したら兄さんに何言われるか分かりやしない。

「何をやつとんのかは分からんけど、こんな辺鄙な場所に隠すつちゆう事は・・・」

「先ずまともな施設ではないな。入り口にはご丁寧に警備員まで置いている。」

桂さんが洋基の話を継ぐ。

「だが、何をやってるのか分からないと対応がでねえぜ。それともいつそのまま乗り込んでみるか？」

「過激やなあ。スタンド（幽霊）じゃないと分かったら銀先輩やる気満々や。」

「馬鹿言つてんじゃねえよ！俺は相手がスタンドでもやりあってたね！それこそ朝飯前・・・いや朝パフエ前だぜ！」

「静かにしろ成人病予備軍。誰かこちらに来るぞ。」

桂さんの言う通り施設からでた人間が俺達の方へ歩き出した。人数は二人。

「見つかった訳ではなさそうだな。見回りか？」
「そのようだ。」

俺の言葉を桂さんが肯定する。

「ちようどええやん。何の施設かあいつ等から聞き出そつや。」

洋基の言葉に全員が頷き、見回りが俺達の潜む茂みに近寄った瞬間に飛びかかった。

ガサッ!!

「何者っグフッ!.....」

バキッ!

「ガハ・・・!」

一人を俺と洋基が。もう一人を銀さんと桂さんが、それぞれ気絶させる。

「目覚めて騒がれると不味いから、とりあえず森の奥に行こう。」

俺達は気絶した二人を引きずりながら建物から離れる。

「おおーい。起きろー。」

洋基が気絶している見回りの男の頬を軽く叩く。

「ぐ・・・こ、ここは？」

「お？起きた起きた。」

目覚めた男は状況が分からず混乱している。

「なんだ貴様ら！政府のイヌか！？」

「いや、ちゃうけど。」

「そついや、俺達って何なんだ？」

今更ながら自分の立場を再確認しようとする銀さん。

「政府のイヌじゃないし。警察でもないな。」

「善意の一般人とかか？」

「報酬目当てで？」

「違うな。」

皆口々に言う。が、どれも微妙に的を得ていないように思える。

「何でも良いんじゃない？やる事は変わらないし。」

結局コイツから情報を引き出すのが目的な訳で。

「それもそうか。」

皆、途中で面倒臭くなつて考えるのを辞めた。

「まあいい。それより訊きたい事が有る。」

「お、俺は何も話さんぞ！」

桂さんの言葉を男が拒絶する。

「そう言わんで、教えてや。」

「.....」

男は黙秘を貫くつもりらしい。

仕方なく、俺は洋基の前へ出る。

「洋基、ここは俺に任せろ。」

「どないする気や。ゆっちー。流石に拷問はあかんで？」

「ふっふっふ。洋基、人間には我慢できない感覚が二つ有るのだ。

それは『痛み』ともう一つは.....」

「もう一つは？」

「『笑いだ』！」

「ぎゃはははははははー！も、漏れるっっっっっっっー！
」

俺の必殺、『くすぐり地獄』尋問Verが炸裂した。

「なんとも奇想天外な話だ。」

男から訊き出した内容に俺は思わず感想を漏らす。いや、漏らしたのは男の方だが。

この尋問で分かった事は、

- 1・建物の主人の名前はフォルトナというらしい。
- 2・研究されている内容は異世界への入り口を開く機械の開発とその利用法。
- 3・この山の霧はその機械が出す蒸気が原因。

「じゃあ、神隠しで人が居なくなっただのは・・・」

「不安定な機械がランダムに開いた入り口を通り、異世界へ迷い込んだということか。」

「はた迷惑な研究しやがって。」

しかし行方不明になった人達の搜索は絶望的だな。運良く元の世界への入り口が開くなんて事まず無いだろうし。

「早いところその機械壊さないとまた失踪者が増えちまうぞ?」

銀さんが行動をせかす。が、

「確かに。だが消えた人間達はどうする?機械を壊せば、失踪した人間は二度と戻れんぞ?」

そうだ。桂さんが言う通り機械を壊せば事件は解決するだろうが、同時にそれは失踪者を見捨てる事になる。それが分かってか、皆口を閉ざしてしまう。

「それなら問題ないぞ。」

不意に、俺達四人に声を掛けてくる人物が居た。気配を感じなかった俺達は驚きの声を上げた。

「何！？」

「誰だ！？」

「まったく気付かへんかったで！」

俺達が声のした方向を警戒すると、そこには柔和な笑顔を向ける一人の男性が居た。

「ああ、敵意は無いから落ち着いて。」

警戒する俺達を宥めるように言う男性。年は兄さんと同じくらいだろうか？

「悪いとは思ったけど君らの話は聞かせて貰った。実は俺、君らが言うところの失踪者だね。昼寝してたところを気が付いたらここに居たんだ。」

「成る程。つまり逆に異世界からこちらに来てしまったという訳か。」

合点がいったと桂さんが頷く。

「こちらから行けるんやから向こうからも来れるんは道理やな。」

洋基もそれに賛同する。

「それで、貴方が問題ないと言った意味は？」

俺は最初に彼が言った言葉の意味を訊く。

「それは俺が失踪者を探して届けるからさ。」

「届ける？どうやって？」

「俺が居た世界には魔法が存在してね。転移魔法で迷い込んだ人間は俺が元の場所に届ける。君らは気兼ねなくその研究所を破壊してくれ。」

むう。確かにそれは助かる。しかし、魔法って・・・信じがたい話だ。転生を経験した俺が言えるこっちゃないが・・・。
俺と同様、話が信じられない銀さんが男性に食って掛かる。

「おいおい。魔法なんて本当にあるのかよ。俺はそういう与太話は信じない質なんだよ。」

「銀先輩、幽霊も魔法も信じないってロマンがあらへんなあ。」

「うるせえ。俺は現実主義なんだ。おい、アンタ自分が魔法使いてんなら何かして見せてくれよ。」

銀さんが挑発的に男性に言う。

「ふむ。」

顎に手を当て、しばし思案すると男性は提案する。

「それじゃ、白髪の君が欲しい物を魔法で出してみよう。何がいい？」

「イチゴパフェを一つ。」

「結局それかい!!」

洋基がツツコミを入れる。

「いいよ。それじゃ・・・」

キイイイーン！

男性が手を振るとそこには本当にイチゴパフェが現れた。

「スゲー！」

「ホンモンや！」

「はい。どうぞ。」

男性がパフェを銀さんに渡す。

「おお！本当にイチゴパフェじゃねえか！」

銀さんはパフェを受け取ると途端に静かになった。夢中で食べているようだ。

「信じて貰えたか？」

「ええ。お陰で破壊の方に専念出来そうです。」

「では襲撃の手順を話し合おうか。」

「あ、その前に貴方の名前は？」

「俺？俺の名前はタケル」カミ・・・じゃない上條タケルだ。宜しく。」

俺達五人は研究所の襲撃について打ち合わせを始めた。

決まった作戦はこうだ。まずタケルさんが攻撃魔法で研究所を先制攻撃。混乱に乗じて俺達四人が侵入。機械を破壊後に離脱。

「というか、そんな魔法が有るなら直接研究所を爆撃すればいいんじゃないね？」

銀さんが疑問を投げ掛ける。

「いや、できれば被害は最小限に留めたい。機械を壊すのが目的で、殲滅が目的じゃないからな。」

タケルさんの言葉に俺も頷く。その方が俺としても有難い。ここには活人拳の天道流の肩書きで来てるからな。人死には遠慮したいところだ。

「準備は良いか？行くぞ！我が魔力により敵を倒せ！ファイアーボール！」

タケルさんの魔法で出来た直径1mの火の玉×30が研究所に降り注ぐ。

ドゴーン！！ゴオオオオオ！ドゴーーーーン！！

「よし！走れ！」

桂さんの合図で俺達四人は建物の中へ向かった。

「ウヒョー！アノ兄ちゃん本当に魔法使いやったんやな。」

魔法の砲撃を見て洋基が感心する。

「何だ信じてなかったのか？」

「いや、最初に見た魔法がパフェじゃな。ただの手品かと思ったわ。」

「次はバケツサイズのプリンでも出して貰うか。」

「銀さん血糖値上がるよ？」

「いい加減にしろ。この糖尿病患者！」

軽口を叩き合いながらも油断せずに俺達は建物の中に進入した。

「ここが最奥みたいやな。」

行き着いた先には大きな扉。俺達がそこへ近づこうとすると異変は起きた。

「お前たちか！？襲撃者というのは！」

扉を開けてスーツ姿の巨漢が姿を現した。こいつがフォルトナ。そしてこの威圧感は！？

「皆気を付けろ！こいつマスタークラスだ！」

「何やマスタークラスって！？」

「要するに洒落にならんほど強いってこと！」

梁山泊に父さんや兄さんと達人に囲まれている俺だからこそ分かる感覚だ。

「ほう。中々の眼力を持つているな。私の息子にしてやろう。」

「いや間に合ってます。」

良く分からんが丁重にお断りする。

「マスタークラスだか何だか知らねえが倒さないとなんねんだろっが！」

「そういう事だな！」

銀さんと桂さんは刀を構え、フォルトナに斬りかかった。

「でりゃー！ー！！！」

「おおおお！！！」

ドガアアー！！

右手と左手、片手ずつで銀さんと桂さんの剣を受け止め、弾き返すフォルトナ。二人は体勢を崩した所を殴り付けられる。

「「グアーツ！！！」」

弾き飛ばされた二人を俺と洋基が受けとめる。

「マスタークラスを相手にするなら作戦を考えないと。」
「そうみたいやな。」

「ならば洋基！一撃の威力のあるお前が決める！俺と銀時で奴を抑える！」

「俺は？」

「優は洋基をフォローしつつ隙を見て攻撃するんだ！」

要するに遊撃ってトコか。

「了解。それで行こう！」

「話は済んだか？」

フォルトナは首をコキコキと鳴らし余裕の態度を取っている。

「へ！余裕こいてるのも今のうちだぜ！行くぞツラ！」

「おお！！！」

今度は二人とも大振りはずに、防御に主体を置くことで隙を作らずにフォルトナと打ち合う。しかし刀相手に素手で打ち合うとはマスタークラスは格が違うな。

ガシイイイ！

フォルトナは二人の刀受け止め鷲掴みむ。

「フッ、その歳にしては中々やるが、まだまだ達人には及ばんな。」
「それはどうかな？」

「なに!？」

刀を掴んでいるフォルトナの腕を更に掴む二人。両手を押さえられ、正面がから空きになる。

「今や!回れ!右!活人脚!！」

ドゴオオオー!!

「ぐおおお!!！」

フォルトナの鳩尾に洋基の必殺の蹴りがヒットする!チャンスだ!洋基の攻撃に続いて、俺も渾身の一撃を繰り出す。

「カウ・ロイ!!！」

ゴキヤツ!!

両手を塞がれ、首を押さえられた回避不能の膝蹴りがフォルトナの顔を捉えた!

「ぐああああ!!！」

倒れ込むフォルトナ。コイツは確かにマスタークラスだが、父さんや梁山泊の先生には遠く及ばないな。マスタークラスでも最下層の人間だ。

「ぐうつ・・・やるではないか・・・だが・・・」
「ん?なんやそのボタンは?」

フォルトナが手にしたりモコンのスイッチを押す。

「フッフ・・・このボタンは研究所の自爆スイッチだ！貴様らもわしの計画もろとも吹き飛ぶがいい！！」

そう言うのと気を失うフォルトナ。

「ゲエ！やばいんと違う？」

「ああ。急いで脱出しよう。」

俺達は来た道を急いで引き返す。

ドゥーーーーーン！！ドガーーーー！

「不味いな。もう小規模な爆発が始まつてる。」

「このままでは間に合わないな。」

「兎に角走れー！」

すると、俺達の進行方向に人影。

「タケルさん！」

「皆無事か？」

「ええ。でもフォルトナが自爆スイッチを！」

「分かった。転移するから皆俺に？まれ。」

「いやー死ぬかと思っただぜ！」

銀さんが爆発している研究所を見ながら安堵の溜息を付く。俺達はタケルさんの転移魔法で爆発の被害を受けない所まで瞬間移動していた。

「何はともあれ、これで目的は達したな。」

桂さんの言葉に皆が頷く。

「さて、名残惜しいだろうけど君らも元の世界に送ろう。」

「へ？元の世界？」

タケルさんの言葉に洋基が疑問を浮かべた。

「なんだ気付いてなかったのか？ここはそこに居る優の世界で、君ら三人は既にここという異世界に来ていたんだぞ？」

「気付かんかった。」

「服装の違いで分からなかったのか？」

「いや、珍しい格好だとは思ってたけど。ゆっちーは俺らの事分かんかったの？」

「俺は三人ともコスプレだと思ってた。」

「ということはゆっちーは俺達の事を、仮装して山登りするおかしな集団だと？」

「……。タケルさん、他の失踪者の件はお願いしますね。」

「コイツ、おもいつきスルーしたで。」

「短い間だっけど楽しかったよ。」

「俺もや。」

俺は洋基達に握手をしながら別れを告げる。

「しかし、報酬はどうする？こんな荒唐無稽な話、誰も信じるまい。」

「もしかしてくたびれ損かよ？たまんねーな。」

「そうだろうな。・・・良かったら俺が手伝ってくれた礼に報酬を払おうか？」

「いいんですか！？」

「構わないさ。ほら。」

キイイーン！！

そう言つてタケルさんが作り出したのは、見たことの無い金属の小判。

「これは？」

「日緋色金っていう珍しい金属だ。売れば結構良い値が付く。」

「有難う御座います。」

俺と洋基はそれぞれ一枚ずつ小判を受け取った。

「今度こそさよならやな。」

「ああ。また会えるか分からないが元気でな。」

後日談 洋基サイド

「松陽先生、これ俺達が仕事で手に入れた珍しい小判や。私塾の経営の足しにしてや。」

洋基が松陽に小判を手渡す。

「ふふ、そんなに気を使わなくてもいいのに・・・こ、これは！」
「まさか大して価値がありませんでしたか？」

不安げに桂が訊く。

「い、いえ。これだけで私塾の経営が一年、いや二年は持つお宝ですよ！」

「」「マジで!?!」「」

優サイド

「岬越寺先生。珍しい小判を手に入れたんで見て貰えますか？」
「ほっ?見せてもらん?」

俺はタケルさんから貰った小判を岬越寺先生に手渡しす。

「こ、これは!?!」

「やっぱり大した物じゃないですね? 訊いた事ない金属だし。」

「いや、これ一枚換金しただけで梁山泊の経営が一年、いや二年は持つよ?」

「マジで!?!」

番外編其の二（後書き）

どうだったでしょう？まさかのタケル参戦！いやね？ただ落とし所が見当たらなかっただけなの。おかしな点ばかりでツツコミ所満載ですがご容赦を。

第七話 信頼の証（前書き）

番外編にかまけてやっ和本編の投稿です。

第七話 信頼の証

「今日も今日とてケンカの日々か・・・兼一、こんな日も偶にだつたら刺激的だが、こう頻繁だと青春の浪費だと思わないか？」

「僕は常にそう思ってるよ！！」つーか、君も真面目に戦ってくれよ！」

ラグナレクに兼一が目を付けられて、何度目の襲撃だろうか？もう数えるのも面倒な回数になってきた。

「よっ！」

バキッ！

「ぐはっ！」

手近かな敵に回し蹴りを喰らわす。

「てりゃー！！！」

ドシャ！

「ぐあっ！！！」

兼一の背負い投げに敵が数人巻き込まれる。

「クソ！コイツをキサラ様に連れて行けば昇進は間違いなしだつてのに！」

また『キサラ』か。武田とかいう奴も言ってたが、どういふつもりなんだろうな。単純に兼一をシメたいだけなら、相応の奴を差し向けるだけで事足りる。それともスカウトか？最近名を挙げた兼一を引き込もうと考えてるとか？うん。こっちの方が有りえそうだ。

「フヒヒっ！！こ、殺す！殺してやるぜ！」

危ない眼つきになった敵の一人が懷からナイフを取り出した。おいおい、高校生のケン力で光り物抜くか？

「ゲッ！な、ナイフ！？」

「ヒヤハー！死ねえ！」

ヤバイ！兼一は足が竦んでいる！

「おりゃ！」

俺はとつさに男が持ったナイフの柄を蹴り上げる。ナイフはあさつての方向に飛んで行く。

「セイ！」

そこを逃さず兼一が男の顔を殴り飛ばす。

「ぐわ！」

ナイフ男は倒れ、残りの敵は途中で逃げ去ったが課題が残る闘いになった。

「武器対策も考えないとな。」

「うん・・・。」

「という理由で武器対策の必要性を感じたんです。」

俺達は梁山泊で長老に相談していた。

「成る程。それで兼ちゃんは足が竦んで動けなかった。と・・・。」
「う、その通りです・・・。」

「ならばそろそろ対武器用の修行を始めるべきじゃな。」

チヨイチヨイ・・・

「ん？」

しぐれさんが俺を手招きする。

「しぐれさん、どうかしました？」

「これ、持って・・・。」

渡されたのは、ただの棒。

「これ？」

「動くな・・・よ。」

シュバー！

「ふおっ！！」

持っていた棒がしぐれさんの刀で細切れになる。

「ふふ。どうやら、しぐれは二人に教えたいうじやな。武器関連ならば梁山泊ではしぐれが専門じゃからな。」

「そうなんですか？是非お願いします。しぐれさん。」
「ん・・・いい・・・よ。」

よっしゃ師匠が増えた。

「問題は兼ちゃんじゃな。実践で足が竦んでいては話にならんからのう。」

「うう。やっぱり、でも怖いものは怖い・・・。優君は怖くないの？」

「俺？俺は慣れた。」

前世で大抵の恐怖は経験した。今更刀一本くらいに怯えたりしない。

「慣れるものなの！？」

「ホッホッホ。優ちゃんは特別じゃからのお。」

「ぐ、ここでも凡人との差が・・・」

これを才能と言えるのかは分からんけどな。

「兼ちゃんや。実践でもっとも大切なものは勇気じゃ。勇気がなければ相手の技は見抜けん。勇気がなくなれば力は竦み、勇気がなくなれば

技は掛からんものじゃて。」

「でも、僕には勇気がないから……。」

「なければ鍛えれば良い。」

「勇気を鍛える……?」

「優ちゃんも言っておつたろう? 要は慣れじゃよ。」

兼一はイマイチ実感が湧かないらしい。助け船を出してやろう。

「兼一、最初に筑波と戦ったとき、アイツの攻撃が怖かっただろう?」

「うん……。」

「でも今じゃ、数人の不良相手に戦えているじゃないか。お前だつて確実に勇気は鍛えられているんだよ。ただ今回はそれを重点的に鍛えようというだけだ。」

「な、成る程。」

「ホッホッホ! 優ちゃんは良い師匠になれそうじゃな。」

褒められちった。

「それでは優ちゃんは対武器の戦術を、兼ちゃんはまず武器への恐怖に慣れる事から始めようかの。」

「はい!」

「ときに、兼ちゃんや。」

「はい? なんでしょう?」

「死なぬようにの。」

「え? ……ギャー!」

しぐれさんの刀が兼一の頭上スレスレを通り過ぎた。

対武器戦、修行開始。兼一はしぐれさんに刀で小一時間追い掛け回されていた。

俺は木刀を持って、教えられた構えで素振り。

「フツ！ハツ！ヤア！」

うーん、何かしっくりいかない。

「違う・・・優・・・上半身と足の運びがズレて・・・る。」

「こうですか？」

「違う・・・こう・・・だ。」

俺の手を取り、正しい軌道に導く。が、しぐれさんの髪が鼻に掛かる。おお！良い匂い！

「集中・・・し・・・ろ。」

「すんません。」

「それにしてもしぐれさん。俺、武器対策を学びにきたのに何故に剣術修行も？」

「優・・・才能・・・あるか・・・ら。」

マジで？剣の才能有るの？てか、一度見ただけで分かるもの？

「それとも・・・ボクの修行・・・い・・・や？」

止めてー！そんな悲しそうな顔でこちらを見ないでー！

「いや嬉しいですよ！今後とも宜しくお願いします。」

「う・・・ん。」

あんな目で見詰められて嫌とは言えんよ！実際、剣が扱えるように成るのも嬉しいし。

「そうだ！兼一、お前は武器は使うのか？」

「はう・・・。」

既に兼一は燃え尽きていた。真っ白だ。目の焦点が合っていない。どうもアッチの世界を旅行中のようだ。

「優・・・少し・・・待つ・・・て。」

「はい。」

しばらくして戻ってきたしぐれさん。手には一本の刀。

「優・・・あげ・・・る。」

「へ？刀ですか？」

シャキ・・・

受け取り、引き抜いた刀身が反射で輝く。

「短い・・・小太刀ですか？」

「そう・・・だ。」

綺麗だ。生で見ると刀剣が美術品になる理由が良く分かる。

「ほう、珍しいのお。しぐれが人に剣を渡すとは。」

様子を見に立ち寄った長老が声を漏らす。

「そつなんですか？」

「余程、優ちゃんの才が気に入ったようじゃの。」
「別・・・に。」

小太刀か・・・。戦法に取り入れるのも有りかもな。

「有難うしぐれさん。」

「ん・・・。」

ぶつきらばうに返す。分かり難いけど照れてるんだよな。この人の場合。

「優ちゃんや。武器を手にする者は、それに見合うだけの力量と精神が求められる。しぐれはそれが優ちゃんに有ると信じて刀を渡したのじゃろう。その信頼を裏切つてはならんぞ？」

「はい！この刀に相応しくなるように頑張ります！」

「良い返事じゃ。ホツホツホ。」

帰り道、復讐に燃えるナイフ使いに待ち伏せされたが、それを兼一が易々と倒した。

「今日僕が酷い目に遭ったのはお前のせいだ！日本刀を持った女の人に一時間以上追い掛け回された事があるか！？聞いてるか！？もしもーし！？」

多少壊れ気味だが結果オーライだ。

梁山泊・師匠サイド

「さて、今回の議題は我らが弟子一号と弟子二号についてなのだが・
・・」

自然といつも進行役となる『哲学する柔術家』岬越寺 秋雨が話を切り出す。

「弟子一号、兼一君はしぐれの追い込みで恐怖に多少慣れる事が出来た。少なくとも武器一つに足が竦む心配はないだろう。」

「問題なのは弟子二号、優ちゃんのほうね。彼、普段は穏やかだけど偶に見せるアノ目は異常ね。命のやり取りを経験した人間か、戦場でも経験しないとああはならないね。」

『あらゆる中国拳法の達人』馬 剣星が問題点を指摘する。

「確かに唯のガキがあんな雰囲気を持つのは異常だな。」

『ケンカ100段』の空手家、逆鬼 至緒がビール片手に頷く。彼は自分が行った世界ケンカ旅行を思い返す。優が持つ雰囲気は、旅先で遭った戦場という地獄から生還した兵士が持つ影と同じ、いや、それ以上の何かを感じる。

「アパ。優、時々悲しそうよー！」

極めてシンプルに、だが核心を突いた発言をする。『裏ムエタイ界の死神』アパチャイ ホパチャイ。

「秋雨君や。優ちゃんがアノ目をするようになったのいつ頃からか聞いている居らんのかの？」

長老と呼ばれる梁山泊の主、『無敵超人』風林寺 隼人が長い髭を撫でつけながら訊く。

「そうですね。彼の父・・・私の友人の天道 宗治の話では彼のアノ目は元から。生い立ちにもそうなる程の出来事には心当たりが無いそうです。寧ろ、彼の此れまでの人生は普通の十代の少年と大差ないものだという事です。だからこそ、我らに預けたいと言っていました。」

事の経緯を秋雨が話す。

「生まれつき、という事かの。」

「はい。」

「問題じゃのお・・・。」

優が放つ雰囲気とその目は活人拳というよりも、殺人拳の使い手が持つソレに近い。しかも根は相当深そうだ。皆、その危うさが分かるだけに深く考え込んでしまう。

「大丈夫・・・。」

此れまで声を発しなかった、いつも無言を通す事が多い『剣と兵器の申し子』香坂 しぐれが言う。その目は何かを確信している。

「優は・・・優し・・・い。」

「ホ！成る程のお。優しさか・・・尤もじゃな。結局のところ、優ちゃんの優しさがアノ目を救うのかもしれないの。」

他の皆も頷く。そして思った。優の中の狂気ともいうべきものを押さえ込むのは、単純に彼の優しさや慈愛という感情なのかもしれない。ならば師の我が行すべきはそれを育てることなのだと。

「しぐれや、剣を渡したのもそれが理由かの？」

「うん・・・信頼の証・・・。」

長老は思う。普段殆ど発言しないしぐれが一番優の本質に近づいているのではないかと。それは理論的な考えに基づいたものではなく、感性に因るものだ。感情を感情で読み取るという、本能的な如何にもしぐれらしい結論の出し方だ。

「しかし、面白いものですな。」

秋雨が興味深気に自身の感想を漏らす。

「兼一君は武術の才能の無く、類まれなる優しさを持った少年。方や優君は武術の才に恵まれながら負の感情を持て余した影の有る少年。」

長老が話を継ぐ。

「うむ。両極端な、真逆とも言えるタイプの弟子が同時期に現れるとは。ならばこの二人を導く事こそ我ら活人拳の証明といえるのかもしれない。」

「皆さんご飯ですよー！」

話が一通り纏まったところで、美羽の声が道場に届く。

「では、第一回弟子育成会議を終了とする。」

長老が終わりを告げ、梁山泊の面々は道場を後にした。

第七話 信頼の証（後書き）

PVアクセス三万件突破！これからもどうぞ宜しく！

第八話 膝枕はいつまでも男のロマン！（前書き）

長時間キーボードを打つてると腰が痛い。姿勢が悪いのか？

第八話 膝枕はいつまでも男のロマン！

梁山泊の庭に並べられた数体の岬越寺先生作・投げられ地蔵グレート。

「アパパパパ！アパー！！」

シュバババババ！！

物凄い速度でパンチを繰り出すアパチャイさん。

「おお！！全く見えん！！」

ドゴーーン！！

ガラガラガラ……

粉碎される地蔵達。

「これじゃ駄目よー！！」

アパチャイさんが頭を抱える。

「え？見事に粉々じゃないですか。」
「違う……。」

傍に居たしぐれさんがフルフルと首を横に振る。

「手加減の……練習……」

「手加減？」

「そうよー！アパチャイ、手加減覚えないと、優と兼一教えられないよー！」

「ああ、そういう事。」

俺達にムエタイを教えたくて態々練習してくれてたのか。良い人だ。

「あ！でも一体だけ残ってますよアパチャイさん！」

端の一体は無傷だった。

「本当よー！これでムエタイ教えられるよ優！」

「よかったですねー。」

「早速、修行始めるよー！」

「はい！」

しかし俺は気付かなかった。残った地蔵の首に入ったヒビに……。

アパチャイさんから技の説明を受け、構えと動きの確認が済むと練習はミット打ちへと移行した。

「先ずはどっちからやるよ？」

「それじゃ、先ず俺から。」

「優君。本当に大丈夫なの？アパチャイさんは？」

一度、パンチをもらった事のある兼一はまだ不安気だ。

「大丈夫大丈夫。ちゃんと地藏相手に練習してたし。」

「さあ！来るね優！」

「はい！」

俺はアパチャイさんの構えたミットにパンチを打ち込む。

バシ！バシ！バシ！

「レウ！レウ！もっと速くね！」

バシ！バシ！

「はい！そこで避けるよ！」

「え？」

ズビシ！！

・・・

そこで俺の意識は暗転した。

「あ、起き・・・た。」

目覚めるとそこは楽園でした。どうも俺は気絶していたらしい。しぐれさんの大層ご立派な双丘を見上げる形で寝ていた。所謂膝枕の体勢。

「どうなっ たんですかね？」

脳内に今の情景を永久保存しつつ聞く。

「いやー危なかったね優君。もう少しで墓穴に片足突っ込む所だったよ。」

答えたのは岬越寺先生。墓穴・・・そんなにヤバかったのか。

「大丈夫優くん!？」

慌てて兼一もやってくる。既に帰り支度を整え学生服姿。時間一杯寝てたのか俺。

「ああ。大丈夫だ。」

名残惜しいが、しぐれさんの膝枕から離れ、起き上がる。

「言い方が悪いが、先に受けたのが優君で幸いたよ。これが兼一くんだったら命の保障は出来なかったからねえ。」

「はっはっは。」と、顔色一つ変えずに岬越寺先生がとんでもない発言をする。

「ゾゾー。こ、こんな日常に死の危険があつたとは・・・。」

青くなる兼一。

「ところで優ちゃん。しぐれどんの膝枕はどんなだったね？」

「うお！居たんですか馬先生。膝枕ですか？」

脳内に保存した情景を思い浮かべる。

「・・・ニヤッ。」

「！！ど、どんなね？」

「絶景でした！」

出来る限りの笑顔でサムズアップ。

「う、羨ましいねー！」

キーッ！っとハンカチ噛み締める馬先生。アレだけの絶景が堪能できるなら死にかけるぐらい消費税みたいな物さ。

「うはははは！！！」

「ゆ、優君が笑い出した！岬越寺先生！やっぱり脳に異常が！？」

「ははははは！ムエタイ最高！！うははははは！」

アパチャイさんは数日後にはちゃんと手加減が出来るように成っていた。本人曰く、「子供達と遊ぶ時と同じよー！」との事。まさに師匠と弟子は大人と子供の差だ。達人がどれ程の高みに至るのか思い知れた。

「優、スマンがコールドスプレーとテーピングを買って来てくれな
いか？」

夕方、兄さんが俺の部屋へとやってきた。

「天道始、二十歳。大学生で、天道流の後継者（予定）。女顔の俺
とは違う系統の美形で、その甘いマスクが大学では女子大生の人気
の的。現在、同じ大学の幼馴染と交際中。絵に描いたようなリア充
めモゲろ！とは言わないで心の中に留めておく。」

「留めてない。漏れてる漏れてる。」

「それで？コールドスプレーとテーピングだっけ？」

「ああ。悪いが頼む。道場で使う買い置きが切れてしまった。」

今からドラッグストアへ行くと、帰った頃には夕食の時間だな。
丁度良い。散歩がてら行って来るか。

「りょーかい。ついでに手数料としてドリンク代を頂きます。」

「ちゃっかりしてるな。」

「だって俺天道流じゃ無いもん。」

「仕方ない。ほら。お釣りが手数料だ。」

渡されたコールドスプレーとテーピングの代金及び俺への手数料。

「おお！諭吉さんじゃないか！ジュース何本買えるかな？」

「ちなみに買い置き分を買ったら500円しか残らん。」

「さいですか・・・。」

いっそ、安いメーカーのを買ってお釣りを増やすか？

「買うのはいつものメ・カーのやつを頼むぞ？安物は質が悪いからな。」

「チッ！」

「なんてこつたい！」

着いた最良の店のシャッターには張り紙。

『本日より当店の営業時間は08:00～18:00までとさせて頂きます。』

現在の時刻、18:10。俺は店の前でOTLしていた。

「チキショー！なんでピンポイントで今日なんだよ！」

俺に報告も無しに時間を変えやがって！

だが、ここで嘆いても仕方が無い。別の店へ行こう。

「スイマセン。テーピングとコールドスプレーは幾らですか？」

「はい、少々お待ちください。値段のほうが……」

結果、予定の量を買うと、釣りは期待できない値段だった。それどころか赤字だ。自腹はありえねえ。そこでは買わずに店を出る。

「もう一軒回ってみるかな・・・ん？」

「ぶつ潰してやるぜ！」

「死んでも死らねえぞ！ゴラァ！！」

裏路地で息巻く男達。比較的人通りが多い場所なのだが、通行人もそこ一帯だけは避けていた。

「いやー若いね。元気なこと！」

野次馬根性で覗いた先には、15・6人の男達。対するは・・・

「女？」

俺より2・3年上だろう。女性が壁を背に対峙し男達を睨み付けていた。

「やっちまえ！」

その声と共に不良共が女性に襲い掛かる！

私は周りを取り囲む男達に睨みを利かせる。相手はラグナレクと敵対する不良グループ『死威怒』の兵隊。

「見つけたぜラグナレクの拳豪フレイア！張ってた甲斐があったぜえ！」

どうやら帰り道を待ち伏せていたらしい。部下がワルキューレを呼び戻しに行ったが、間に合わないだろう。

「御託はいい。掛かって来い。それと私はフレイアじゃない。フレイヤだ。間違うな。」

「チツ！お前らやつちまえ！！」
「オオオー！！」

私は向かってくる兵隊を迎え撃つため杖を構えた。そのとき・・・
ドガアアアア！！

横合いから飛び出した何者かが兵隊を殴り倒した。

「面白そうだ。仲間に入れてくれよ。」

そう言つて姿を現したのは女・・・いや骨格からして恐らく男だ。女のような顔立ちの男は不敵に笑う。

「テメエも仲間か！？」
「そうだよ？」

いや違う。こんな個性的な男、ラグナレクには居ない。

「俺は女性の味方さ。」

そういう意味か。男は更に続ける。

「少なくとも美人を大人数で囲む野郎の味方じゃない。」

挑発的に低く笑うと、それが気に入らなかったのか兵隊が殺気立つ。

「スカシやがって。おい！こいつも一緒に袋にしちまえ！」
「おおおおおお！！」

それを口火に乱闘に突入した。私は敵を倒しながら、突然の乱入者を観察する。

「よ！」

バキ！

「ハッ！」

ドゴッ！

その戦い方に私は目を丸くする。身のこなしはかなり荒い、素人に毛が生えた程度。だがそれを補って余り有る身体能力の高さだ。原石という言葉が当てはまるのはこういう人間なのだろう。

戦いに必要な要素を才能で埋めてしまう辺り、第二拳豪のバーサーカーに近い。しかし決定的に違うのは技の錬度。繰り出す技には武術の一端が見て取れる。まったくの自己流では無さそうだ。それも一種類では無い。数種類の武術が複合している。こいつが形になった時、どれ程の高みに行けるのかまったく想像が着かない。

「終わりかな？」

そんな事を考えている内に戦いは終わり、立っているのは私と奴だけだった。

「助力感謝する。」

私はそう切り出す。この程度の連中に私が負けるとは思わないが、協力してくれたのは事実。礼だけは言っておく。

「いやーお姉さん強いから余計なお世話だったかもね。」

柔和な笑顔を私に向ける男。女以上に整った顔立ちに不覚にも見入ってしまう。

「・・・そうでもない。」

私はそっけなくそれだけを返す。

「あーそうだ！」

何かを思い出したかのように声をあげる男。そして私に尋ねた。

「安いテープिंग売ってる店知らない？」と。

「・・・案内する。」

私はその男と裏路地を後にした。

「助かったよ。お姉さんのお陰で千円も浮くなんて。ラッキー！」
「いや……。」

私の教えた行き着けの店が想像以上に安かったと、釣り銭が増えた事を大いに喜ぶ男。訊くと、残りは小遣いらしい。

「それじゃ、予定よりも遅くなったからこの辺で。」

背を向ける男に私は声を掛けた。

「おい。」

「ん？」

「お前、名前は？」

「天道 優。優しいの優ね。お姉さんは？」

「久賀館 ……久賀館 要だ。」

「それじゃ要さん、また縁があつたらね。」

「ああ。」

男は再度背を向け走り去った。

「ふ……面白い奴だ。」

ワルキューレサイド

フレイヤこと久賀館 要が襲撃に遭っていると聞いた彼女の部下、ワルキューレ達は大きく現場に急行した。しかし、そこに久賀館 要の姿は無く、有ったのは敵対組織『死威怒』の気絶した兵隊のみ。ワルキューレのメンバー達はその光景を見て声を揃えた。

「流石フレイヤ様！！」

ワルキューレのフレイヤへの評価は鰻登りだ。

第八話 膝枕はいつまでも男のロマン！（後書き）

比較的早い段階でフレイヤ登場。無計画に出したので次の登場はいつになるやら・・・。

第九話 敵情視察（前書き）

アクセスPVが6万件を突破！これからもどうぞ御贖に！

第九話 敵情視察

昼休みに俺と兼一、美羽はラグナレクから身を隠すための隠れ家（といっても体育倉庫）で昼食を取っていた。各々のおかずを広げ、互いにつつき合う。

「もぐもぐ・・・美味しいなこのサンドイッチ。美羽、これの隠し味はカラシか？」

「はいですわ。マヨネーズとカラシを混ぜていますの。」

「本当だ！美味しい。美羽さんこっちのアスパラベーコンもイケますよ。」

「ふふ。有難う御座います。」

料理を褒められた美羽が嬉しそうの微笑む。その顔に兼一はメロメロだ。

「俺も男にしては料理は出来る方だと思ってたけど、流石に美羽には敵わないなあ。」

「あら、でも優さんが持って来たタコさんウィンナーも美味しいですわ。」

「いやそれ切っただけだから。」

「ふう・・・食った食った。」

完食した俺は、水筒のお茶を啜りつつ呟く。

「美羽は料理も出来て梁山泊の家事までするんだから大したもんだ。将来は良い嫁さんに成れそうだな。」

「わわわわ、私がお嫁さんなんて・・・」

俺の言葉に動揺する美羽。真っ赤になり俯いてしまう。

「ちょっと優くん。」

ジト目でこちらを見る兼一を引き寄せて、俺は耳元で囁く。

「ヒソヒソ・・・（安心しろ兼一。別に美羽を取ったりしないさ。寧ろ応援してやるって。）」

「ヒソヒソ・・・（本当!?!）」

「ヒソヒソ・・・ボソリ・・・（勿論だ。兄弟弟子の恋を応援するのは当然だろう?）」

「ボソリボソボソ・・・（君はなんて良い兄弟弟子なんだ!）」

俺と兼一は固く友情を確かめ合った。

「あのう・・・」

ここで調子を取り戻した美羽が怪訝な顔をする。

「やっぱり兼一さんと優さんはそういう関係なのでは?」

「それは無い!」

この小説にBL要素は御座いません。いやマジで。

「ヒヤッヒヤッヒヤ。喜べ兼一に優、技の3人衆の情報が手に入っただぜ。」

俺達が一息付いた頃、勇んで隠れ家に取り込んでくる新島。

「いつもながらお前はどうかやってここを探し当ててるんだ？」

センサーでも内蔵してるのかね。

「俺様の天才的な頭脳ならば、お前らの行動パターンから推測する事など容易いのさ。」

「テストの点は悪いくせに。」

「それはそれ、これはこれだ。」

そついうもんか？

「まあ聞け。先ずは古賀太一だが、コイツは既に倒したから省略だな。」

「何でそれをお前が知っているんだ？」

兼一が新島の話不思議がる。

「この前優から報告が上がってる。情報交換は購買のタコヤキパン三つで円滑に終了した。」

「ゆ、優君？」

兼一が恨みがましくこっちを見ている。

「いや、一応協力者だからさ。情報の把握は必要だろ？それに美羽、俺があげた『可愛い子猫100選』はどうだった？」

「カワイイにゃんこがいっぱいでしたわ。付録のにゃんこカレンダーも部屋に飾っていますわ。」

「あれも新島からの報酬だ。」

「ガーーーーーン！いつの間にか二人とも買収されていたとは・・・！」

ショックを受ける兼一を美羽が慰める。

「こ、今度兼一さんにもにゃんこ見せてあげますから。」

「そうだな元気だせ兼一。俺も今度タコヤキパン見せてやるからあげないけど。」

「にゃんこはいいです！あと優君のは慰めになって無い！」

美味しいんだぜ？タコヤキパン。

「ともかく次だ。宇喜田 孝造 三年。素行の悪さと勝つためにどんな手でも使う品性の無さから道場を破門。得意技は肩車で『投げの宇喜田』と呼ばれているそうだ。」

「あの体の大きな方の人ですわね。」

「やっぱり柔道家か。」

俺と美羽が頷く。

「だが、もっとヤバイのはこっちだ。武田 一基 三年。元はライト級のボクサーで、『突きの武田』と呼ばれている。特にその左ストレートはスローカメラでも捕らえきれなかったとか・・・。」

「空中でチラシを破くくらいだからな。アレは鋭いパンチだった。」
「ボクサーでしたら機動力も侮れませんか。」

感想を言う俺達に兼一が恐る恐る訊く。

「あのう、二人から見て僕がこの人と戦ったら勝てる？」

「無理だな（ですわね）。」

「うぐ・・・声を合わせて言われた・・・。」

「何も対策が無しだと正直辛いな。もう一人の柔道家の方なら五分以上でイけるだろうが、経験の足りない兼一じゃ足を使って翻弄されれば捕らえきれないだろう。」

「いよいよ袋叩きか・・・。医療費に十万・・・。」

落ち込む兼一。何か元気付ける方法はないもんか・・・

「大丈夫ですわ兼一さん。また道場で対策を練りましょう？きっとどなたかボクサー封じくらい知ってますわ。」

「そうだな。言ってみれば筑波の時と同じさ。敵出現 対策する 撃破！さらなる敵出現 対策する 撃破！の法則で。」

「終わりが見えて来ないよ・・・。」

「逆鬼先生も言ってたろ？取り敢えず校内最強になっておけば安心だって。」

「あの人の価値観を僕に当て嵌めないで！」

その頃の梁山泊・・・

「ぶええええつくしよん！！」

「おや、逆鬼どん風邪かね？」

「いや、誰か噂してやがるな。・・・この感じは兼一が優だ。」

「分かるもんかね！？」

放課後になり、兼一と美羽が教室まで俺を迎えに来ていた。

「おい、優くん。」

「迎えに来ましたわー。」

しかし俺は断りを入れる事にした。

「悪いな兼一。梁山泊には先に行つててくれ。」

「あら、何か用事でも？」

「ああ。まあね。」

兼一達と別れ、渡り廊下へと出た。そこには悪魔・・・ではなく新島が待ち構えて居た。

「何処に行く気だ優？」

「新島か。何か用か？」

「いやね。俺様の勘が騒ぐんだよ。お前が何か企んでるってな。」

本当にセンサー内蔵か？

「ま、丁度良いか。新島、武田と宇喜田つてのが何処に居るか分かるか？」

「如何する気だ？まさか兼一の代わりにあいつ等を片付けるつもりか？」

「そんな無粋な真似はしないって。敵情視察さ。少しつつ付いてみようかと思つて。」

すると新島が低く笑う。

「クッククク・・・面白いな。戦るつもりなら止めようと思つたが、それなら話は別だ。武田達なら今は屋上に居るぜ。」

「おう、サンキュー。」

俺は屋上へ階段を上がる。

スタスタスタ・・・スタスタ・・・

「・・・何故に付いて来る？」

「いや、お前が戦う所は見たことが無いからな。良い機会だから見てみようかなーっと。」

「だから、戦わないっての。」

「まあまあ、お前が奴らにどう対応するのか興味もあるし。居場所を教えた報酬つて事で。」

「良いけど直ぐに逃げるからな。逃げ遅れても見捨ててるぞ。」

「そんなヘマはせんさ。それに俺様の逃げ足に敵う不良はいないぜ！」

「それって自慢になるのか？」

武田一基サイド

「クソッ！今日も見つからなかったぜ！一体どうなってやがる！」

ボクが屋上で景色を眺めている横で宇喜田がいきり立っている。もう少し余裕を持てばいいのにねえ。

「そんなに熱くなるなよ宇喜田。」

「だが、幾らうちがマンモス校だからってここまで逃げ遂せるものか？奴はゲリラか？」

「確かにねえ。上手く逃げるもんだよ。」

これだけ探し回って捕まらないんだから大したもんだ。

「いや、褒めてどうすんだよ。」

宇喜田がこつちを呆れ顔でみている。そんな顔するなよ。ボクにも策が無いわけじゃないんだぜ。最終手段だけどいざとなれば彼の・・・

「こんにちは。」

ボクの思考を遮るように屋上へと誰かやって来た。誰だ？見たことの無い顔だ。学生服だから男と分かるが、服装が違えば女の子に見間違えそうなほど整った顔立ちをしている。

「どちらさんだい？」

とりあえずこちらを見つめる彼に聞き返してみる。

「あんたら兼一を狙ってるんだろ？俺は兼一の友達だから敵情視察に来てみた。」

「「ハア!？」」

あまりに直球な内容に、不覚にもボクらは声を八もらせてしまった。

「おい、普通そついうのはもっとコッソリやるもんじゃないのか？」

宇喜田もあっけに取られ、素で返してしまっている。

「普通はそうかもねー。けど、たかがガキのケンカだろう？そこま
で慎重になる必要もないから。それに君らが俺を捕まえられる程の
実力者とも思えないしね。」

上手い挑発だ。軽い口調の中に自信と毒を含ませている。

「何だと？てめえ・・・」

予想通りケンカっ早い宇喜田は既に殺気だっている。

「だったら俺らの実力を身を持って教えてやるぜ！」

宇喜田は怒り狂って彼に襲い掛かって行く。

「よつとー！」

「このー！」

「はつとー！鬼さんこちら！」

「クソ！ちょこまかしやがって！」

ヒラリヒラリと宇喜田の猛攻を避ける。口調はふざけているが身の
こなしはかなり素早い。しかも本当に敵情視察のつもりか、自分か
らは一切仕掛けてこない。

「面白いなキミは。宇喜田、今度はボクにやらせてくれ。」

「あ、ああ。」

追い掛け回すのに疲れたのか、宇喜田は意外に簡単に譲ってくれた。

「ボクは宇喜田より速いからね。逃げ切れるとは思わない方がいいよ。」

ボクはステップを踏み、ファイティングポーズを取る。

「へえ・・・さすが元ボクサー。様になってる。」

「知ってたのかい？なら遠慮は要らないね！」

一瞬で間合いを詰めるとフェイントの右ジャブを混ぜ、彼の懷に飛び込む。

「シッ！」

顎を狙った一発だったが。

バシッ！

「なに！？」

なんと彼はボクの右ストレートを掴んだ。初見でボクの突きを見切ったのか！？こんな事ができるのはラグナレクでも幹部クラスだけだ。

「あいて〜！凄い突きだ！」

直ぐに拳を離し、プラプラと手を振る。

「チッ！次は外さないよ！」

ボクは仕切り直しに間合いを取る。しかし・・・

「いや、もう十分。ご協力感謝します。じゃあね！」

それだけ言つと現れた時と同じ唐突さで走り去ってしまった。

「一体何だったんだアイツは？」

宇喜田は首を傾げる。

「さあね。ホントにただボクらの実力を見に來ただけなのかもねえ。」

「

彼が出て行つた扉を見送る。ボクは沸き立つ苛立ちを押さええられなかった。本当に強い相手だったからこそ、この動かない左腕と自分に・・・。

天道優サイド

タッタッタ・・・

早足で学校の階段を下りていく。

「ケツケツケ。どうッだったよ技の三人衆の実力は？」

追走する新島に感想を求められる。

「宇喜田の方は今の兼一でも戦えるが、やっぱり武田の方は厳しいな。」

「そうか・・・折角面白くなってきたところだったんだがなあ。」

「だがまあ、対策次第では分からないぜ？」

俺の言葉に新島は興味をそそられたようだ。

「ほう？兼一が勝つ方法が有るのか？」

「何のために敵情視察したと思ってるんだ？」

「なるほどねえ。」

ピコピコと電子手帳を操作する。

「お前のお陰でもう少し兼一で楽しめそうだな。」

「兼一本人は大真面目なんだがなあ。」

「だから面白いんだろ。他人の不幸は蜜の味ってやつさ。」

底意地の悪そうな笑みの新島。

「性格悪いなあ。」

「ケツケツケ・・・」

「おかえり。珍しく遅かったね。」

「すいません。遅くなりました。」

梁山泊に着くと俺は岬越寺先生に頭を下げた。

「構わないさ。それでどうだったかね？」

「え？」

「兼一君を狙ってるという元ボクサーを調べてきたんだろう？」

「そ、そうだったの!？」

話を聞いていた兼一が驚く。

「岬越寺先生、エスパーですか？」

「フツ、君が道場に遅刻することなど無かったからね。加えて、今しがた二人からも事情を聞いたところだ。そこから推理するのは難しくないさ。」

この人探偵？

「この人探偵？って思ってるね？」

「うぐ……。」

これ以上続けてもボロが出そうなので、早々に本題へ入ろう。

「……兼一を狙ってる柔道家と元ボクサーですけど、柔道家の方はなんとかなるでしょう。けど、元ボクサーの方は厄介ですね。機動力はかなりのものでした。やっぱりアレを封じないと勝ち目は薄

いですね。」

「ふむ・・・確かに素早い動きで避けられていてはどんな攻撃も意味を成さないからね。さて、どんな技が良いか・・・」

「それならば最適な技があるではないか。」

「長老。」

いつの間にか隣に座っていた長老が提案する。

「アパチャイ君。あの技を教えてあげなさい。」

「あの技？」

「うむ。テッ・ラインじゃ。」

「林家こん平の？」

「それはチャライン！じゃ。」

長老も観るのか笑点。

「話が逸れてしまったのお。」

「すみません。」

「テッ・ラインはムエタイ式のローキックのことじゃよ。」

成る程。下半身に攻撃を集中させれば機動力を奪える。それにはローキックは最適だ。

既に準備万端とアパチャイさんが嬉しそうに庭で飛び跳ねていた。

「そうと決まれば早速練習開始よー！兼一！優！」

「「はい！」」

この後アパチャイさんの足をサンドバック代わりにしてテッ・ライ

ンを練習したのだが、あの人の足は頑丈すぎる。俺と兼一の蹴りを
受け続けてもまったくのノーダメージ。それどころか、こつちの足
がイカレそうだった。足に鉄筋でも仕込んでるのだろうか？

第九話 敵情視察（後書き）

次回で恐らく技の3人衆編決着！優、戦わねー！

第十話 決着！対技の3人衆！（前書き）

技の3人衆との戦い。少し引つ張り過ぎたかな。

第十話 決着！対技の3人衆！

兼一がラグナレクに目を付けられてから、約一ヶ月が過ぎようとしていた。俺は購買のタコヤキパンを四つほど抱えて教室へ戻る。途中、兼一が俺の姿を見つけて驚く。

「あれ？優君、どうしてここに？」

「どうした兼一。何かおかしいか？俺はこの生徒だから別に居てもいいだろう？ハッ！それともイジメられなくなったから今度は俺をイジメようとも？目障りだから学校来るんじゃないよ。って意味か！？絶望した！友情の儚さと政府の経済対策に絶望した！」

「そんなことしないよ！それに何故経済政策！？」

「俺が思うに、単に事業仕分けや消費税を上げてても意味が無いと思うんだ。天下りや無駄な箱物の建設とそれに絡む利権・・・無駄を無くす仕組みを完全に作ってこそ、堂々と国民に説明ができる。そうだろう？」

「確かに幾ら税金を増やしたところで無駄に浪費しては景気は回復しないね。穴の空いたバケツに水を注いでも無意味なものね。」

「上手い例えだ・・・」

「・・・。」

「・・・何の話だっけ？」

「ハッ！忘れてた。優君コレを見て！」

兼一から渡された手紙には『てめえの友人二人は預かった。助けたければ屋上に来い。』と書いてあった。

「そういうことか。」

「でも美羽さんや優君じゃないとすると誰だろう?」

「美羽と新島は無事なのか?」

「うん。美羽さんは手紙を持ってるときクラスに居たし。」

「新島は・・・簡単に捕まるたまじやないな。しかし二人か・・・兼一、お前のクラスで授業に出てなかった人間はいないか?」

「そつえば島山と田中が居なかったけど。まさか!？」

「多分その二人かもな。」

「しかしあの二人は友人というよりイジメっ子だったんだけど。」

「実際はともかく、他人が誤解する可能性はあるさ。どうする?行くのか?」

「・・・行くよ!僕が武術を学んだ理由は正しい事をするためなんだ。ここで見捨てるのは僕の信念に反する!」

「良く言ったぜ!それでこそ兄弟弟子!」

「つきましては、ご協力の程をお願いしたく・・・。」

「・・・まだまだだねえ。」

ガチャ・・・

屋上の扉を開くと、そこには予想通り武田と宇喜田が待ち構えていた。

「ちゃんと来たぞ!二人を放せ!」

「やっと会えたぜ白浜。」

宇喜田がニヤリと笑い、拘束していた島山と田中らしき生徒を手放

す。

「ヒッヒイイイー！」

二人は大急ぎで逃げて行ってしまう。礼くらい言えやコラ！

「フフン。本当に来るとはね。」

武田が薄く笑みを浮かべる。

「でも、兼一君。そういう人間はすぐ馬鹿を見るのさ！」

軽薄そうな表情の奥からのぞく武田の目は、何か悲壮感を感じさせる。

「それでお前は何か馬鹿を見たのかい？武田一基。」

「お前！」

奥から現れた俺に宇喜田が声を出すが、構わず続ける。

「今のは実際に経験しないと出てこないセリフだろ？どうだい？」

「チッ！それを君に言う義理はないな。」

「まあ、そうだよな。」

頷く俺。そして横では宇喜田が俺を睨み付けていた。

「丁度いいぜ。お前には前回コケにしてくれた礼をしてやる。」

そう言うのにじり寄る宇喜田。

「まあ、待てよ。宇喜田だっけ？俺と賭けをしようぜ？」

「賭けだと？」

「そうそう。この屋上で四人で暴れるのは狭いし危険だからさ。俺は兼一の勝ちに賭ける。お前は当然武田に賭けるだろ？負けたら方が勝った方に絶対服従でどうだ？」

「そんな賭け・・・」

「乗った。」

話を聞いた武田が口を挟む。

「いいのか武田？」

「構わないさ。ボクが負ける訳が無いからね。」

武田の賛同のお陰で賭けは成立。俺はフェンスに腰掛けて戦いを観戦する事にした。

「もう！優君！勝手な事しないでくれよ！」

兼一が非難を口にする。

「そう怒るなよ兼一。このまま戦ってれば乱戦だったろ？それだと狭い上に屋上だ。誰かが大怪我したかもしれない。被害が出るのはお前も本意じゃないだろ？」

「た、確かに。」

「頼むぜ兼一。お前は一人で戦うんじゃない。これは俺の戦いでもあるんだ。お前に信頼を託した戦いだ。一緒に修行したからこそ俺もお前が勝てると信じてな。」

「分かった！やってみる！」

及び腰だった兼一の態度は一変した。それは覚悟を決めた目だ。

「この試合結果を新島に教えたらまた報酬くれるかな？」
「・・・やっぱり楽しんでない？」

兼一と武田が向かい合うと、武田はなにやらタイマー式のゴングとチヨークを取り出した。そして床に線を引いている。どうやら線をボクシングのリングに模しているらしい。準備がいいなあ。宇喜田は俺と同じく戦いを見守るため、少し間を空けて腕組みしていた。

「ついでにここで食うっちゃうか。」

俺はタコヤキパンの封を空けて齧り付く。

「やっぱり美味しいなあ。タコヤキパン。」

程よい甘さのソースと、しっとりとしたパン生地。中の具もタコの歯ごたえが良い感じだ。

「本当に観戦モードかよ。」

宇喜田がこっちを見て呆れていた。

「そうだよ？ほら。」

俺はもう一つパンを取り出し、宇喜田に投げ渡す。

「うお！何だこりゃ？」

「俺のオススメの購買メニュー。タコヤキパン。一人で食うのも味気ないし付き合ってくれよ。」

「ケツ。変な奴だぜ。」

悪態付きながらもパンを頬張る宇喜田。意外に良い奴かもしれない。立場が違えば友達に成れそうだ。

「始めるみたいだな。」

俺が二つ目に手を付けようとした所で兼一と武田が構えた。

チン！

ゴングが鳴り、先ずは兼一が正拳突きで仕掛ける！

「やあ！！」

「ふっ！」

ビシィ！

しかし、それを避けた武田の右のジャブが兼一の顔を捉えた。

「グアア！」

鋭いジャブだ。しかも打たれ強い兼一が倒れる程だから威力も重いのだろう。

「よっしゃ武田！そのままやっちゃまえ！」

「ダウン。カウント1・2・3……」

だが、丁寧にカウントを数える武田。よっぽどボクシングに思い入れがあるのだろうな。何で不良やってるんだろう？

「うおおおー！」

「おー良い根性だ。」

兼一が立ち上がるのを見て感心する武田。兼一は更に攻撃を試みる。

「はあああー！！！」

連続蹴りを武田は素早く避ける。

「フッ！！！」

ドス！ドス！ドス！！

そして三連続のパンチが決まり、またもダウンする兼一。

「だから言つたろ友人なんか見捨てときゃいいのに。そうだろ天道優君？」

振り返って勝ち誇ったように俺の名前を言う武田。前回の後、俺の事も調べたのか。

「フッ・・・その答えを訊くなら相手が違っぜ。同じセリフを後ろに言いな武田一基。」

「何？」

その後ろには、ダウンから復帰した兼一の姿。

「やれやれ、タフだねえ。」

呆れる武田。だが俺達から言わせれば当然。梁山泊での修行ではコレくらいのダメージはよく有る事だ。

再び対峙する二人。

「ハアアアアアー!!」

ブウン・ブン・・・ザツ・・・

兼一の攻撃は中々当たらない。しかし・・・

バシイイ!!

「グウ!?!」

兼一の攻撃が今まで上半身に集中していたせいか、目線から遠い口ーキツク、テ・ラインが武田の足に命中する。

「よし!」

上手いな。狙ってやったのか? まあ、俺との組み手でもテ・ラインを当てる練習は散々やったもんな。

「テリヤーーーーー!!」

ここぞとばかりに追撃を始める兼一。

バシーーン!!

今度は突きを囷にしてのテ・ラインが決まる。ちゃんと考えて戦ってるな兼一。今までの戦いでは余裕が無くて条件反射で技を出すだけだったのに。今回は冷静に戦えている。一ヶ月逃げ回ってる間の雑魚との戦いも、経験を積むという意味では無駄じゃなかったみたいだ。

「クツ・・・」

動きが鈍りだし焦りが出た武田。

「このっ！」

距離を詰めた兼一に牽制のストレートを当てるも、足が追いつかず三発目のテ・ラインを喰らってしまう。

「ぐあっ！」

逆に始めて兼一がダウンを奪った。

「や、やるな・・・」

膝を震わせながらも立ち上がる武田。ケンカではどうだったか知らないが、ボクシングの試合で足にダメージを負うことはなかっただろう。そういう意味でもテ・ラインは盲点といえる。しかもボクサーの長所、身軽なフットワークが無くなり、他の技も当たり出した。しかしおかしい。何故ここまで追い詰められても左腕を使わないのか？

「ティー・カウ・コーン！！」

兼一の回し膝蹴りが武田を捕らえようとしたが・・・

チン！

ゴングの音に気付き寸前で止める。

「なぜ止めた？」

「ゴングです！三分休憩でしょう？」

ほんと馬鹿正直なやつだなあ。当てれば勝負は決まっていたのに。

「はははは！馬鹿だな君は。」

武田も同じ感想のようだ。

「一分だ。一分間の休憩だ。」

「あ、そうか・・・」

しゃがみ込む兼一。一方武田は立ったままだ。

「座らないんですか？回復しませんよ？」

「素人の君とは違うんでね。ボクはまだ疲れてないんだよ。」

強がってはいるが、実際は座ってしまおうと立てないのだろう。膝が笑っている。

「一つ質問してもいいですか？」

「何かね？」

「何でボクシングを辞めたんですか？」

「・・・!!」

直球だな兼一。俺も気になってたが。

「・・・君は聞きにくい事を平気で訊くね。気を付けないと友達に嫌われるよ。」

「ガーーーーン!!」

兼一にとっては今までの攻撃より効いた口撃だな。かなり凹んでいる。

「まあいいさ。友達なんか助ける意味がない事を教えるのには丁度いい。」

そして武田が語る彼の過去。同じボクサー仲間を助けたことでの負傷。後遺症での左腕の麻痺。

「武田にそんな過去が在ったのか・・・」

兼一や俺以上に宇喜田もショックを受けている。フツ・・・居るじゃないか武田。友情を否定しながらも、直ぐ傍にお前を心配する仲間が。

チン!

「時間だ。どうだ?これを聞いても仲間が大切と言えるかい?」

言いながらも兼一に攻撃を加えて行く。

「違う!僕がここに来たのは己自身のためだ!友人を見捨てるのが

殴られるより嫌だったからだ！だから、彼らが感謝してくれなからうが、自分が損をしようが関係ない！！」

「・・・！！う、うるさい！」

「決して何も求めないし、後悔もしない！！」

「黙れええええ！！」

「なぜなら、友情は取引じゃないからだあーーーー！！」

ドガアアアアア！！

兼一のカウ・ロイが武田の顎に決まる。

「ぐああああ・・・」

倒れ込む武田。

「く、くそ・・・」

何とか立ち上がろうとしているが無駄だろう。足にもダメージを受けていて更に脳を揺らされたんだ。立てるはずも無い。ここらが潮時だろう。

「武田、お前の負けだ。テンカウントK・Oだ。」

本当は数えちゃいないが負けを認めさせるには良い方便だ。

「クッ・・・」

「賭けは俺達の勝ちだ。」

「・・・分かった。ボクの負けだ。好きにすればいい。」

潔く負けを認める武田。この期に及んでテンカウントに拘る辺り、

ボクシングを捨て切れていない彼らしい。

「待て！」

「宇喜田！？」

俺達の前に武田を庇うように割って入る宇喜田。

「武田はもう限界だ。ボコるなら俺にしろ！」

「う、宇喜田、何を！？」

「うるせえ！てめえはゴチャゴチャ考え過ぎなんだよ！仲間の俺にもあんな話せずに、水臭えじゃねえか！」

「負けたのはボクなんだ。君は関係ない。」

「お前に賭けたのは俺だろうが！」

ギヤーギヤー騒ぎながら庇い合う二人を見て、兼一がクスリと笑う。そして俺と目を合わせた。

「ねえ、優くん。」

「ああ兼一。多分俺も同じ事を考えてる。」

俺は武田たちに視線を移し、告げた。

「これで賭けは俺達の勝ちだ。二人とも俺達の命令に従って貰うぜ？」

「あ、ああ。」

「そんじゃ宇喜田、武田を背負え。」

「は？」

「ホラ、さつさとしろよ。」

「わ、分かった。」

戸惑いながらも武田を背負つ宇喜田。武田もしかたなく黙って背負われる。

「それじゃ行くか。」

「行くつて何処にだ？」

「怪我人が行くのは病院だろ？良い医者知ってるからついて来い。」

「治るよ？」

岬越寺先生の営む接骨院でケンカの治療後、動かなくなった武田の左腕を診て一言。

「ほ、本当ですか！」

興奮する武田。

「藪医者に当たったね。骨折のみ治療を施されている。脊髄の歪みを矯正し、神経の圧迫を解消すれば元通りに動くようになる。」

「本当に!？」

「治るよ。当然のようにね。私から言わせりゃ難易度の低い治療だ。」

「（出た。この人的常識。）」「」

俺と兼一は心の中で声を合わせる。

「でも・・・ボクシングは、無理です・・・よね？」

一瞬、場が緊張する。宇喜田もそれを心配そうに見守っている。

「ボクシング！？とんでもない！」

院内に落胆が広がる。だが・・・

「フッ・・・アームレスリングの世界チャンピオンだって目指せるよ。」

武田の顔が喜びに変わる。

「「よっしゃー！」」

兼一と宇喜田が喝采の声を上げる。意地が悪いなあ岬越寺先生も。

「意地が悪いなあって思ってるね？優君。」

「ソナナコトナイデスヨ？」

特に喜んでいるのは宇喜田で、涙ぐむ武田の代わりに男泣きしている。

「よかったなあ。武田あ・・・。」

「なんで君が泣いてるんだよ宇喜田。」

「馬鹿野郎！泣いてねえよ！」

良い友達じゃないか武田。それを見届け、俺ははしゃいでいる兼一の傍へ行く。

「ともあれ、上手く行つたな兼一。」

「優君の提案のお陰だよ。」

「俺もこんなに上手く行くとはい思つてなかつたさ。『友情は取引じゃない』か。いい台詞だったぜ。」

「うう・・・改めて言われると照れ臭い。」

「とにかくお疲れ。」

「うん。ありがとう。」

パシッ

互いの手を叩き合つた。

第十話 決着！対技の3人衆！（後書き）

原作でも最後は爽やかなラストだったため、その雰囲気を出すのに苦労しました。

優が居るため、フェンスから落ちそうになる話と宇喜田との直接対決は変わってしまいましたね。

第十一話 モジャモジャの後、ケンカ。所により血の雨が降るでしょう！（前書

日に日にエロくなる原作！こちらも乗っかるべきか！？

第十一話 モジャモジャの後、ケンカ。所により血の雨が降るでしょう！

「馬先生。新作が出来上がったので意見を聞かせて貰えますか？」

今日は梁山泊の一室で馬先生と談笑中だ。予てより制作していた絵が完成したので、その意見も聞こうと思う。

「ほほう。優ちゃんの絵は完成度が高いからね。楽しみね。でも美術関係は秋雨どんのほう詳しいんじゃないかね？」

「いやいや。今回の絵は寧ろ馬先生向きですよ。以前にプレゼントした絵からして想像が着くのでは？」

「まさかね!？」

思い至り、馬先生の目が期待に満ちる。

「そのまさかですよ。しかも今回は美羽バージョン。それもフルカラーですが・・・気乗りしなければご忠告通り岬越寺先生の所に行って行こうかと思えますが？」

「いやん！優ちゃんも意地悪ね。そこまで聞かされておいちゃんが断る訳がないね。」

「では？」

「うむ。全力で評価させて貰うね。」

「それでは・・・こちらです。」

カバンから完成した絵を取り出す。

「な！なんと!!!」

俺が描いたのは、美羽が回し蹴りを放つ瞬間。それもローアングル

視点で美羽のボディラインを忠実に再現してみた。

「如何でしょう？」

「す、素晴らしい出来ね。美羽のスタイルの良さを完璧に再現してるね。そして何よりこの超ローアングル。通常お目にかかれない視点だけに、その躍動感と相まって物凄い存在感ね！」

「流石、分かってらっしゃる。」

「優ちゃんの絵画の腕は最早達人級ね。」

「フッフ・・・そこまで言ってもらえるとは光栄です。」

「出来ればこのまま譲ってはもらえんかね？」

「すみませんが、これは入魂の一品なのでそういう訳には・・・コピーで宜しければ後日にでも。」

「むう・・・残念ね。今回はそれで妥協するね。」

そんな会話を繰り広げていると、溜息を付く兼一が部屋の前を通り過ぎて行った。

「恋愛か・・・誰か相談できる人は居ないのかな・・・。」

ピクン！

兼一の呟きに素早く反応した馬先生。一瞬で兼一の前に回り込み、任せるとばかりに胸を張る。

「はぁ・・・。」

しかし完璧にスルーされる。

「ちょっと待つね兼ちゃん！色恋沙汰の相談ならこのおいちゃんに任せるね！」

道着を引つ張つて引き止める馬先生。確かに色の方は信用できそう
だ。

「こつ見えてもおいちゃんは昔はちよつとした色男で、星の数ほど
恋愛をこなしてきたね！中国の光源氏とはおいちゃんの事ね！」

「えーホントにー？」

俺と兼一は声を揃えて疑問を投げ掛ける。

「これが証拠の写真ね！」

懐から取り出した写真は白黒だが、写っているのは確かに美少年だ
った。

「「び、美形！！」」

驚く俺達。だが、今の馬先生を見て頂垂れる。

「時が見える・・・。」

「ああ。時間とは残酷だな。」

「大きなお世話ね・・・。」

気を取り直し、俺と馬先生は兼一の悩みを聞いた。話は案外単純な

もので、美羽をデートに誘うきっかけを探しているとか。

「なんね、そういう事ね。デートに誘いたいなら素直に口で言えばいいね。」

あつさりと答える馬先生。だが、思春期の少年の心境は複雑だろう。俺の場合は現世で言えば同じ歳だが、前世の年齢から換算すると・
・止めておこう。

「簡単に言わないでくださいよ。あの娘の場合、肘鉄とか飛んで来そうで・・・」

「兼一、相手の事も信頼せずに何の恋愛ね。」

俺も馬先生の言葉に頷く。

「だなあ。寧ろ肘鉄ごと受け入れる位じゃなきゃ上手くはいかんぜ兼一。」

「でも僕まだ美羽さんの事、あまりにも知らな過ぎて・・・。」
「ならばよく知る事から始めるね。」

言いながら馬先生が取り出した本にはこう書かれていた。『美羽のひみつ写真集』

「おいちゃんの特製。今ならたった三千二百円。税別ね!」

「な、なんて物を! 貴方は日本一素晴らしい中国人だ! 我が家の家宝にさせて頂きます!」

即金で支払う兼一。羨ましい。俺も欲しいぞ。

「何してますの? 皆さん?」

「「なんでもないです（ないね）！」」

慌てて二人は金と本を仕舞う。

「はあ・・・そうですか・・・あの兼一さん。良ければ明日、買い物に付き合ってもらえますか？」

「え？」

おお！デートか？しかも美羽の方からアプローチとは、意外な展開だ。しかし降って湧いたような状況に兼一は頭が付いて行かず、真っ白になっている。

「ほら、兼一。返事しないと。」

「ハイ。ヨロコソデ。」

辛うじてそれだけ言う兼一。

「よかった。ありがとうございます。」

礼を言い美羽は去って行った。

「良かったな兼一。」

「上手くやるね兼ちゃん。」

だが未だにフリーズしたままの兼一にその祝福は届いてなかった。

「ところで馬先生。」

「何ね優ちゃん？」

「あの写真集、当然しぐれさんバージョンも有るのでしょうか？」

「ふっふっふ。鋭いね優ちゃん。」

「是非、お譲り下さい。」

「さっきの美羽の絵と交換でどうね？」

「勿論です。」

ペラ・・・ペラ・・・

「ぐお！こんな所まで！！」

「ムッフ。おいちゃん渾身一枚ね。」

「何・・・してる・・・の？」

「うお！しぐれさん！！ななな何でも無いですよ（ないね）！？」

「・・・そう。」

翌日、兼一を美羽を尾行する二つの影・・・

「何でここに居るんですか馬先生。」

「優ちゃんこそどうしてここに居るね？」

兼一達の様子を見ようと、梁山泊の門の近くで張っていたら馬先生と鉢合わせしたのだった。

「俺は大切な兄弟弟子の門出を見守ろうと思ひまして。」

「おいちゃんは可愛い弟子の晴れ舞台を見に来ただけね。」

つまるところはどっちも野次馬だ。他人のデートを覗きに行くって、暇だな俺も。

「どうやら考えてる事は同じみたいね。」

「ええ。そうみたいです。しかし、カメラ持参とは準備がいいですね。」

「ふふふ。手ブレ防止の機能付きの最新型ね。」

自慢気に手元のカメラを見せ付ける馬先生。

「その熱意には感心しますよ。」

「優ちゃん、エロに妥協は無く、妥協にエロは無しね。」

「基本はエロなんですね。しかも何処の格言ですか。」

言いたい事は分かるけどね。

「む！行ってしまうね。追いかけるよ優ちゃん。」

「了解です。」

そして兼一達が向かった先は……

「あれはもしかして荷物持ちですか？」

「もしかしなくても荷物持ちね。」

俺達の目線の先には八百屋で品定めする美羽と、大量の荷物を背負う兼一の姿。

「買い物って梁山泊の食糧だったんですね。」

哀れ兼一。昨日は別れ際までハイテンションだったのに、今は見る影も無い。

「うーん。流石に不憫ね。でも美羽が梁山泊の人間以外に頼る事はほとんど無いから、これも立派な進歩ね。」

「けど、それに兼一が気付きますかね？」

「・・・見るからに可能性は薄いね。」

「ですよね。」

他人事ながら溜息を漏らす俺達。後を付けた俺達のテンションもダダ下がりだ。

「移動するみたいですよ。」

「一応最後まで付けてみるね。」

「絡まれてますね。」

「アレが兼ちゃんを狙ってるラグナレクとかいう子達ね？」

「ええ。知った顔の奴もいますし、間違いないです。」

二人の買い物ルートでラグナレクの人間が待ち構えていた。その中には以前兼一が倒した古賀の姿も有る。だが兵を率いてるのは古賀では無く、長髪長ランの男。見た事の無い奴だ。

「来いよ白浜。男同士、一対一で話をしようじゃないか。」

そんな事をのたまっている。

「大人数引つ張って来てよく言っぜ。」

「理屈の通らない人間は多々居るものね。優ちゃんはああいう人間には成っては駄目ね。」

俺と馬先生が酷評しながら後を追うと、兼一と長髪男は近くの公園に向かった。途中、心配で後を付いて来た美羽と合流したのだが・

「付けて来たんですの！？もう優さんまで！」

美羽はおかんむりの様だ。

「デートというから期待して付いて来たのに荷物持ちとはね。」

「そうだぜ美羽。これじゃ兼一が不憫だぜ。」

「そんな、私はデートなんて・・・兼一さんとはそんな関係じゃ・・・」

「まあ、美羽の言いたい事も分かるさ。けど、美羽みたいな可愛い女の子との買い物に期待する男心も分かってやれよ。」

俺は一応どちらにもフォローしてみる。

「わ、私が可愛いって・・・」

モジモジする美羽。確かに可愛い。

「優ちゃん、今は天然ジゴロの発言ね。」

「むう・・・それより早く追いましょ。」

公園に着き、茂みの中で三人。兼一と長髪のやり取りを見守る。

「……っ！」

出て行こうとする美羽を馬先生が制止する。

「美羽が出て行って敵を倒せば、兼ちゃんが傷付くね。美羽はもつと知るべきね。下手な手助けが相手を余計に傷つけるといふ事を。」
「でも！」

美羽も心配なんだなあ。ここまで大切に思ってるなら、恋愛感情になるのもそう遠くないんじゃないか？

「心配するなよ美羽。俺も居るんだ。ヤバくなったら俺がなんとかするからさ。」

兼一にとっては、どれだけ美羽が強かろうと守る対象なのだ。その守るべき者に助けられては傷つくだろう。だけど俺であれば別だ。仲間と助け合って窮地を脱した事になる。これならば問題はない。

「優さん……。」

「まあ、今は見守ろうぜ？」

「はい。」

「単刀直入に言うぜ。白浜、俺の部下になれ！」

長髪男の第一声はそれだった。やっぱり目的はそれか。武田達もキサラっていう奴の指示で兼一を連れて行こうとしていたし、予想は当たったな。だが、当然兼一の答えは・・・

「お断りします！」

だよな。

「だったら、俺と勝負しろ！」

長髪は兼一に勝負を挑んで来た。しかし、無益な争いを好まない兼一がそれを受ける訳がないのだが・・・

「怖いのか？このフヌケが！」

この罵倒は兼一の地雷だった。挑発に乗る形で戦いは始まってしまった。

「馬先生、どう見ます？この戦い。」

「うん。あのもじやもじや君、多分兼ちゃんよりできるね。」

「やっぱり。」

兼一と長髪改めもじやもじや君の戦いは一見、兼一の有利に思われた。しかし兼一を揺さぶるような挑発と独特の雰囲気徐徐に形勢は逆転する。

「やっぱり彼、ケンカ慣れしてるね。」

馬先生がそう評する。

「ケンカ慣れですか？」

美羽が反芻するように聞き返す。

「戦いにおいて勝負を決するのが実力の差とは限らないね。優ちゃん、この場で兼ちゃんが劣っているものは何だと思うかね？」

馬先生が問題でも出すように訊いてくる。俺は改めて二人の戦いを見つめる。

「場数と経験・・・平たく言うなら雰囲気ですかね？」

「正解ね。恐らく兼ちゃんは相手のペースに乗せられているね。相手の土俵で戦うのではなく、自分の土俵に相手を引き込む。そんな駆け引きが兼ちゃんには欠けているね。」

「なるほどー。」

「経験にしてもそうね。実力が上でも経験を重ねた者にしか得られないコツというものがあるね。」

「では、尚の事助けないと！」

心配そうに兼一を見る美羽。

「まだ様子見ね。」

「うっー。」

ヤキモキしてる美羽もかわええ。

と、その間にも戦いは続き、扣歩・擺歩で兼一がもじやもじや君を転ばす。しかしそれで油断した兼一は蟹ばさみで倒され、足に間接技を極められてしまう。

「馬先生、そろそろ限界では？」

「いや、アレを見るね！」

「え！？」

目線の先には意外な人物が兼一を助けに来ていた。

「相変わらず戦い方がスマートじゃないね。辻 新之助。」

ズビシ！バシュ！

「ぐお！」

顔にパンチを喰らい、兼一から離れるもじやもじや君改め、辻 新之助。殴ったのは何と以前に兼一と戦った武田だった。

「た、武田一基！？」

「武田さん！あんたでも幹部を殴ったらただじゃすまねえぞ！」

「何て事してくれたんだ！」

「関係ないね。辞めることにしたから。ラグナレク。」

そんな非難の声も何処吹く風とばかりに武田は言う。

「てめえ！ラグナレクを辞めると！？脱会リンチだ！」

辻の号令で兵達が武田を襲う。頃合いだし俺も参加しよう。

「オリヤー――！！乱入者2号登場じゃ――！！」

どげし――！！

「何い――！！」

兵を殴り飛ばして兼一と武田の元へ走る。

「よ！武田。助太刀なんていい所あるじゃないか。」

「やあ。優君。君も来ていたのかい。兼一君にはボクサー生命を助けてもらった借りが有るからね。」

へー。結構義理堅い奴だ。

「兎に角この場合は・・・」

「戦略的撤退だな。武田は兼一を頼む。露払いは俺に任せろ。」

「いいのかい？」

「まだ左腕は完治してないんだろ？」

「ああ、じゃあ任せるよ。」

「了解！オラオラ――！！逃亡者様の御通りだぜ――！！」

ズガ！ビシ――！！ドガア――！！

向かって来る兵を蹴散らしながら公園を走り抜ける。

「ヒュー――！戦ったのが君じゃなくて良かったよ。」

「そりゃどうも――！！」

第十一話 モジャモジャの後、ケンカ。所により血の雨が降るでしょう！（後書

暑い・・・いつも座る座布団が湿ってくる今日この頃。

第十二話 内弟子打診（前書き）

やっところ内弟子。

第十二話 内弟子打診

兼一が辻に負けた日の翌日、何故かその事は噂になっていて、兼一は不良に絡まれていた。噂を広めたのは十中八九新島だろう。協力したり足引つ張ったりよく分からない奴だ。

「白浜あ！今までデカイ面してた落とし前を付けさせて貰うぜ！」

俺と兼一を囲む不良達。

「何がデカイ面だ！自分の顔見て言え！この×××（放送コードに乗ると番組が打ち切られる程の罵詈雑言）！！」

「なっ！！誰だてめえ！！」

殺気立つ不良A。

「おい！もしかして白浜の横に居る女顔の奴って・・・」

「まさか！てめえが天道か！？」

「おろ？俺も少しは有名になったのかな？」

それを肯定と受け取った不良達は困惑し始める。面倒だからできればこのまま退散してくれないかなー。

「ビビるな！白浜は病み上がりだし絶好の機会なんだ！優男二人くらいどうって事ねえ！」

不良Aが仲間にハッパを掛ける。うーん。戦いは避けられないようだ。

「だったら三人ならどうかかな？」

「た、武田！」

援軍に武田が登場。不良達に動揺が広がる。

「し、知ってるんだぜ武田あ。お前、ラグナレクを抜けたんだろ！
？もう後ろ盾もない筈だぜ？」

「うるさいよ！戦るのか戦らないのかどっちだ！」
「ぐ……」

武田の凄まれ怖気ずく不良A。どれ、俺も脅してみるか。

「かかって来るなら覚悟しろよ。昨日は俺と武田にラグナレクの辻
隊は大打撃を受けたんだ。一個小隊と戦るつもりで来い！」

できれば来んな。

「き、今日の所は見逃してやるぜ！」

足早に去っていく不良達。

「ハッハッハ！一個小隊とは言うね優君も！」

「雑魚相手にしても疲れるだけだしね。」

「しかし兼一君、一応君はボクを倒した男なんだから、その辺の雑
魚にやられてくれるなよ？」

「うう……すいません。どうも見るからに不良な人を見ると、ダ
メダメモードに……。」

そんな話をしながら三人で歩いて行く。すると……

「見つけたぜ！」

「宇喜田？」

現れたのは宇喜田。なにやら真剣な表情で武田を見る。

「武田、お前ラグナレクを抜けるそうだな。」

「ああ。」

「始めからお前は俺らとはどっか違ったが、分かったぜ。お前は不良じゃねえ。スポーツマンだ！やれよボクシング。脱会リンチは俺が時間を稼いでやる。その間にベストにしておけ！」

「宇喜田……」

「あばよ。突きの武田！」

二ヒルに笑い、宇喜田は背を向けた。

「……サンキュー。投げの宇喜田。」

武田もその背に呟く。

「「良い友達だ。」」

そして俺と兼一は思う。アイツとは大違いだと。二人の脳裏には学生服を着た宇宙人の姿が過ぎった。

梁山泊サイド

「では、第二回弟子育成会議を始める！」

秋雨が宣言し道場に喝采（主にアパチャイ）の声が響いた。

「先の戦いに敗れた事から、我らは兼一君に甘かったと考えられる。よって予てから暖めていた計画を実行に移したいと思う。名付けて・・死んで元々人生格闘化大作戦！！」

秋雨がタイトルを告げると再びアパチャイの喝采が起きる。

「で、その作戦、具体的には何をするのじゃ？」

長老が話を促す。

「まず梁山泊に住み込ませ、生活の全てを武術で染め上げます。武術による武術のための生活！彼は迫られるでしょう！武術か死か！？」

「うわぁ・・・ブルブル・・・」

お茶を持って来た美羽が秋雨の言葉に震える。

「つまり、兼一君を梁山泊の内弟子にするという訳じゃな？」

長老が結論を出す。

「兼一の事は分かったが、優の奴はどうするよ？」

逆鬼がもう一人の弟子、優に関して提起する。

「優ちゃんの場合、二つ返事で了承しそうですね。」

逆鬼の言葉に剣星が言い、皆もその意見に賛同する。

「うむ。私も彼の事は心配はしていない。」

秋雨も頷き、長老も更に補足する。

「土日の泊まり込みの時も自分から頼むくらいじゃからのう。それに才有るものが近くに居れば兼ちゃんにも良い刺激になるう。逆に兼ちゃんの優しさも優ちゃんには良い影響を与えているようじゃしの。」

それに異論の声は無かった。

優サイド

「では、第一回梁山泊対策会議を開く！」

俺の宣言で始まったこの会議。発端は今日の修行が理由だ。

「何故か今日に限って先生達が妙に優しいと思わないか兼一？」

「うん。いつもなら腕立て伏せで潰れたら町内十周！！とか言うの

に、今日は回数が何時もの半分もなかったよ。」

「ああ。ここまで行くと寧ろ気持ち悪いな。一体どういう事だ？」

「美羽さんは何か聞いてませんか？」

「ええつと・・・あの・・・。」

兼一の問いに言い淀む美羽。何か知っているな？

「美羽、知ってるなら正直に答えてくれ。じゃないと・・・。」

「じゃないと？」

「俺と兼一は美羽でイケナイ妄想を繰り広げる。」

「ええええー!？」

「兼一、想像してみる。俺達は修行で汚れた体を洗うためにここで風呂を借りるんだ。しかし偶然にも先に入浴していた美羽と鉢合わせ！一糸纏わぬ美羽。目線を下げたその先には、はちきれんばかりの美羽のちぶ・・・。」

「いいますう！だからその妄想は止めて下さいですわー!!！」

フツ・・・チョロいぜ美羽。

「ブフー!!!優君幾ら何でも今のは・・・。」

鼻血を吹く兼一。

「おっと。ウブな兼一には刺激が強かったか。」

「うっ・・・。馬さんが二人居るみたいですわ。」

馬先生とはエロス同盟（仮）を結んでいるからな。

「気を取り直して・・・美羽、話して貰おうか。」

「はい・・・実は・・・ムグッ!!！」

突如、美羽の口を塞ぎ、何者かが連れ去る。

「ああ！優君！今のは長老の手だったよ！」

「でかした兼一！！やっぱ、何か有るぞ！ここに居ては危険だ！脱出の準備を！！」

「うん！！」

俺達は出口に急いだ。しかし・・・

ズザー！

行く手を阻む様に現れた逆鬼先生。

「おつと何処に行くんだお前ら？まだ修行は終わってないぜ。」

「くっ！逆鬼先生！」

「優君！こっちからは岬越寺先生が！」

挟み撃ちか！

「まさに前門の虎、後門の狼だぜ！こうなったら縁側から中庭へ！」

だが俺達が外へ飛び立とうとしたその瞬間・・・

「待てえい。」

パシッ・・・

俺と兼一は長老に襟首を？まれ捕獲される。

ブライン……

「一体何なんですか!？」

「やっぱり今日の違和感と関係してるんですか？」

俺達は長老に問いたです。

「ほっほっほ。無駄に警戒を与えてすまんのぉ。」

「兎に角理由は聞きますんで降ろしてもらえますか？」

「うむ。」

「何だそういう事ならハッキリ言ってくれば良かったのに。」

いつの間にか師匠達勢が揃いの中、俺は今日の異様な雰囲気の原因を聞いて納得した。

「という事は、優ちゃんはおーけーじゃな。」

「はい。内弟子ですか。部屋は足りてるんですよ。」

「うむ。掃除をすれば使える部屋が幾つか空いておる。」

「優君、そんなにあっさり決めて大丈夫？」

兼一はまだ決めかねているらしく、恐る恐る訊く。

「大丈夫さ。ある意味、ただの門下生から昇進だぜ？」

「う……前向きだね……。でも、完全管理で武術漬けって……」

今でもギリギリなのに、僕なら軽く死ねる気がする。」

踏ん切りが付かず悩む兼一。

「兼一は中々覚悟が決まらねえなあ。」

「どっちの反応も予想通りね。」

逆鬼先生と馬先生が俺達を見て感想を漏らす。

「仕様が無いね。おいちゃんがもつと上手く説明してあげるね。」

業を煮やした馬先生が岬越寺先生に代わり、兼一の説得に乗り出した。その内容は岬越寺先生の切り口とは一味違うものだった。具体的には、内弟子になれば美羽と一つ屋根の下とか。内弟子になれば美羽とのウフフなハプニングがあるとか。美羽がどうか。美羽がどうか。美羽が……。

「うん！僕内弟子になるう！！」

洗脳完了。

「剣星の奴すげえ力技でやり込めやがった！」

逆鬼先生も驚きの声を上げる。

「馬先生、今みたいな話って在り得るんですか？」

一応確認してみる。

「ん？兼ちゃんが期待する分には問題無いね。」

漂々と言う・・・うん。詐欺の手口だ。

「もしかして、馬先生もソレに騙されたクチですか？」

「ぐ・・・鋭いね優ちゃん。」

「『弟子は師に、師は弟子に似る』ですね。」

「優ちゃん、シニカル過ぎて笑えないね。」

帰宅後、内弟子の件を兄さんに伝える。

「ああ、父さんから聞いてるよ。岬越寺先生から連絡が有ったってさ。」

「早ッ！事後承諾じゃん。」

手回し良過ぎだろう。

「元々断る気はなかったんだろう？」

「まあ、そうだけど。」

「いつから向こうにお世話になるんだ？」

「梁山泊の人たち気が早くてね。明日から。」

と、その話を聞いていた第三者が会話に参加。

「ええ？じゃあ優君、向こうに行っちゃうの？」

「そうなるね。」

途中から話に参加したのは、藤井 凜。俺達天道兄弟の幼馴染で兄さんの彼女だ。偶に夕飯を作りに来てくれる。

「寂しくなるわねえ。」

「でも邪魔者が居なくなるから、思う存分イチャつけると思ったろ？」

「・・・ちよつとだけ。」

思っ たんかい。

「それじゃ、持つて行く荷物の準備するから。」

「分かった。それと優、菓子折り買っておいたから持つて行けよ。失礼のない様に気を付けるんだぞ。」

準備がいいなあ。

「りょーかい。兄さんも気を付けて。」

「・・・何をだ？」

「兄さんのサイフの中の『明るい家族計画』に、針で穴空けてあるから使わない方がいいよ。」

「ちよつ！お前何ちゆう事を！」

「おちやめな弟のイタズラでござーいー。」

「弟のイタズラで子供作ってたまるか！」

しかし、隣で赤くなっている凜ちゃんが爆弾投下！

「私は構わないのに。」

「「！！！」」

兄夫婦の（まだだけど）性生活なんか聞きたく無かったぜ！

注：イタズラは後のダメージを考慮して行いましょう。

第十二話 内弟子打診（後書き）

コンビニは「コンドームからビニールまで売っている」の略だって、
ばあちゃんが言ってた（嘘）！

第十三話 ビバ内弟子！（前書き）

関係ないけど田んぼにメダカ取りに行ったら、水が殆どお湯だった。
良く生きてるなメダカ・・・

第十三話 ビバ内弟子！

「さあ！今日から内弟子生活の始まりだ！」

「・・・元気だね優君。」

俺と兼一は自分の達の荷物を宛がわれた部屋に下ろし、住み込みの準備を始めていた。

「なんだ兼一、まだ決心が付かないのか？」

「これからの修行を思うと胃の調子が・・・ていうか、美羽さんの部屋は母屋で僕ら離れたし、馬先生には騙されたよ。そうそう現実には甘くなかった・・・。」

「つらい修行は現実だがな。」

「うぐ・・・優君、僕を脅して楽しんでない？」

「はっはっは、まっさかー。」

未だに兼一は落ち込みモードなので少しフォローしてやるか。

「兼一、確かに馬先生の言う程あからさまにオイシイ状況はそうは無いかもしれん。」

「うう・・・やっぱり・・・。」

「だが、もつと大局を見るんだ！」

「大局？」

「美羽は特殊な環境で育ったため、元々友人が少ない。男友達といえはお前と俺ぐらいだろう。後は学校の女子数人だ。」

「うん。」

「もし、これから美羽に惚れる連中が出てきても、梁山泊に泊まり込む俺達はそいつらと比べて美羽との接点は確実に多い！これはどう考えても絶対的なアドバンテージと言える！」

「な、なるほど！でも、修行に明け暮れて日に何度も会える訳じゃ・
・。」

ここで俺は取っておきのカードを出す！

「だから大局を見ると言ってるのさ！いいか？一日に学校で美羽と
過ごす時間が正味一時間だとする。学校の連中ならそこでお仕舞い。
だが、俺達は梁山泊で更に一時間過ごす・・。単純に接点は二倍
だ！これが卒業まで三年続く頃には、ライバルとの差は絶対なもの
になっているだろう！！」

「す、凄いよ優君！！何だか希望が湧いてきた！」

フツ・・・そうだろうそうだろう。

「しかし、お前が梁山泊で情けない姿を見せ続ければ計画は瓦解し
てしまう。それを回避する為にも修行でへたばる姿を見せる訳には
いかないのだ。だからここは敢えて歓迎の意を示そうじゃないか！
ビバ修行！ビバ内弟子！」

「ビバ修行！ビバ内弟子！」

「声が小さいぞ！台所の美羽に聞こえるように！ビバ修行！ビバ内
弟子！」

「ビバ修行！ビバ内弟子！」

梁山泊サイド

「ビバ修行！ビバ内弟子！」

様子を窺いに來た劍星と秋雨は、その声を聞いて満足そうに微笑む。

「中々上手く乗せるねえ優君は。」

「大したモノね。」

「二人一緒に内弟子にした効果がこんなに早く現れるとは。我々の作戦も捨てたモノでは無いな。」

「それもここまで相性の良い兄弟弟子は初めてね。」

優サイド

「それでは今日より、お主ら二人を梁山泊の正式な弟子とする。」

修行は長老のそんな真剣な言葉で始まった。

「いいか！今から俺達の事は先生では無く師匠と呼ぶんだ！」

次いで逆鬼先生改め逆鬼師匠が言う。それに俺達は声を揃える。

「はい！逆鬼師匠！」

「・・・いやあ、何か照れるな。」

パチパチパチ・・・

何故か皆さん拍手。

「それでは早速修行を始めたいが・・・」

「あ、その前にコレをどうぞ。」

俺は持つて来た菓子折りを渡す。本当は修行後に渡すつもりだったけど、アパチャイさんがお菓子の匂いを察知していて落ち着かないので先に渡す。

「おお、これはどうもご丁寧に。」

長老に渡す。

「くんくん・・・匂いからしてお菓子よー!」

「これ、はしたないぞ、アパチャイ。」

窘める長老。

「クッキーの詰め合わせですね。それと、岬越寺師匠には兄が宜しくとの事でした。」

「ああ、始君か。彼にも一度手ほどきした事があったね。もうそろそろ武術の腕も達人に近づいている頃かねえ。」

「もう二、三年したら道場を継ぐらしいですよ。」

「ほう。その時は是非お祝いに掛け付けると言っておいてくれたまえ。」

「はい。」

挨拶が済み、俺達の内弟子としての修行が始まった。先ずは基礎鍛

鍊に鉄棒に足を掛け、腹筋・背筋のトレーニング。

パチ・・・パチ・・・

「ギャー！！！」

兼一が隣で叫んでいる。彼の下には焚き火。腹を火傷する前に背を向け、背を火傷する前に腹を向ける。強制的な腹筋・背筋の運動だ。

「師匠ー！何故僕の下だけ火がー！？」

パタパタと内輪で火に扇ぐのは岬越寺師匠。

「名付けて、スルメ踊り。」

「名前を付ければ良いってモンじゃない！」

「兼一君、悲しいかな君には才能が無い。才能の無い者は命がけという諸刃の剣を用いなければ、ある一定の水準を越えるのは不可能なのだよ。」

「よっ！はっと！頑張れ兼一。」

俺も隣でトレーニング。因みに火は無い。

「ひ、他人事だと思ってー！！」

その日の修行は日が暮れるまで続き、内容も今までに無く濃密なモ

ノだった。流石に俺でも足元がフラ付く。そして不覚にも段差に躓いてしまう。

「おっと！」

大きな手で支えてくれたのは逆鬼師匠。

「流石のお前も疲れたみてえだな。」

「ああ、すみません。初日で張り切り過ぎちゃいました。」

「それなら、温泉でも入って来いや。」

「温泉ですか？」

梁山泊にそんな贅沢な物があるのか？

「ずっと前にアパチャイが掘り当ててな。丁度良いつてんで、じじい（長老）がそのまま露天風呂にしたんだ。汗と一緒に修行の疲れも落して来たらどうだ？」

「天然の露天風呂か。風流でいいですねー。早速行ってきますよ。」

俺は部屋から着替えを取り、教えて貰った露天風呂へ向かう。道中、温泉帰りのしぐれさんと美羽に出会った。

「あらあ、優さんも温泉ですか？」

「やあ。二人も入って来たのか？」

「ええ。良いお湯でしたわ。」

「・・・コクリ。」

頷く二人を良く見るとまだ少し髪が濡れている。

「うーん。さすが美人二人の湯上り姿は色っぽいね。」

「わわっ！またそんなからかうような事言って！」
「はは。それじゃ行ってくるよ。」

俺は再び温泉へ歩き出す。

「優・・・」

しぐれさんに呼び止められる。

「ん？」

「お背中・・・流しましょう・・・か？」

「ななな！しぐれさん何言ってるんですかーですわ！」

何故か美羽が慌てている。むう・・・どう言ったものか・・・

「なんちゃ・・・た。」

なんちゃって。と言いたかった様だ。

「さっきの・・・お返・・・し。」

なるほど。からかったお返しらしい。

「ナイスお返しです。しぐれさん！」

取り敢えずサムズアップ。

「ん・・・。」

同じ様に親指を立てて返すしぐれさん。さて、行くのでしょうか。

「おー！なかなか贅沢だぜ温泉！」

俺は立ち上る湯気の前でテンションを上げる。これから毎日入れる
うえに貸切状態だ。

「おや、その声は優ちゃんじゃな？」

湯気の奥から現れた巨体・・・長老だった。まるで雪山でビッグベ
アに遭遇したみたいなた状態だ。知らない人が見たら絶対驚くぞ。

「どうも長老。居たんすね。」

「うむ。いつもは一番風呂なのじゃが、今回は特別でう。」

「どうかしたんですか？」

「ワシの予想では、剣星の奴が兼ちゃんを伴って覗きに来ると思っ
ての。」

「ああ。だからしぐれさんと美羽が先に。」

「うむ。」

道理で兼一を誘いに行っても部屋にいなかった訳だ。

「それじゃ、少し脅かしてあげましょう。」

俺は長老に耳打ちした。

「ほっほっ！それは面白い。」

剣星・兼一サイド

しぐれが仕掛けた覗き防止の罠を掻い潜り、やっとの事で温泉に到達した二人。

「では、先においちゃんが安全を確認するね。」

「ズルイですよ師父！」

「やかましい！弟子は師匠より後と四千年前から決まってるね！」

「そんな事言つて！先に覗きたいだけでしょうが！」

師弟は醜い争いを続けていた。

「仕方ないね。それなら二人一緒に行くね。」

揃って岩場の影に隠れ、中の様子を窺う。そこには温泉に浸かる人影が一つ。

「ああーん！良いお湯（裏声）。」

「「おおおおー！」「」

二人のボルテージは最高潮に！しかし・・・

「何をしとる！入るならさっさと入らんか！」

バシャーーン！！

背後から現れた長老に温泉へ放り込まれる！

「くつくく・・・湯加減はどうですかお二人さん？」

温泉に浸かっていた影が言う。

「ゆ、優君！？」

「優ちゃん騙したね！？」

「ははー。良い夢見れましたか？」

得意げに現れた影、優が二人を笑う。

「クーツ！無念です師父！」

「なんの！まだまだチャンスはあるね！」

懲りない二人の挑戦は続く・・・

第十三話 ビバ内弟子！（後書き）

やっと内弟子に。ここまで長々的にどうなんだろう？

第十四話 妹来たりて（前書き）

今回短め。

第十四話 妹来たりて

梁山泊の内弟子になって一週間が過ぎた頃。何やら台所で物色するしぐれさんとアパチャイさんを見かけた。

ガサゴソ・・・ガサゴソ・・・

「二人ともどうしたんですか？」

俺に気付いたアパチャイさんが言う。

「アパー優！お客さんよ！お茶入れるよ！」

「客？」

居間を覗くと、そこにはちっちゃい子がちゃんと一人。

「よう。ほのかじゃないか！」

「む！出たな女顔！」

女顔って、また直球な。

「なんだ、あれだけ遊んでやったのに釣れないなー。」

「あのときはただ弄くられたただけだよ！」

そっだっけ？

「生憎、兼一は留守だから、適当に遊んで待ってれば帰って来ると思っぜ。」

それだけ言い残し、台所の二人に頼んでおく。

「アパチャイさん、しぐれさん。お茶は俺が入れますから、ほのかの相手でもしてあげて下さい。」

「分かったよー！オセロでもしてるよー！」

「分かつ・・・た」

ふう、良かった。家事能力ゼロの二人に任せるととんでもない物作りそうだな。

「お待たせ。」

俺はお盆に乗せた人数分のお茶を配る。

「アパパ！美羽程じゃないけど美味しいお茶よ！」

「それはどうも。」

恐らく褒め言葉な感想を言ってくれるアパチャイさん。美羽ばかりにやらせるのも大変だろうから、今度上手いお茶の入れ方を聞いておこつ。コーヒーなら自信あるんだけどねえ。

「ただいまですわー！」

「今帰りました。」

玄関で声がした。兼一と美羽が買い物から帰って来たようだ。

「あれ？ほのか？」

「お兄ちゃん！」

入ってきた兼一に抱き付くほのか。

「こら、恥ずかしいからくっ付くな！」

照れる兼一。隣では美羽がほのかを愛でるように見ている。

「ああーやっぱりカワイイですわー。」

「何だ美羽は妹が欲しかったのか？」

「いえ、私、一人っ子だったので兄弟に憧れていましたの。」

複雑な表情で語る美羽。なにやら込み入った事情が有りそうだ。俺はそれを払拭する様に笑い飛ばす。

「はっはっは！なーんだ。そんなことか。それなら良い解決法があるじゃないか！」

「解決法？」

美羽の耳元に囁く。

「兼一の所に美羽が嫁に行けばいいのさ。」

「な！？ななな何を！？」

「そうすれば、ほのかは美羽の義妹だろう？ほづら解決！やったね！」

俺はどうだとばかりに胸を張る。

「何を言っんですのー！」

「おお！？何か不満だったか？もしかして逆が良かったか？兼一が

婿に来るとか。いやいや、しかし兼一も長男だし婿だと問題か？まあ、その辺りは両家で話し合って相互の理解を得るしかあるめえ。」
「そ、そういう問題じゃありませんわー！」

真つ赤になって否定する美羽。面白いなあ。弄り甲斐があるね。

「兼一君、優君。そろそろ修行の時間だよ。」

岬越寺師匠が迎えに来た。

「おっと、もうそんな時間か。」

俺と兼一は足早に道場へ向かった。

修行が始まると、居間に居たほのかも道場の片隅で兼一を見守っている。

「ぐあ！・・・まだまだあ！」

自由組み手で岬越寺を相手に投げ飛ばされる兼一。もう何度目だろうか？回数はずっと二桁を超えている筈だ。

「うっ・・・お兄ちゃんをイジメるなー！」

堪りかねて乱入しようとするほのか。俺はその襟首を掴んで引き止

める。

「こらこら。修行中なんだから邪魔するなよ。」

「離せ女顔ー！」

ジタバタと暴れるほか。

「良く見るほか。兼一はまだ頑張るつもりだぞ。」

「え？」

俺が指差した先には懸命に立ち上がろうとしている兼一の姿。

「お兄ちゃん・・・」

「助けようとするのは良いが、頑張っている姿を見守るのも家族の役目だぞ？」

「・・・うん。分かった。」

その後のほかは声を出して応援はするものの、乱入する事は無かった。

夕方になり修行が終わると、門の前でほかを見送る。

「あんまり兄に会いにくるなよ。」

「どうして？」

「白状すると、兄のボロボロな姿をできれば妹には見せたくないんだ。」

自分の心情を吐露する兼一。

「分かったよ。お兄ちゃんの様子を見に来るのはもう辞めるよ。」

そう約束するほのか。兼一の努力する姿を見て、イジメられている訳ではないと理解したのだろう。

しかし翌日、縁側でアパチャイさんとしぐれさんを相手にオセロをするほのかが居た。

「おい。お前、人の話聞いてないだろ？」

呆れ顔の兼一。

「お兄ちゃんの様子は見に来ないけど、アパチャイとしぐれには会いにくるよ？」

当然の様にいうほのか。

「はっはっは。そう来たか。これじゃ追い返す訳にも行かないなあ兼一？」

「あ、兄の威厳が・・・」

顔を引きつらせる兼一と、勝ち誇るほのかだった。

第十四話 妹来たりて（後書き）

何度君と出会い、何度君を売り飛ばしただろう。君は我俣で直ぐに熱暴走を繰り返したね。使い物にならなくなった君を中古でも引き取ってくれたシヨップ・・・。

動作未確認の君を500円で買い、起動した事に狂喜したあの夏。嗚呼・・・愛しのPS2。

バイオ3をやりたくてしかたない爆裂です。

第十五話 蟹はボイル派（前書き）

力二頭参戦！&ご退場〜！

第十五話 蟹はボイル派

実家へ足りなくなつた画材を取りに行った帰り道、公園で鳩と戯れるアパチャイさんと遭遇した。

「アパチャイさーん。何してるんですか？」

「あ、優！アパチャイ鳩と遊んでたよー。」

振り返つたアパチャイさんの身体には真つ白になる程、隙間なく鳩が留まっていた。

「懷かれてますねえ。」

「アパチャイ、鳩と遊んでほのかを待ってるよー。」

「ほのかですか？」

ピーーーーー！

話していると指笛が聞こえて来た。

「アパー！ほのかが呼んでるよー！」

指笛はほのかのアパチャイさんを呼んでいる合図という事か。完全に飼い慣らしてるなあほのか。

「俺も行つていいですか？」

「うん。それじゃ、アパチャイに？まるよー。」

「こうですか？」

アパチャイさんの肩を掴む。

「そう！シツカリね！あっぱーーーーー！！」
「うおおおおー！？」

アパチャイさんは俺を担いだまま、近隣の屋根を跳躍していく。

「スゲーーーーー！こりゃジェットコースターも目じゃねーぜー！！」
ドウウウーーーーン！！

直ぐに兼一の家に着き、着地する。

「あばー！」
「よう、ほのか。」

ほのかが俺とアパチャイさんの挨拶に答える。

「やつほー！女顔も一緒だったんだ。」
「偶々通りが掛かってね。あと優って呼べ。」

しかし、ほのかの後ろで啞然とする人が二人。そりゃ驚くよな。空から人が降って来たら。

「おのれ化け物！ほのかから離れろ！」

男性の方が威嚇しながらコートから取り出したのはライフル。流石に住宅街で発砲は不味くないか？

「スイマセン！お騒がせしまして。自分は天道 優と言います。あつちの大きい人はアパチャイさんで、彼は兼一と自分が習っている

道場の師匠の一人です。害はありませんから心配しないで下さい。」
頭を下げながら事情を説明すると、男性はライフルを下ろしてくれ
た。

「成る程そうでしたか。私は兼一とそここのほのかの父です。いや、
突然の事で動転して申し訳ない。」

ダンディーに笑う兼一父。

「いえいえ。こちらこそスイマセンでした。」

互いの誤解が解けた所で奥に居た女性が話しに加わる。

「まあ、それじゃ貴女が兼一の彼女の優ちゃんね？」

「「何い!？」」

俺と兼一父は同時に声を上げた。

「おい!ほのか!何伝えたんだお前!？」

「あ!誤解解くの忘れてた。テへ。」

「『テへ』じゃねえよ!あースイマセン。自分、こう見えても男な
んで兼一の彼女では無いです。」

このまま誤解に乗っかるのも面白そうだったけど、兼一が可哀想な
のでやめて置く。自分としても同性愛疑惑は勘弁だ。

「そうだったのご免なさいね。」

「いえ、それにしても兼一にお姉さんが居たとは知りませんでした。」

「

「まあまあ、お上手ね。私こう見えても兼一の母ですよ?」

「ホホホ」と笑う兼一母。かなり若いんだなあ。兼一の童顔などこは母親似なのかも知れない。

「そろそろ行こうよ優。」

ほのかが、アパチャイさんに肩車されながら急かす。

「では、夕飯までには返しますんで失礼します。」

俺とほのかはアパチャイさんに?まり飛び去った。

兼一・ほのか両親サイド

「うふふ。良い人たちみたいですね。」

「あ、ああ。しかしやけに機嫌が良いじゃないか母さん。」

「あら、そうかしら?」

微笑みながら家へ戻る兼一母。

「流石に姉は無いな、姉は。」

ゴーーーーーン!

兼一父の頭に金属盆が落ちたのは言うまでも無い。

優サイド

アパチャイさんが着地したのは、梁山泊近くの空き地だった。そこにはしぐれさんの姿があった。彼女もほのかを待っていたらしい。

「優も・・・居たの？」

「ええ。丁度、公園で会いました。」

「・・・そう。」

「俺はそろそろ修行の時間なので行きますね。」

「えー！優行っちゃうのー？」

不満そうなほのかの頭を撫でる。

「おう。代わりにしぐれお姉さんが遊んでくれるさ。」

「ボク・・・お姉・・・さん？」

「はい。しぐれお姉さん、ほのかを宜しく願いしますね。」

サッ！

俺は敬礼のポーズでしぐれさんに頼む。

「ん・・・了解・・・。」

しぐれさんも敬礼。

「行こう・・・ほのか・・・しぐれお姉さん・・・と遊ぼう。」

お姉さんのフレーズが気に入ったようで、嬉しそうにほのか達の所へ向かうしぐれさん。俺も大分しぐれさんの表情が分かる様になったもんだ。

梁山泊に入ると、庭先で兼一がうずくまってブツブツ呟いている。

「どうしたんだ兼一！？腹でも下したか！？だからあれほど言ったじゃないか！美羽の下着は見るだけにして置け！食べる物じゃないって！」

「どこまで僕を変態にしたいんだよ！？馬師父じゃあるまいし！」

イヤ、馬師父でも食べはしないぞ、食べは。

「冗談はさて置き、悩みがあるなら聞くぞ？」

「本当に？」

「おうよ！疑問にもバツチリ答えてやるぞ？金と口座番号と残高以外なら。」

「全部金銭関係！？」

「因みに実家の天道流道場は近く上場します。」

「嘘！？」

「流石に嘘だ。」

「……………」

無言で去ろうとする兼一に縋り付く俺。

「ゴメン！ちゃんと聞くから見放さないでー！！」

兼一から聞いた悩みとは、美羽との組み手で隙を見つけても反撃を恐れて手が出せなかったというものだった。これまた気弱で優しい兼一らしい悩みだ。

「ふむう……師匠達は何て？」

「今は、逆鬼師匠しか居なかったんだけど、『ここぞという時に突きが出せるかどうかで男の価値は決まるんだぜ！！』って。」

逆鬼師匠らしい。どストレートな意見だ。真理だけど身も蓋無いとも言える。

「兼一、反撃を恐れて手が出せないのは、自分を信じきれていないからだろう？」

「うん……………」

「なら、まずは他の人を信じる事から始めてみたらどうだ？」

「他の人？」

「そう。例えば師匠達だ。自分を信じきれていないというのなら、師匠達はその技を叩き込んでくれて今の自分がある。師匠を信じる事が、結果として自分を信じる事に繋がる……と、俺は思っぜ。」

「師匠をか・・・ありがとう優君！何だかやれる気がして来た！」

意気込む兼一。俺の言葉でも何か掴める物があつたようだ。

「頼もうー！！」

門のほうから声が聞こえる。

「あ、お客さんかな？ちょっと行って来るよ。」
「おう！」

兼一が門へと向かったので、俺は道着に着替えに行く事にした。

着替え終わり、道場へ入ると見た事の無い連中が兼一と対峙している。そこには美羽の姿も。

「美羽。こいつらはもしかして道場破りかい？」

「あ！優さん。そうなんです。今皆出払ってまして。私がお相手しようと思つてたんですけど、兼一さんが戦うと言われまして・・・。」

そつか。戦いを美羽に任せる訳には行かなかつたのか。男だぜ兼一！

「ぬう？これまた貧弱そうなのが出てきたものよ。梁山泊には碌な弟子が居ないと見える。」

ムカツ！

「うるせえよ。カ二頭！茹でるぞこの野郎。」

「ぬが！！ば、馬鹿にしよって！お主も一緒に叩きのめしてくれる！」

「いいのかい？後で二人掛かりだから負けたなんて言い訳は聞かんぜ？」

「むははは！我輩これでも死拳己流師範！弟子二人など物の数では無い！寧ろ弟子一人相手にする方が恥というもの！」

「その心意気や良し！それじゃやろうか！」

俺は兼一の隣に立ち、構えた。

「優君。」

「兼一、集中しろよ。師匠達程じゃ無いが、そこそこやるだろうか。」

「わ、分かった。」

「むははは！我輩は死拳己流師範、熊鳥 権瑞！掛かって来るでござる！」

「梁山泊一番弟子、白浜 兼一！」

「同じく二番弟子、天道 優！参る！」

「でえええいいい！！！」

掛かって来いと言いながらも先に仕掛けて来たのはカ二頭の方だった。俺は飛んできた垂直蹴りを踏み込みながら半身でかわし、そのまま反転して裏拳を横っ腹に打ち込む。

「チツ硬いな！」

俺の拳は効かず、弾かれてしまう。

「は！我ら死拳己流は全身を鋼の様に鍛え上げるのだ！」

観戦しているカニ頭の弟子が自慢げに解説する。

「ご丁寧にどうも！」

「むおりゃー！ー！！！」

追撃に更なる蹴りを放つかニ頭。俺はその蹴りを敢えて受け止る。

ゴッ！！

「ぐうつ！！！」

「優君！」

「へ！だが、これならどうか！」

腹部にダメージを受けるも止めた足を離さず、足の親指を・・・捻る！

「ぐあああつ！」

カニ頭の顔が苦痛に歪む。予想通り。間接までは鍛えられまい。

「今だ！兼一い！！！」

「でりゃああああー！！！」

ドスッ！！

兼一の正拳突きが力二頭の腹部にめり込む！

「ぐううう・・・！！おのれ！痛みで腹筋の力が抜けた瞬間を・・・死ね小僧！！」

不味い。決定打には成らなかったか！？兼一に力二頭の手刀が襲う！

パシ！

間一髪、その攻撃を止めたのは逆鬼師匠だった。

「おいおい。ウチの可愛い弟子達に何してくれてんだテメエ。」

「ぐう・・・離せ・・・」

逆鬼師匠の強力な力で腕を？まれ、力二頭が悶える。

「兼一、優。留守番ご苦労さん。二人とも良い戦いだっただぜ。兼一はちゃんと突きが出せたじゃねえか。」

「み、見てたんですか・・・」

緊張感の解けた兼一はへろへろとへたり込んでしまう。俺も腹のダメージで膝を付いたままだ。

「さて、弟子を可愛がってくれた礼だ！全員寝ちまいな！！」

ドゴドゴドゴ！！ドガアアア！！！！

「ぐああああああー！！！！」

一瞬で全員を伸してしまう逆鬼師匠。瞬殺ですな。死んでないけど。美羽は兼一を介抱しつつも上機嫌だ。

「うふふ・・・今回は挑戦料も入った事ですし、お二人のおかずも一品増やしますわね！」

「お！そりゃラッキー。所でこいつらはどうするんだ？」

気絶している道場破り達を指差す。

「秋雨さんの診療所へ運びましょう。挑戦料だけじゃなく治療費も頂けますわ。」

ホクホク顔の美羽。怪我させて徴収。治しても徴収か。ワーオ合理的い！

「裏に荷車がありますんで、それを使ってくださいまし。」

「りょーかい。」

荷車に怪我人に乗せる最中、遊び終えたアパチャイさん達三人が帰って来た。一台目の荷車をアパチャイさんが引いて行き、二台目を俺が引く。

「痛てて。やっぱり効いたなー。」

ダメージの残る腹を押さえる。

「怪我・・・した？」

しぐれさんが聞いて来た。

「やっぱり分かります？一発蹴りを喰らっちゃって。」

「・・・うん・・・。秋雨に診て貰えば・・・良い・・・。」

「そうですね。ついでに診て貰う事にしますよ。」

「それが・・・いい。」

頷きながら荷車を一緒に引いてくれるしぐれさん。良い人だ。

第十五話 蟹はボイル派（後書き）

最近、ワンピースしかアニメを見てない。何かオススメとかあります？

第十六話 うーみ！うーみ！水着！水着！（前書き）

海の無い街に住む作者は、海を見るとテンションが上がります。

第十六話 うーみ！うーみ！水着！水着！

「うーみ！うーみ！うーみ！」

「水着！！水着！！」

現在、梁山泊の自家製船『赤兎馬二号』で、俺と兼一は船の動力として船内のペダルを漕いでいる。修行の休暇として海水浴へ行くためだ。二人とも女性陣の水着見たさにかなり気張って漕いでいたのだが、既に限界に近い。

「うーみ！！水着！！ハア…ハア…」

「うーみ！！水着！！ゼエ…ゼエ…」

「そろそろ限界かあ？」

「うむ。このままでは日が暮れてしまう。そろそろ我らが漕ぐとしよう。二人とも代わってくれたまえ。」

俺と兼一に代わってサドルへ座る逆鬼師匠と岬越寺師匠。

「行くぞおおおお！！！」

「おおおおおー！！！」

ギューーーーーー！！

途端に横殴りのGが掛かり、船は凄まじい速度で走り出す。

「はえーーーー！」

俺は感心しつつ、汗だくの身体を冷ますために船外へ出た。

「はい、優さんタオルですわ。」

「おう、サンキュー美羽。」

受け取ったタオルで汗を拭く。火照った身体に潮風が気持ち良い。

「兼一は中でへばってるから持って行ってやってくれ。」

「分かりました。あ、代わりにお爺様の方角のナビをお願いしますわ。」

「ん、りょーかい。」

俺は舵を取る長老の隣へ上がる。

「わはははー！！世界の海はわしのものじゃー！！」

テンションアゲアゲな長老の隣で美羽から受け取った地図を眺める。

「この調子なら予定より早く着きそうですね長老。」

「船長と呼ぶようにのぉ！」

おおっ！成りきってらっしゃる。

「気分出てますね船長！」

「うはははははー！」

俺の声に気を良くした長ろ…もとい船長の高笑いはいっそう弾む。
ここは俺も乗っかるべきだろ。

「うーみよーー 俺の海よーー」

「お？渋い選曲じゃのう優ちゃん。」

歌う俺にいつしか船長もハモリ始める。

「うーみよーー 俺の海よー」

「潮風が気持ちいですね若大将！」

「そうじゃのお青大将！」

「ほ、ほたる（やや巻き舌の田中さん風に）！」

ひとしきり歌い終えたところで、海平線の向こうから島が見えて来た。

「あれが地図にも載っていない島！風林寺島じゃ！」

「まさに無人島ですね。」

ナビもお役御免となった俺は船首へ立つと風景を眺めた。

「絶景絶景！」

絵の対象には絶好だなあ。

そんな事を考えていると、後ろから俺の腰をがっしり掴む手。

「…？どうかしましたかしぐれさん？」

「…タイタニック…ク…。」

「…タイタニック…こっこ？男女逆じゃね？…まあ、いいか。」

「飛んでる！私、空を飛んでるわー！」

腕を広げ、暫しローズ気分を味わった。

船が島に着くと皆で荷物を降ろし、風林寺家別荘（船同様自作）で着替え始める。

「兼一、お前はどんな水着にしたんだ？」

「僕は普通のトランクスタイルだけど？」

「チッ！冒険心の無い奴め！」

「ム！優君はどうなんだよ？」

「俺は…コレだー!!」

ジャーーン

取り出したのは水着はビキニタイプ。しかも花柄。だが、

「……………」

「…止めよう野郎同士で水着談義は空し過ぎる。」

「途中で気付くよ普通……………」

不毛な会話を断ち切り、水着に着替えようとした瞬間…………

ガチャ・・・

「優、兼一…。」

「「うわあ!!」」

突如姿を現すしぐれさん。俺は下げたズボンを慌てて引き上げる！

ドシャ…

隣でズボン引き上げにミスった兼一が半ケツ状態で床に突っ伏している。何とか前だけは死守したのね兼一。

「どうしましたしぐれさん？」

敢えて兼一には触れず聞き返す。

「コレ…を着ろ…。」

渡されたのは白く、長ひよろい布。コレは…まさか…。

「…褌ですか？」

「コク…。」

「コレを着ると？」

「コク…。」

当然の如く頷くしぐれさん。

「兼一に…も…。」

「ぼ、僕は遠慮します。」

兼一は受け取りを拒否する。チクショウ。俺は条件反射で受け取ってしまったぜ。

「どうするの優君？」

「流石にコレハ……」

「冒険心はどうした冒険心は？」

「……覚えてる兼一。」

復讐してやる。主に美羽関係で。

「どうですかしぐれさん!？」

水着（褌）へ着替えた俺は半ばヤケクソ気味にダブルバイセップスからサイドチェストへ流れるようなポーリングを決める！

「ん……なかなか……凛々しい……ぞ……。」

親指を立て、褒め称えるしぐれさん。

「ボクのサラシ……のお古……取って置いて……役に立った……。」

え？これしぐれさんのお下がり？

……。

しまったぁー！！！！

着る前に匂い嗅いどきや良かった！あわわわ、急いで真空パックで永久保存を！！って俺は何のフエチやねん！！

「あれ？そついや兼一は何処に？」

俺が青少年特有の葛藤に駆られている間に、兼一は何処か連れ去られていた。

「…あそこ…。」

しぐれさんが指差す先は海へと続く断崖絶壁。その上で兼一は逆鬼師匠と岬越寺師匠に詰め寄られている。

「飛び込んで…度胸…を付ける…修行。」

「ああ、成る程。」

気弱な兼一に飛び込ませて度胸を付けさせようって魂胆か。しかし凄惨な場所だ。サスペンスドラマのラストみたいだ。まあ、今はどちらかと言うと自殺を強要しているヤ○ザとその被害者に見えるがね。ぶっつ特に逆鬼師匠ハマリ過ぎ。

「あー！」

駆け上がった来た長老が兼一を羽交い絞めにして飛び込んだ。

「わははははははー！！」

「ぎゃーーーーーー！！！！」

遠巻きに見ていた俺達にも聞こえる長老の雄叫びと、兼一の断末魔。

「どうしたの優？遊ぼうよ！」

ビーチボールを持ったほのかと美羽が駆け寄る。

「ほのか兼一は良いのか？」

「お兄ちゃん？そういえば何処行っただろう？」

見てなかったのか。憐れ兼一。

「優…魚獲ろ…う。」

「はい！おお！！魚結構いますねー！」

一足早く海へ潜るしぐれさんの誘いには逆らえない。すまぬ兼一！
お前の分も女性陣の水着は堪能するからな！それと馬師父、その手に持つカメラは？防水型ですか。後日焼き増しを宜しくお願いしますね。

第十六話 うーみ！うーみ！水着！水着！（後書き）

投稿に間が空きましたがご容赦を！

第十七話 フカヒレってどんな味？（前書き）

久しぶりの投稿。

活動報告で続きは無いんですか？って聞かれ、本家より好きとまで言われちゃ書かない訳にいかんでしょ！

作者のモチベーションは感想と皆様の愛で支えられております。

第十七話 フカヒレってどんな味？

「面目ない。」

「逃げられました。」

梁山泊の皆に頭を下げる馬師父と俺。発端は命の危険を察知した兼一が逃走を図った事が原因だ。いち早くそれに感付いた俺と馬師父だったのだが、兼一の巧妙な陽動にまんまと逃げられてしまった。

当時を状況を再現すると…

「兼ちゃん、どこへ行くね？」

「逃げるにしても周りは海だぞ？」

「……あああああつ！！美羽さんのブラと時雨さんのサラシが！！」

「なにiiiiiiiiiiii！！」

「今だ！！」

タタタッ！！

「という訳なんだ。」

「オイオイ…ですわ。」

美羽が呆れ顔で俺と馬師父を見る。

「いや、本当に巧みな策でしたね師父。」

「まったくね！男のナイーブな箇所を突いた巧みな策だったね。」

「引っ掛かるのはお二人だけですわ！」

非難する美羽に頭を下げる。

「本当に悪かった美羽。」

「わ、分かれば宜しいんですの。」

「次からは引つ掛からないように美羽のブラの中身はしっかりと妄想…いや、シミュレーションしとくぜ!」

いつになくイイ笑顔な俺。

「全然反省になっていませんわー!」

「アイタタタ!」

ポカポカと叩かれてしまう。

「他に対策のしようが無いだろ? いや、実際に実物を見せて貰えば次から動揺は無いかも…ぐはっ!」

「み、見せる訳が無いでしょうですわ!」

「ご、ごもつとも…ゲホツ…」

鳩尾に良いのを貰ってしまい咳き込む。

「でも、この島には崖も多いし、危険ですわ。」

心配そうに考え込む美羽。隣では岬越寺師匠が溜息を付く。

「やれやれ…困った弟子だ。こうなったら…」

「こうなったら?」

「山狩りだあああー!」

「お？なんだ、結構近くに居たじゃないか。」

岬越寺師匠の号令で始まった山狩り（兼一狩りともいう）だったが、案外簡単に見つかった。

山深くは危険という事で、俺は近場を探すように言われていたのだが、お陰で直ぐに兼一を発見した。

兼一は川で泳いでいて、近くには時雨さんも居る。どうやら泳ぎを教わっていたらしい。

「あ…優。」

こちらに気付いた時雨さんが顔を向ける。俺は必死に水をかく兼一を見ながら時雨さんに近付く。

「兼一は泳げるようになってきてますね。時雨さんが教えたんですか？」

「うん…そう。優も…やる？」

「いや、俺は泳げますけど。」

「……そう。」

残念そうな時雨さん。

「あ、でもアレって古式泳法ですよ？覚えても損は無いかない。」

「うん…じゃ、水…入って。」

「はい！」

結局その日は兼一が泳ぎを、俺は伸しをマスターしたのだった。

兼一が完全に泳げるようになり、俺と時雨さんは飛び込みに使った崖に兼一を引っ張っていく。

「嫌だー！！は、早い！まだ早いつて！！」

「泳げれば飛べるんで…しょ？」

「そうだぜー兼一。ククツ。嫌な事はさっさと終えて島をエンジョイしようぜ。」

「楽しんでるな！？他人事だと思つてー！」

三人で押し問答していると、崖下から声がする。覗き込むとビニールボートに乗ったほのかがこちらに手を振っている。

「お兄ちゃんーん！」

「ほのかだ。」

「まったく…一人であんな所に居て大丈夫か？……ん？」

ほのかのボートの周りをヒレらしきものが泳ぎ回っている。

「あ！イルカだ。あんなに沢山！」

イルカか。珍しいな。…つて！

「違う！アレはサメだ！！」

俺の言葉とほぼ同時にサメがボートの傍で飛び上がる！

「キヤアアアア！！」

「「ほのか！！！」」

俺と兼一が海に飛び込み、ボートへと泳ぐ。

ビュー！ズサツ！ズサツ！！

弓矢で時雨さんが援護するが間に合わない！

「クッソ！硬いなサメ肌！！！」

一匹のサメを殴りつけるが、大したダメージは無いようだ。援護していた時雨さんも矢が尽きてしまう。

しかし…

「ふぬううううううあああー！！！！！！！」

怒号を発して凄まじい速度で海を走る長老！そのまま無数のパンチをサメに撃つ！

「ダララララララララララア！！！」

サメと共に海へ潜る長老。

程なくしてほのかを襲ったサメの群れがプカプカと浮いてきた。

「フオ！フオ！今夜はフカヒレかのう？」

長老がボートと大物のサメを引きずり陸へと戻る。ホントに食うのか。誰が捌くんだろ？

「二人とも良くやったのう。ないすがつつじゃ！フハハハハハ！」

「そっういや兼一、崖飛べたじゃないか。」

「本当だ！やった！」

ほのかを守ろうとする気持ち恐怖を上回った兼一は、躊躇い無く飛び込む事が出来ていた。

「兼一、これで心置きなく……」

「うん！優君……」

「「水着が堪能出来る……！」」

第十七話 フカヒレってどんな味？（後書き）

水着表現が足りなかったと反省。なので、以下で補完を…

時雨

「優…ボクのサラシの下も想像…する…の？」

優

「え！？あの…ですね…」

時雨

「ほら見…て？」

シュルリ…

優

「うおおおー！バインバインがああー！！」

時雨

「優…触る…の？」

ムニユン

優

「ト、トレビアーン…！」

時雨

「…ん…こっちも…ね？」

優

「ワワワワンダフォー…！！！」

時雨

「可愛い…奴……だ。」

プルン…

優

「ジェロニモ……!!」

第十八話 南條キサラ（前書き）

今回テンプレ的かも？でも絡めないと進まないし…：良いか。

第十八話 南條キサラ

「ハアアアアッ!!」

ドシュ!

「グアッ!」

夜の公園に響く喧騒、怒号…

「ヤアアアッ!」

ドゴッ!!

「ゲフッ!」

「どうしたー! やっちまえ!!」

「クソがぁー!」

数十人の不良たちが二組に別れて喧嘩をしている。

「いやぁ、元気なこと。」

「やってるやってる。ウヒヒヒヒ。」

俺と新島は夜、近所の公園にて喧嘩を観戦中だ。断っておくが決して逢い引きでは無い。幾ら俺が女顔で、すれ違う男どもが新島に嫉妬の目を向けていたとしても断じて違う。

「ほれ、あの戦っている女が南條キサラだ。」

「へえ…。」

新島の言う通り、中心で不良と戦う女が居た。何度か名前は聞いていたが彼女がそうなのか。

キャップを被り、Ｔシャツにダメージジーンズ。ラフな格好だ。しかもジーンズは片足が切り取られたデザインで、太股までを惜し気もなく晒していた。馬師父なら迷わずカメラを向けるだろうな。

キサラは足技を巧みに使い、敵を圧倒していた。

「…テコンドーか？」

「ヒヤッヒヤッヒヤッ！流石だな。その通りだ。奴はテコンドーの使い手だな。倒した敵を自分の傘下に入れる事からバルキリーと呼ばれているそうだ。」

「大袈裟な名前だな。」

誇張したネーミングセンスに溜息を漏らしつつ戦いを観戦する。

「はあああっ！」

バキッ！

「ぐあああああっ！」

キサラの蹴りがヒットし、敵の顔面にブーツがめり込む。

「うへえ…痛ぞ。」

「やるな。コイツは伸びると思ってはいたが、予想以上だ。」

新島は電子手帳を操作しデータを追加している。

「優、お前から見て奴はどうだ？」

「そうだな…胸は美羽が圧勝だが、あの健康的な太股は加点に値するな。勝ち気な眼と態度が人によつてはツボかもしれん。需要は有ると思うぞ。」

「ほうほう…成る程ね…つて違つだろ！俺様が聞きたいのは兼一が奴に敵いそうかどうかだ！」

「うん。…ぶっちゃけ難しいかもな。」

「やはりそうか。」

「兼一は美羽にゾッコンだからな。兼一があの子になびく可能性は無いと思うな。」

「だーから！誰が恋愛談義を持ち掛けた！？俺様は兼一がキサラに勝てるのかつて聞いてるんだ！」

俺のボケ倒しに律儀にツツコミを入れる新島。

「…まあ、今の兼一じゃ勝てないだろうな。」

「やはりそうか。チツ、兼一がさつさと奴を叩いていれば…」

新島は知らないだろうが、実力以前に兼一は女性に手を上げる事が出来ない。組み手で美羽に攻撃する事さえ躊躇するぐらいだ。実力でも負けている上に躊躇いが有つては勝てはしないだろう。

「噂では、奴はもうすぐ七拳豪入りするらしい。」

「七拳豪？」

「不良グループ・ラグナレクを纏める幹部どもさ。おっと、キサラが加われば八拳豪か。そいつらは全員が恐ろしく喧嘩が強いらしい。」

「ふうん…。」

技の三人集の更には上がいる訳か。キサラが兼一に目を付けている以上、そいつらとの衝突も有り得るな。こりゃ逆鬼師匠じゃないが、マジで校内最強にでも成らないと兼一に平穩は無いかもしれん。

「お？どうやら決着が着いたようだぜ。」

新島が言う通り敵のリーダーはキサラに倒されていた。

「残敵を掃討しな！」

キサラの命令で部下達が残りの敵を殲滅に掛かる。

「オラアアアア！！」

ドスッ！バキ！ドガッ！！

「ぐえ…」

「ひっ、ひいひい！！」

不良を袋叩きにする部下達。その一人が倒れて気を失っている相手に鉄パイプを振り上げる！

「チッ!!」

「オ、オイ!!」

新島の制止を振り切り、鉄パイプを持つ男の手を掴む。

「やり過ぎだ。これ以上は死んでしまっぞ。人殺しに成りたいのか？」

「なんだデメエ!!」

「何所から現れやがった!？」

突然の乱入に驚く不良達。

「デメエも仲間か!？」

鉄パイプを持った男が俺へと標的を変えた。

「ハア…喧嘩をするにしてももう少し程度を考えてやれよ。殺し合
いじゃあるまいし。」

「うっせえええ!!」

「よっ!!」

トス…

オーバーアクション気味に振りかぶる鉄パイプ男の攻撃をかわし、
首筋に手刀を入れ意識を刈り取る。

「へえ…やるじゃないかお嬢ちゃん。中々生きの良い動きをするね。」

キサラが俺を見て挑発的な笑みを浮かべる。

「お、お嬢ちゃん…。」

「ケケケケ…」

何処かに隠れている悪魔もどきが笑った気がする。

「お嬢ちゃん、私の部下に成らないかい？動きからして結構やるよ
うじゃないか。」

「いやいや、それ何でも…それと、俺は男だからね？」

「なっ！？」

「あ、あんなに可愛いのに！？」

驚くキサラ。周りの不良達もざわつく。誰だ可愛いって言ったの。
はあ・・・髪切ろうかな。

「ま、まあ、強けりやどっちでもいいさ。部下になる気は？」

「無いな。」

「フッ！！」

断ると同時にキサラのハイキックが俺の前髪を掠める。

「へえ…あたしの蹴りをかわすのかい。ますます興味が湧いたよ。」
「そりやどうも。美人に興味を持たれるのは悪い気はしないね。」
「フン、言うね。まあ良い…今夜は見逃してあげるよ。名前は？」
「天道優。優しいの優だ。気軽に優ちゃん、若しくはダーリンと呼
んでくれてもいいぞ？」

「フッフ…面白い奴だ。天道…そうか白浜の相棒がそんな名前だったね。」

「ご名答。」

ダーリンはスルーですか。

「フッフ…白浜に天道…。いずれ私が潰してやるよ。首を洗って待ってるんだね。」

「生憎待つより追いかける方が好きなんだ。」

「そのおちゃらけた態度がいつまで続くか楽しみにしてるよ。」

キサラはそう言い残すと、部下を連れ公園を後にした。周りには気絶した不良と俺だけ。いや、あと一人。

「……。終わったぞ新島ー。」

ガサガサッ…

「ふいー。いきなり出て行きやがって。焦ったぜ。」

垣根から姿を現した新島が、大きく息を吐いた。

「悪い悪い。あのままだと死人が出たかもしれないからな。」

「ま、そのお陰で良いデータが手に入った。お前を誘った甲斐があったな。」

「俺は試験紙かよ。」

「兼、俺様のボディ・ガード。」

「全力で辞退する。」

新島が警護対象者じゃやる気出ねーよ。

「二人とも、そろそろ本格的な技の修行に入っても良いと思うんだが…どうかな？」

縁側で本を読んでいる岬越寺師匠が提案する。俺と兼一は筋力トレーニングの腕立て伏せをしながらそれを聞いていた。

「そうね。かなりキツイ修行だけど、そろそろかね。」

頷くのは負荷の代わりに兼一の上に座りエロ本を読む馬師。

「本当…ですか…？それは…楽しみ……です！」

俺も時雨さんを背負いながら腕立て伏せで賛同する。

「フッフ、優くんは嬉しそうだね。」

「そりゃ…実家、では…基礎…ばかり…でしたから…ね！」

やっと体力にモノを言わせたスタイルから脱却出来るってもんだ。

「兼一君はどうだい？」

「キツイですか？」

「はい、キツイです。」

きつぱりと断言する岬越寺師匠。

「も、もう少し待って貰えます?」

「どの位? 明日?」

子供か。

岬越寺師匠は始めたくて仕方ないらしい。

「俺は今日からでも良いですよ。」

「ぐ…時々優君の思い切りの良さが無性に羨ましい…。」

放課後、いつもの如く三人で下校し梁山泊へと歩いていた。

「兼一さんも、最近遅しくなってきましたね。」

「いやあ、無人島では大変でしたからね。」

「まったくだ。まさかサメと戦うとは思わなかったからな。オマケに美羽からは殴られ…」

「へ? 殴られ?」

「な、何でもありませんわ!」

「も…も…」

美羽に口を塞がれる。どうしても良いが背中当たってるぞ。殴られた原因が…。

「でもお陰で度胸だけは付いた気がしますよ。もじやもじやでも何でも来い！って感じです！」

「お？なら丁度良いホレ。」

俺が指した先の空き地に、もじやもじや君改め辻 新之助が居た。

「あら？噂をすれば…ですわ。」

「ひえ！」

「って、隠れるんかい！」

慌てて壁に隠れる兼一。あれ？一緒に居るのはキサラじゃないか？辻と向かい合い、どうも剣呑とした雰囲気だ。二、三言葉を交わした直後、辻がキサラに仕掛けた！

「…ッ！もじやもじやー！！！」

「へ？」

ドガアアアアアア！！

「グヘッ！！！」

キサラと辻が相打つ瞬間、横槍を入れた兼一の飛び蹴りが辻の顔面を捕らえた。

「コラア！！！」

「テメエ！！！」

「ハッ！！！」

ドゴッ！バキ！

不意打ちを喰らった辻の部下も瞬殺する兼一。

「あの…大丈夫ですか？」

兼一はキサラを一般人と勘違いしたらしい。キサラが名前を告げると顎が外れる程驚いていた。助けようとして墓穴を掘っている。さすが兼一。

「おや？へえ…天道、アンタも居たのかい。」

俺に気付いたキサラがニヤリと笑う。

「や、昨夜ぶり。」

「ふふ…私のケリを初見でかわす天道に見事な不意打ちの白浜のぼうや…今年の一年は粒揃いだね。」

「へ？不意打ち？」

キサラの台詞にはたと気付いた兼一が、自身の行動を振り返る。

「ああああーっ！！」

漸く状況を理解した兼一が、倒れている辻を揺り動かす。

「ぐぐぐごメンなさい！だだ大丈夫ですかー！？」

「……。」

しかし殆ど反応を見せない辻。

「僕はなんて事をー！」

「お、女の子を助けるためですし。ね？」

「ひ、人として僕は…。」

美羽がフォローするが意味を成さない。

「チツ…天道といい変なぼうや達だね。今日はちよいと忙しいんでね。見逃してやるよ。それと天道、三度目は無いからね。」

「へいへい。」

「それとぼうや、今度武田共々シメてやるから覚悟するんだね。」

「武田さんはもう良いでしょう！？ほつといてあげて下さい！」

「フフ…私を倒したら考えてあげるよ。」

バッグを背負い、空き地から去るキサラ。緊張が抜けた兼一が大きく溜息を吐く。

「ハア…困ったなあ。女の人とは戦えないのに…。」

「飯に戦っていたら兼一さん負けてましたわ。」

「そうだな…。今の兼一よりもキサラの方が技術は数段上。特にケリの鋭さはかなりのもんだ。実力で言えば両腕が使える武田並みってどこか？」

「そんなに…って、優君はあの女性がキサラって知ってたの？」

「まあな。」

「何で教えてくれなかったんだよー！知っていればこんな事にはー
ー！」

「言う前に飛び込んで行っただろうが！」

「兼一い、お前まだ技の修行する決心着かなねえのかよ？」

朝食を囲む中、逆鬼師匠が切り出す。

「ごちそうさまー！さあ、学校に行かなくちゃー！」

敢えてスルーな兼一はそのまま部屋へと支度に行ってしまう。

「チツ…逃げやがった。やっぱり無理やり修行するか？」

「これこれ、嫌がる者に教えても身にはならぬよ。」

逸る逆鬼師匠を長老が窘める。

「大丈夫ですよ。兼一は必要になれば必ずやる奴ですから。」

「フオフオフオ、優ちゃんの言う通りじゃ。」

第十八話 南條キサラ（後書き）

勢いだけで書いてしまった。いつもだけど。

第十九話 始めから負ける気で戦うな（前書き）

一ヶ月ぶりの投稿。今回はシリアス？かも。

第十九話 始めから負ける気で戦うな

「優さん！聞いて下さいですわ。」

梁山泊に行くといの一番に美羽が俺へと駆け寄る。

「ん？どうしたんだ美羽。何時に無く上機嫌じゃないか。」

美羽から聞いたところ、兼一が辻新之助と再戦をしたそうだ。今回は前とは違い、不意打ちでは無い真つ当な決闘。結果は兼一の圧勝。美羽はそれを自分の事のように喜んでいた。

「自信も付いたみたいで、今日から本格的に技の修行に入るよう秋雨さんに頼んでらしたのですわ。」

「ほほう。やつと兼一も決心が着いたか。こりや楽しみだ。」

「ええ。それにもじやもじやさんの話では武田さんの脱会リンチについても、八拳豪がもう一人立会人として参加するそうですわ。その辺りも兼一さんを後押した理由らしくて。」

自分の修行の理由が武田を助ける為か。兼一らしい動機だ。やつぱりアイツは最後にはやる奴だな。兼一の成長を嬉しく思いながら、俺もようやく訪れた技の修行に期待を高めた。

八拳豪がもう一人参加するとなれば、俺自身もレベルを上げる必要があるだろう。ソイツと戦うにしろ戦わないにしろ今後俺も戦う機会が増える筈だからな。

「おや？優君も来たようだね。今日からは技の修行だよ。早く着替えたまえ。」

「おおつ。岬越寺師匠も何だか今日は気合が入ってますね！」

「フっ…そう見えるかね。」

だつて持つてる本のタイトルが、弟子育成マニュアル 技の章 っ
て書いてあるもん。

「近々、貴方に脱会リンチが行われるそうです。気を付けて下さいね。」

俺と兼一は忠告を促す為にボクシング部に入部した武田の元へと訪れていた。

「へえ、そうかい。」

必死に心配する兼一とは逆に他人事の様な態度の武田。

「武田さん！もっと真面目に考えて下さいよ！」

「…幾ら警戒しても避けられない事も有る…。」

サンドバックを前にそう呟く。

「兼一さん！こんな物がばら撒かれていましたわ！」

武田の言葉に考え込む俺達。そこへビラを持った新体操部のレオタ

ード姿の美羽が現れた。

「ヒュー！凄いな。」

「おおっ！やるじゃないか兼一！」

ピラは新島発行の号外。内容は兼一が辻を倒し、奴を足蹴にしている写真が掲載されていた。

「凄いな兼一！敵を足蹴にキメポーズとは。さすがの俺でもそこまではないぞ。」

「合成写真だよ！」

まあ、そうだな。性格上兼一が死者に鞭打つ真似はせんだろうし。

「号外！こゝがいだよ〜！」

「新島あー！！！」

「あひゃひゃひゃひゃー！！！」

ピラを撒く新島を追いかけてボクシング部を出て行く兼一。美羽も新体操部へと戻って行った。

「…君は帰らないのかい優君？」

サンドバックを見つめる武田が俺の方を向く。

「ああ、そうだな。」

すれ違い様に俺は武田の後頭部を小突く。

「ていつ!!」

ゴスッ!

「あいた! な、何をするんだ! ?」

「負け犬。」

「はあ! ?」

「負け犬の目に成ってるぜ武田一基。」

「……。」

俺の指摘に武田は表情を曇らせる。

「お前、最初から脱会リンチでやられるつもりでいるな?」

「…今まで無事にラグナレクから抜けられた奴は居ないんだ。」

「始めから負ける気で戦うな。」

「君らは知らないんだ! 脱会リンチがどういう物なのか!」

落ち着き払った武田が初めて声を荒げる。

「確かに知らないな。ところで武田、ボクシングは好きか?」

「あ、ああ。当たり前だろう。それが何だい?」

突然話題が変わった事に困惑しているが、俺は話題を変えたつもりは無い。

「お前程の選手ならいつかはチャンピオン。トップを目指そうと努力した筈だ。そうだろ？」

「……。」

俺の言葉の真意を探そうと聞き入る武田。

「ボクシングの世界で最強のチャンピオンを目指す事と脱会リンチで唯一無事に抜ける事。どちらが難しいだろうな？」

「…っ!!」

「どちらも難しいかもしれない。だが、お前は誰も出来なかった事だからといってボクシングでそれを諦めたか？誰も倒せないチャンピオンを倒して自分がトップに立つ。誰も無事に済まない脱会リンチから抜け出す。やろうとしている事の意味は同じだ。誰にも出来なかったから諦めるなんて可笑いだろ？」

ハッとした表情になる武田は俺の真意に気付いたらしい。

「それに…。」

俺はフツと表情を崩す。

「ボクシングは戦う時は一人だ。しかも相手は皆がトップを目指すとうと努力する奴ら。対してラグナレクの敵の殆どは唯の不良のガキどもだぜ？そして戦うのはお前一人じゃない俺達が居る。チャンピオンを目指すよりよっぽど難易度低くないか？」

そう言って片目を瞑る俺に武田はやや間を置いて吹き出した。

「くっ……くはははは！確かにその通りだよ！誰にも出来無いから諦めるなんて馬鹿げてる！」

身体をくの字に曲げて笑いこける武田は、ひとしきり笑った後俺の方へと向き直る。その目に諦めの色は無かった。

「どうやら僕は間違っていたようだね。君の言う通りだ。最初から負けるつもりで居たら可能性なんて無かった。感謝するよ優君。」

「感謝なら兼一にしろよ。アイツはお前の脱会リンチを聞いて、道場での技の修業を本格化させる覚悟を決めたんだ。」

「そうか…。」

「だから、お前が仲間を助けて怪我をした過去が有っても変な遠慮はするな。お前が襲われたら俺達は助ける。」

「でもそれは…」

「兼一の言葉を思い出せ。『友情は取引じゃない』」

「っ！…そうだったね。」

それでもコイツは自分の為に仲間に傷ついて欲しくないか思っているんだろうな。言葉に躊躇いが有った。しかし最初から諦めモードな開き直りよりは大分マシか。

「ありがとう。優君。」

「礼を言うなら兼一に…若しくは現物支給で頼む。購買のタコヤキパンとグレープジュースで。」

「オイオイ！『友情は取引じゃない』じゃ無かったのかーい？」

「それは兼一のセリフだろ？」

「君も言ったじゃないか！？」

まあ、冗談だ。あわよくばと思ってるけど。

「あわよくばと思ってるのか。」

「何！お前も心が読めるのか！？岬越寺師匠と同じか！？」

「口に出してたよー！」

第十九話 始めから負ける気で戦うな（後書き）

岬越寺師匠の出番を優が取っちゃったかも。いよいよ次回は戦闘シーンか？または次々回か？

行き当たりばったりなんで作者にも不明だ！

第二十話 乳房は二度弾む（前書き）

戦闘シーンの筈がやっぱりコメディに。

第二十話 乳房は二度弾む

「あつ！来た！良かった掛けてくれたんだ！」

修行後の休憩中に兼一の携帯電話が鳴る。相手は武田だ。

「もしかしてラグナレクに襲われたか？」

「そうだとしたら大変だ！」

慌てて携帯を手取る兼一。

「……あれ？出ない？」

「ちよつと貸すね。」

兼一から携帯を受け取った馬師父が調べる。何気に馬師父が梁山泊では一番電気機器に詳しい。これも日頃カメラでの盗撮の……いや、努力の賜物だ。

「これは何かの拍子に短縮ダイヤルが入ったね。……武田……ぶつ殺す……宇喜田……とか聞こえるね。」

「はっ！？やつぱり襲われてるんだ！？」

「だな。」

「ギャクタンは？ギャクタン出来無いの兼一！？」

「僕の携帯にそんな機能は有りません！」

きつとアパチャイさんは昼ドラとかで覚えた言葉なんだろうな。

「弱ったな。これじゃ場所が何所だか分からないぞ。」

困り果てる兼一に俺は不敵な笑みを浮かべる。

「フッフッフ！任せる兼一！こんな事もあるのかと、武田の携帯のGPSが俺の携帯に表示される様に設定しておいたのだ！」

「優君！いつのまに！？」

「武田の様子だと俺達に遠慮して助けを求めないと思ったからな。こつそりボクシング部の部屋に忍び込んで武田の携帯を弄っておい
た。」

「優さんそれって犯罪……」

馬鹿者め美羽！動機が善意で結果が良い方に転がれば後はどうにでもなるのさ。

「フツ……美羽これは必要悪というものさ。」

「それは良いから優君、早く武田さんの居場所を！」

「オーケー……。これは高架線沿いの武田の帰宅ルートだな。行くぞ兼一！」

「うん！」

「私も行きますわ！」

俺達三人は梁山泊を飛び出して行く。

「急がないと！」

「兼一、美羽、一刻を争う状況だ。俺はチト先に行くぜ！」

「え！？」

ダダダダダッ！！

「は、速い！」

基礎体力だけなら二人より俺のが上だからな。単純に走るだけなら美羽より速い。伊達に基礎トレーニングばかり積んでは居ないぜ！俺は二人から先行して武田の元へ急いだ。

「ついでにアイツにも連絡してみつか？」

武田サイド

クツ！やはり数が多いな。左腕が使える様になったとはいえ、これだけ多くちゃ分が悪い。

宇喜田がラグナレクを裏切ってこちらに味方してくれたが、二人ともそろそろ疲労が溜まって来ている。限界が近い。

「やるじゃないか突きの武田。潰すのは惜しい男だよ。」

「ハアハア…噂は聞いてるよ。何でも昇格したらしいじゃないキサちゃん？」

「フフ…。」

拳豪入りした南條キサラ…強敵だが、優君には諦めない事を教えられた。そして兼一君は僕の為に過酷な修行を決意してくれた。それに応える為にも潰される気は毛頭無い！

「はああああ！！」

「ふうっ！」

「何！？」

僕のストレートを足で受け止めるなんて！？

「足の力は腕の三倍…ふっ！」

クツ！僕の鼻先をキサラの蹴りが掠める。

「シッ！！」

ドゴツ！！

「ぐあっ！」

後頭部に激しい衝撃が走る。放った蹴りの軌道を変えたのか！？

「く…くそお…。」

「私のチツキを喰らって立てるのかい。さすがだね。」

朦朧とする意識を頭を振り覚醒させる。

「だけど、これでお仕舞いだよ！死にな！」

キサラの回し蹴りがこめかみを襲う！避けきれない！？

バシイイイイイイ！！

だが、突如現れた影が僕の前に現れ、キサラの蹴りを遮った！

「おおっ！さすが良い蹴りだ。」

現れた影は聞いたことの有る声で不敵に笑う。

「優君!？」

「よう武田。水臭いぞ。俺達を巻き込みたくないのも分かるが、仲間ならもつと頼れよ。」

そう言つてウィンクする優君。

「本当に良いタイミングだね。君が女だったら惚れてる所だよ。」

「はっはー！悪いな。俺は女の子が好きなんだ。更に美人だとなお良い。」

「ふふ、同感だね。」

こんな状況だというのに僕は自然と笑みが零れた。

「余裕じゃないか天道。確か次は無いつて言つたはずだよ?」

間合いを取つてキサラが優君を睨む。二人は顔見知りだったのか。

「そうだったな。けど友人が危機とあつちや、こっちも見過ごす訳には行かないんだよねえ。」

「まあ良いさ。お前も潰すつもりだったんだ。ここで武田と一緒にシメてやるよ!」

急激に間合いを詰めたキサラの回し蹴りが優君を襲う!

「危ない!」

「よっ!」

紙一重で蹴りから逃れる。しかしここからキサラの蹴りは変化する

んだ！

「貰った！」

勝ちを確信したキサラの声と共にかかと落としが優君の後頭部を狙う！

「おっと。」

しかし軽い口調でそれを避け、キサラのかかとが空を切る。凄い！
僕の突きを初見で見切っただけの事は有る。

「やるね…大抵の相手は今ので終わるんだけどね。」

「お褒め頂き恐悦至極。避けたら何か特典は付いてこないのかな？」

「そうだね。褒美に…」

「褒美？熱いキッスかな？」

それは無いと思うよ優君。

「あと百発くれてやるよ！」

「あ、やっぱり？」

キサラの鋭い蹴りの猛攻が始まる。そしてそれを全てかわす優君。

「くそっ！ちょこまかと逃げやがって！」

業を煮やしたキサラが悪態を付く。対する優君の方は何やら思案顔だ。何を考えているんだ？

優サイド

うーむ。どうしたもんかな。俺はキサラの攻撃をかわしながら考える。女性を殴るといいうのも何だか気が引ける。かといって無傷で捕まえるような捕縛術はまだ習って無いんだよなあ。このまま向こうの体力が尽きるまでかわし続けるってのも有りだが、それは疲れる。

「武田さん無事ですか!？」

ようやく追いついた兼一と美羽が戦いに参加する。

「ふふつ、良い事考えた!美羽!こっちに来てくれ!」

「ふえ?どうしました?」

敵の兵を蹴散らしこちらへとやってきた美羽。

「美羽!手を出せ!手!」

「こうですか?」

パシッ!

「はい、タッチ。交代。」

「ええっ!？」

「このお姉さんの相手を宜しく。」

名付けて、『面倒臭いので美羽に丸投げ大作戦』だ。

「コラ！天道逃げるな！」

「やだよーん！」

呼び止めるキサラを無視して俺は、武田側についたらしい宇喜田の加勢に回る。

「ふう…仕方がありません。私が相手になりますわキサラさん。」

たゆんたゆん……

「っ！？……二回も揺れた。」

「へ？」

弾む美羽の胸を見て明らかにキサラは悔しがっている。

「く…何か知らんけど、無性に頭にくる娘だね。デカけりや良いってもんじゃねえぞ！この牛乳娘！」

「う、牛……。」

キサラの言い様に絶句する美羽。面白いので俺は二人に茶々を入れる。

「わははは！良いぞ美羽！乳房だけで相手を挑発するとはさすがだ！敵は頭に血が上ってるぞ！倒すなら今だ！そしてキサラ！胸の魅力はボリユームだけじゃ無い。サイズで敵わないなら形や触り心地で勝負だ！」

「な、何を言ってるんですのー!？」

「大きなお世話だ!」

あれえ？激励のつもりが二人して俺に非難の声を浴びせ出した。

「というか、優さんはどっちの味方なんですかー!？」

「無論、美人の味方だ!」

美羽の問い掛けに即答する俺。うむ。当然だな。

「「び、美人って・・・／＼／＼」」

二人揃って顔を赤らめる。案外ウブだなキサラも。そりやそうか。不良グループの幹部に言い寄る男なんてそうは居ないよな。

「…ゴホン…。まあ、何だ。やるからには手加減はしないよ!」

「私は忘れてませんわ。牛乳って（怒）…」

「いい加減、そっから離れろよ（汗）。」

第二十話 乳房は二度弾む（後書き）

久々の連日投稿DEATH

第二十一話 新白連合参上（前書き）

前話と繋げても良かったんですが、一応区切りました。なのでチョイ短め。

第二十一話 新白連合参上

本格的に美羽とキサラの戦いが始まったので、それ以上は口出しせず、他に他雑兵を倒して行く。

「宇喜田！土壇場で武田につくとは中々憎い真似をするじゃないか！」

「ケツ！俺も戻ってみたいくなっただよ。不良じゃなく柔道家にな！」

俺と宇喜田が背中合わせで敵と対峙し、兼一と武田もまた共闘している。

「武田さん無事ですか！？」

「ああ。大丈夫だ。優君に危ない所を助けて貰ったからね。」

とにかく多少の怪我は有るものの全員が無事で何よりだ。敵の頭であるキサラは美羽が相手しているので俺達は残りの敵を撃破していく。

「てやああああー！！」

ガシャン！

「あ、馬鹿！」

気合の入りすぎた兼一は、繰り出した蹴りを空振りして足をフェン

スの金網に引つ掛けてしまった。

「死ねえ!!」

それを好機と見た敵が兼一に襲い掛かる。金網を外そうともがく兼一は右手が使えない!

「兼一!!」

「ふっ!」

シュバ!ゴスツ!

だが、そこで逆鬼師匠から学んだ技が活きた。攻撃を弾いた反動で鶴頭を敵の顔面に当てるカウンターで敵をあしらう。

「おおっ!早速修行の成果が現れたじゃないか兼一!」

「うん!やったよ優君!」

俺は兼一がフェンスから抜け出すまで敵を引き付ける。

「よし!俺も実践してみるか!」

鶴頭を敵に当て、怯んだ隙に小手返し!倒れた相手にトドメの当身だ!

「凄い!技を繋いだ!?」

「中々良いな。よし!これを天道スペシャルと名付けよう。」

「ダサイよ!」

うぐ…ダサいって言われた。

敵の過半数が倒れたところで美羽の方も決着が着いた。気を失ったキサラを部下が介抱しているのが見える。

「うひゃひゃひゃひゃひゃ！新白連合参上ー！！」

そろそろ事態に收拾を着けようと考えたとき、宇宙人…もとい、新島が十数人の仲間を従えて現れた。

「調子はどうだい兄弟！」

「新島！？どうしてここに？」

突然の参上に面食らう兼一。

「フハハハハ！優に連絡を貰ってな。こうして部下を従えて助けに来たって訳さ。感謝しろよ兼一！」

「優君？」

「いや、頭数は多い方が良くないかなと思ってな。」

「い、いつの間に…。」

勿論走ってくる間にだ。仲間を連れて来るとは予想外だったけどな。

「くそっ！新手か！？撤退だ！！」

唯でさえ押されている上にキサラまでもやられた敵は、新島達の増援を切っ掛けに散り散りになって逃げて行く。戦いに疲労した武田と宇喜田は、新島の指示で部下達が介抱している。

「兼一君、ありがとう。お陰で助かったよ。優君も。」

新島の部下に肩を借りた武田が礼を言う。

「いえ、無事で何よりです武田さん。」

「というか、武田。ちゃんと連絡しろって言ったたろうが。」

俺はまた武田の頭を小突く。

「いたた！悪かったよ優君。」

「ったく、幾ら過去の事が有ったからって変な遠慮は無しって言うただろが。」

「済まない。」

「けど、これで分かったたろう。友情が取引でない事は。」

「ああ。」

今回の経験で武田も過去を吹っ切れたたろう。それは武田の表情を見れば分かる。

「何はともあれ、皆！今回の喧嘩は俺達の完勝だ――！！！」

「「「おおおおおーっ！！」「」「」

俺の宣言で全員が勝ち鬨を上げる！

「ところで新島、新白連合って何だ？」

「そうだった！やい！新島！この人達は誰だ！？」

「何を言ってるんだ兄弟？俺達の兵に決まってるだろう？」

当然の様に胸を反らして誇る新島を兼一がジト目で睨む。

「貴様、また何か良からぬ事を…。」

しかし俺はまた別の疑問を兼一に問い掛ける。

「なあ、兼一。」

「ん？どうしたの優君？」

「俺達が兄弟なら長男は誰なんだろうな？」

「引っ掛かてるのそこ！？」

第二十一話 新白連合参上（後書き）

これで書き溜めた分は消化です。

これからが本格的にラグナレクVS新白連合の図式に成りますね。

第二十二話 愛と情報は金に成るんだぜ！（前書き）

シナリオは進みません。ネタ的なモノです。優の日常ですね。

第二十二話 愛と情報は金に成るんだぜ！

「あつ……優……そこはもっと……優しく……。」

「こつ……ですか？」

「ん……上手……。」

「ここはどうですか？」

「もっと……強く……うん……イイ……。段々……慣れてきたな。」

「時雨さんの教え方が上手なんですよ。」

「そう……か。」

バン！

「優さん、時雨さん！何をしているんですかあ……！」

「うん？」

貰った小太刀の手入れの仕方を教わっていたところに、美羽が戸を開けて乱入してきた。

「あ、あれ？」

俺が小太刀を片手に打ち粉を振るっているのを見て首を傾げる。

「ど、どうやら勘違いだったみたいですわ……。」

にやり……

「美羽は何を勘違いしてたのかな？」

「そ、それは…」

「ほら、おいちゃんに言ってみ？美羽はナニとナニを勘違いしたんだあ？」

「ううー。」

みるみる顔を真っ赤にさせる美羽。

「ほおら……美羽は俺達がナニをしてると思ったのかなあ？」

「も、もう優さんったら知りません！」

「ぐぼっ！」

退散する美羽だがキツチリ肘鉄は入れていくのだった。

「最近の優さんは馬さんに感化され過ぎですわ！」

「失敬な！俺は元からこうだ！」

「余計悪いですわ！」

「優君、少し良いかね？」

修行後に岬越寺師匠に声を掛けられた。

「どうしました？」

「接骨院で使う備品の買出しに行くのだが、付き合って貰えるかね？」

「ええ。構いませんよ。兼一も一緒ですか。」

「ああ、彼は…」

岬越寺師匠がついと指を指す場所を見る。

「ギョウ……」

気を失ってピクピクと痙攣気味の兼一が居た。

「アパチャイ君の修行で少々熱が入り過ぎたようだね。放って置けば復活するよ。」

「そうですか。」

俺は準備を終え岬越寺師匠と街へと向かった。

「うん？あれは…」

「どうしました？あ…。」

街中で不良に絡まれている女性を発見。しかもアレは…

「凜ちゃん？」

「知り合いかね？」

「はい。俺達兄弟の幼馴染で、兄さんの彼女の藤井 凜って娘です。」
「ほう、始君の。」

岬越寺師匠は兄さんとは顔見知りだって言ってたな。

「取り敢えず助けてきます。」
「うむ。気を付けてな。」
「はい。」

凜ちゃんに絡んでいた男が、腕を強引に掴む。彼女は逆の手でその顔を思いつき引つ叩いた。

「おお、相変わらず気が強いなあ。」

だが、凜ちゃんの態度に激昂した男が手を上げようとする。俺はその腕を掴んで捻る。

「痛ててっ！なんだお前！？」
「優君！」

「やあ、凜ちゃん。久しぶり。」
「久しぶりじゃないわよ。偶には帰ってきて顔を見せてよね。」

痛がる男を無視して挨拶を交わす俺達。

「ははは。修行が充実してて中々ね。」
「始さんもだけど、優君も熱中したらそればかりなんだから。」
「離せこいつ！！」

いい加減男がウザかったので耳元で囁く。

「このままここで腕を折られるのと、大人しく去るのはどっちが良
い？」

「…クッ！」

「俺は折るのを嫌いじゃないけどねえ。」

「ミシッ！」

男に捻った腕に力を加えて獰猛な笑みを浮かべる。

「わ、分かった。去るから離してくれ！」

腕を離すと男は三流役者の捨て台詞を吐いて退散していった。

「まったく…いい気味ね。」

「誰？あいつ？」

「同じ大学の生徒よ。しつこく言い寄って来てて困ってたの。」
「ふうん。」

後で兄さんに報告しとこ。念入りに躑けてくれるはずだ。ついでに
情報料に小遣いせびつたろ。凜ちゃんについてって言えば喜んで出
すだろうから。

「それにしても…」

「どうした？」

俺の二の腕や足を確認するように丁寧に触っていく。

「体格はそう変わってないけど、前よりも身のこなしが精練されて
きたわね。弟子入りの成果は有ったみたいね。」

「そう？実感は無いんだけどね。」

「終わったかね優君？」

凜ちゃんと話し込んでいると岬越寺師匠が声を掛ける。

「すいません。お待たせしました。凜ちゃん、こちらは梁山泊の師匠の一人で岬越寺師匠。」

「初めまして。優君がお世話になってます。藤井凜です。」

凜ちゃんが岬越寺師匠に丁寧な頭を下げる。

「話は聞いているよ。始君の恋人らしいね。彼にも昔、手解きした事が有ってね。」

「そうだったんですか。」

俺達3人は暫し談笑してから別れたのだった。

その日の夜。

ブルブル…ブルブル…ガチャ

「もしもし、優か？」

「兄さん、久しぶり。」

「珍しいな。お前の方から電話するなんて。」

「一つ情報を買わない？」

「情報？また唐突だな。何の情報だ？」

「凜ちゃんについて耳よりな情報を一つ。」

「幾らだ？」

速っ！速攻だ。凄い喰い付き。

「2000円で何ぞんしょ？」

「高い。1000円だ。」

「1500円。」

「…モノによる。」

俺は昼間に凜ちゃんに絡んだ男について話した。

「ほう…凜に…ね。」

兄さんの声のトーンが幾分下がる。

「良くやった。報酬には色を付けてやろう。」

「さすが！太っ腹！」

「確かそいつは建築科の二年だったな。最近は道場に掛かりつきりだったが、偶には大学にも顔を出すか。……悪い虫が増長する前に…な。」

ポクポクポク…チーン！

俺は凜ちゃんに絡んだ男の冥福を祈って電話を切った。

翌々日、兄さんから受け取った報酬を懐に兼一と購買部へと赴く。

「兼一、今日は俺の奢りだ。」

「え？良いの？」

「臨時収入が有ったからな。」

「バイトなんかする暇は無かったよね？」

「フツ…兼一。愛と情報は時には金に成るんだぜ。」

色を付けるどころか倍額払ってくれたんだよね。凜ちゃんによからぬ事を考えていた集団を一掃出来たとかなんとか。

「良く分からないけど僕はヤキソバパンで！」

「俺は当然タコヤキパンだ！」

第二十二話 愛と情報は金に成るんだぜ！（後書き）

最近、原作の兼一と美羽がイイ感じになってますね。

第二十三話 演劇部（前書き）

この連日投稿の勢い。いつまで続くのやら。

第二十三話 演劇部

「おお！ろみおー！貴方はどうしてろみおなのー！」

「ダ、ダイコン！」

修業中、セリフを練習する美羽の声が道場まで響いてきた。

美羽が何故演技を練習しているのかというと、近く演劇部が発表会を行うそうで、そのヒロイン役を依頼されたのだそうだ。「これも人助けですね。」なんて言っていたが、結構嬉しそうに語っていた気がする。

「で、お前は何をそこまで思い悩んでいるんだ兼一？」

道場の中央で浮かない顔の兼一に尋ねる。

「…知ってるかい？優君、ロミオとジュリエットにはキスシーンがあるんだ。」

「知ってるが…演技だろう？」

「演技でも堪えられないんだようー！」

身体をクネらせ道場を這い回る兼一が非常にウザい。

というか、たかが高校の演劇部のキスシーンなんてフリだけだろうに。一流の演劇学校じゃあるまいし。

「一々忙しない奴だなあ。お前も。」

「うつ……」

「美羽のキスカ。あのぼってりとした唇はきつと柔らかいんだぜ。」

それでいて暖かくて少し湿ってるんだ。」

「おおっ！も、妄想が止まらない……」

「で、キスの後に照れながら頬を赤く染めるんだ。」

「おおおおーっ！」

「兼一以外の相手にな。」

「グフツ……！」

最後のオチに床に突っ伏す。

「うーがー！嫌だ嫌だ！そんなの僕は認めないぞー！……！」

駄々っ子のように床でバタ付く兼一。好きだねえ。ゾッコンかい。

「仕方がない。兼一！同じ境遇になったある人の話を教えてやろう！」

「同じ境遇？」

「そうだ。昔、兄さ……じゃない、ある人は兼一と同じで想い人が演劇でヒロイン役選ばれた。演目は白雪姫。ロミオとジュリエットと同じくキスシーンも有る。」

「ふんふん……。」

「勿論兄さん……あ、もう言っちゃったから良いや。兄さんは王子役ではない。」

「成る程。優君のお兄さんの話か。」

悪い兄さん。バレちった。 確信犯

「しかし兄さん是不貞腐れるでもなく、妨害するでもない。むしろ裏方に回って積極的に想い人をサポートした。」

「ええっ！？何故！？」

「話しは最後まで聞け。兄さんのサポートのお蔭で見事に役を真つ当した想い人は、兄さんの献身的な支えにいたく感動。二人の関係は急接近した。今では婚約を交わしてゴールイン目前だ。」

「おおっ！？」

「つまり過去の偉人から学ぶなら、嫉妬に狂って暴挙に出るのではなく、想い人を支えて願いを叶える事だ。すると、『この人は私の為にこんなにも努力してくれた！本当の王子さまは裏方の貴方よ！好き！抱いて！』となる！」

かもしれない。

「うおおおおっ！！」

「そう！ピンチは裏を返せばチャンスに成りえる訳だ！そこで兼一！お前が今やるべき事は何だ！？」

「美羽さんを全力でサポートする事です！あります！」

シュタツ！と音が聞こえそうなほど見事に敬礼する兼一。

「その通り！本読みの相手でも良い。時間を練習に当てる為に代わ

りに家事を請け負うのもアリだ。さらに演劇部の雑用を手伝う等、やれる事は幾らでも有るぞ！」

「yes sir!!」

まあ、兄さんと凜ちゃんは前から気持ちは通じ合ってたんだけどね。散々煽ってそれはあんまりだし黙ってことう。

「早速僕は美羽さんの本読みのお手伝いを！」

「これこれ、今からおいちゃんと修行ね！」

走り出す兼一の襟首を掴む馬師父。

「見逃してくださいしーふー!!」

「今日の修行は終わりね。兼ちゃんは思う存分、美羽をサポートすると良いね。」

「はい！」

修行が終わると、急いで道場を出て行こうとする兼一に馬師父がアドバイスをする。

「そうそう、兼ちゃん。サポートも良いけど、いつの時代も一つの事に打ち込む男はモテるもんね。美羽は鈍いが馬鹿じゃない。きつと兼ちゃんの気持ちが通じる日が来るね。」

「はい！ありがとうございます師父！」

兼一は最初とは打って変わって明るい表情で道場を後にした。

「ふふっ、そうやって若かりし頃の師父は浮名を流してきたんですね。」

「お？分かるかね優ちゃん。」

「是非ともその手腕をお聞かせ下さい師父。」

「うむ…これはおいちゃんが始めてマフィアと対峙した時の話しね

……」

「ほうほう…。」

「…で……したね。それで……ね。」

「おおっ！？成る程その手が有りましたか！」

俺と馬師父は夕食までの時間を恋愛談義で盛り上がった。

翌日、演劇部の部室を訪ねた俺と兼一。そこには谷本夏という演劇

部の部長が居た。彼の話では格闘技研究会と称する不良達が、演劇部の部室を溜まり場にしようと狙って嫌がらせを始めたそうだ。

部員達はそれを怖がって辞めてしまい、ヒロイン役を美羽に依頼したのだという。

「お願いだ。二人とも…演劇部を守ってくれ。」

「谷本君…。」

「……。」

何だろう？何か釈然としないモノを感じる。特に谷本。こいつの目は俺と同類だ。奥底に感じる冷ややかで悲しい感情。違うのはそれを取り越えてきたかどうか。

「何だ。まだ居やがったのか？」

考察中の俺の思考を遮る声。横柄な態度でニヤつくそいつらは、明らかに演劇部では無い。

「谷本、こいつらか？」

「あ、ああ。そうなんだ。」

「早く出て行かねえところだ！」

不良Aが、恫喝と共に近くの備品を蹴り飛ばす。

「な、何をするんだ！」

「へへっ！」

得意げに笑う不良Aが更にセツトに蹴りを入れる！

「フツ！！」

ガシイ！！

俺が不良Aの足を掴み、兼一がセツトを庇うように立つ。

「止める！ここは演劇部の部室だ！」

「これ以上やるなら俺が相手しようか？」

掴む手に力を込める。

「ぐあつ！離せ！」

手を離すと、俺と兼一をそれぞれ見ていた後ろの不良が騒ぎ始める。

「優男に女顔…オイ！この二人、白浜と天道じゃ！？」

「何！？キサラ隊を倒した二人か！？」

「噂じゃ、白浜は熊を片手で捻り潰した事が有るってよ！」

きつと新島の脚色だ。先日、この勝利をどう発表しようかと妖しげに呟いていたからな。

「天道はタコヤキパンが切れると、口から光線を吐くらしいぞ！？」
「吐くか。」

新島、そりゃどういう脚色だ。お前は俺をどうしたいんだ。

「とにかく、演劇部に迷惑を掛けるな。分かったな？」
「クツ…クソ！！」

睨みを利かせると不良達、格闘技研究会は退散していった。

第二十三話 演劇部（後書き）

眠い。午前四時に書かんでも良かったのに。

第二十四話 演じるのは美羽だけではなく…（前書き）

今回、優を話に仕込むのに苦労したっす。

第二十四話 演じるのは美羽だけではなく…

「はあ〜。何でこんな事に…。」

「うーむ。謎だ。」

園芸部の花壇の前で俺と兼一は首を傾げていた。事の発端はあの日の演劇部での騒動が原因。二人で格闘技研究会を追い払ったのだが、その後何者かが俺達の名前を騙って奴らを病院送りにしたらしい。全員が骨折等の重傷で、噂に尾ひれが付いて俺達は学校内で敬遠される事に。

お陰で兼一は演劇部の雑用を申し出たが断られてしまった。

「仕方ない。美羽のサポートは梁山泊でやるしかないな。」

「そうだね。」

「まあ、噂なんかほっとけば直ぐに無くなるだろ。」

しかし犯人像が浮かんで来ない。俺達に悪評を立てて何の意味がある？ラグナレクのような不良グループからしたら、悪評でも俺達の強さが広まるのは不都合な筈だ。かといって、新島の脚色では無いのは確認が取れている。

「やあ、二人共。今回は派手にやったまいただねえ。」

武田がいつもの漂々とした笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

「んな訳ないだろ。」

「はははっ。やっぱりね。君達にしてはやり口が陰険だと思ったよ。」

」

「やっぱりラグナレクですかね？」

「んー、どうだろうね。ラグナレクにしてみれば君らに悪評が立つても大して得は無いはずだけど。」

武田も俺と同じ考えらしい。

「ともかく兼一君、君らがそういう人間で無い事が分かっている者がここにも居ると覚えていてくれたまえ。」

「はい！ありがとうございます武田さん！」

態々それを言いに来たのか。イイ奴だな武田も。

「フンフン フン フーン」

俺は現在、美羽に代わって台所で皿洗い中だ。今頃美羽は岬越寺師匠の演技指導を受けている頃だろう。そして兼一は本読みの相手を務めている。

更に、美羽のサポートをしているのは俺達だけでは無い。俺が食器を洗い、時雨さんが拭いて、アパチャイさんが片付ける。いつの間にか流れ作業が成り立っていた。

「アパ アパー」

俺の鼻唄に合いの手を入れるアパチャイさん。歌詞が分からないので基本『アパ』しか言って無いけど。

「フフフーン……イタツ！」

「どうした…の？優？」

包丁を洗っていて手を滑らしてしまった。

「ハハハ…少し指を切っちゃいました。」

さすが、時雨さんの研いだ包丁。鋭い切れ味だ。

「そう。貸して…」

「へ？」

「ん…ちゅっ……」

「ししし時雨さん!？」

「ペロ…ちゅ…」

切った指に舌を這わす時雨さん。傷口に柔らかい感触が伝わる。

「ん…これで大丈夫…。」

消毒のつもりだろう。

「あ、ありがとうございます。一応絆創膏貼つときますね。」

動揺を隠しつつ救急箱の有る部屋へと向かった。

「はぁ…あの人、ナチュラルにこういう事するんだもんなあ。」

ふと、傷口に目をやる。

「この指に時雨さんの舌が…。」

思わず傷口に舌を伸ばす…

「ノオオオオオオツ！！駄目だ！それは人として！いや、しかしこれは治療行為…また血が滲んでるし…だが、しかし！しかしいいいっ！！！」

「ほう…美羽がそんな事を…」

夜になり絵画について岬越寺師匠と語り合っていると、逆鬼師匠が部屋へとやってきた。

話しによると、両親が居ない美羽は学校でのイベントで家族との思いが無い事を、兼一に溢していたそうだ。それだと今回の演劇でも美羽の関係者は俺と兼一だけに成るだろう。

「俺的にはどうでもいいんだが、一応報告しとこうと思ってな。」

照れ隠しから面倒臭そうに語る逆鬼師匠。

「またまたあ、逆鬼師匠も美羽が心配なんでしょう？」

「バ、バツキヤロー！そんな訳あるかよ！さ、さーて、俺は部屋でビールでも飲むか。」

逆鬼師匠は気恥ずかしさがバレバレな態度と口実で自室へ戻って行く。

「クスクス…こういう時の逆鬼師匠は結構可愛いっすね。」

「ふむ…彼とは長い付き合いに成るが、可愛いと言ったのは優君が初めてだよ。」

「ハハハ。けど、どうします？美羽も皆に来て欲しいみたいですけど？」

生憎、美羽の唯一の肉親である長老はふらりと旅に出ている。こうなると数日間は戻って来ないのだそうだ。

「私も演劇指導をした事だし、興味は有るね。」

「それじゃ…」

「うむ。当日は全員で発表会に出掛けるとしよう。」

「で…何故優君が女装する必要が？」

発表会当日、何故か俺は女物のスーツを纏っていた。俺を見た兼一が顔を引きつらせる。

「仕方有るまい。時雨が刀を手放さなかったのだから。」

「それじゃ時雨さんは？」

「見つからないようにコッソリ劇を見るってさ。」

代わりに俺が母親役らしい。まさか劇を見に行くのにこっちが演じる羽目になるとは。

「さすがに無理が有るんじゃない？」

それを言ったらこのメンバーで家族は無理だろ。馬師父とアパチャイさんは国籍さえ違うぞ。

「まったく！文句が多いわね兼一君！そんなんじゃない、私の可愛い美羽ちゃんはやれないザマスよ！」

「うえー！？」

「おお！乗ってるね優君。」

「ええ。行きますわよあなた！私達の可愛い美羽ちゃんの晴れ舞台に遅れたら大変ザマス！」

「その通りだね。行こうか優子。」

風林寺優子でござーい。

第二十四話 演じるのは美羽だけではなく…（後書き）

まさかの女装編。そして時雨さんの指チュパ。珍しく優の動揺が見えたのではないだろうか。

第二十五話 男だと暴漢。そんじゃ、女の場合は？（前書き）

長らく間が空きました。

過去にコラボした光軍さんも更新しておられ、つられて更新ですw

第二十五話 男だと暴漢。そんなじゃ、女の場合は？

美羽サイド

舞台衣装に着替えた美羽は演劇開始の合図を待っていた。

「はあ…。」

零れた溜め息は緊張ばかりが理由では無い。こういう学校行事ではいつも自分は一人だった。周りの生徒は家族や親戚が参加するというのに。しかし唯一の肉親である祖父は旅に出ていて不在。慣れたつもりでは居たが、憂鬱で在るのに変わりは無かった。

だが美羽は客席を窺う演劇部員の言葉に驚く事になる。

「風林寺さんの家族も来てるわよ。」

「えっ？」

緞帳の隙間から客席を覗く。

「皆さん…」

美羽は感激した。わざわざ自分の演劇を梁山泊総出で見に来てくれていたのだ。

（今日は私、独りじゃ無いんですわね。）

そこでふと、秋雨の隣に座る女性に目を移す。

「へ…？ゆ、優さん！？」

美羽の目線の先では、他の生徒の保護者とにこやかに会話する女装した優の姿が在った。

「へー。主役の風林寺さんのお母さんですか。」

「そうなんですの。ウチの美羽ちゃんたら遅くまで、お父さんとセリフの練習していたんですのよお。」

「しかし風林寺さんのお母さんはお若いすな。旦那さんが羨ましい。」

「あらいやだ。おだてないで下さいまし。」

自然だ。どこかで練習したのでは無いかと思う程、保護者の中に溶け込んでいた。ご丁寧に美羽の髪色と同じカツラまで被っている。

すると優がさり気なく客席からこちらを見た気がした。

「あ…。」

優が一瞬、覗いている自分に向かって口をパクパクと動かす。唇を読めない美羽でも分かる短い言葉だ。

ガ・ン・バ・レ

「ありがとうございますわ。優さん。」

いつの間にか緊張は解けていた。これなら演技に集中出来そうだ。

「わぁ…風林寺さんのお母さん美人ね。」

「あ、あははは…」

部員の言葉に乾いた笑いで応える美羽だった。

優サイド

最初の大根役者から美羽の演技力は大きく進歩していた。岬越寺師匠の指導と美羽本人の努力の成果だろう。もう少しで劇も佳境。そんなとき、マナーモードにしていた携帯が震えた。

「新島？」

送られて来たメールの相手は新島だった。俺はその内容に少しばかり驚く。

ラグナレクのキサラが美羽を狙って劇に乱入しようとしているという。そしてそれを阻む為に兼一がキサラと対峙していると。

スッ…

俺は劇の邪魔にならない様に、無言でメールを岬越寺師匠に見せる。

「…行ってきたまえ。」

メールを読み、手短に応える岬越寺師匠に頷きながら席を立つ。

兼一・キサラサイド

「チツ！頑固なボウヤだね。今回は見逃してやるからそこを退きな
！！」

何度自分の蹴りを浴びせても道を譲らない兼一に、キサラはいい加減辟易していた。女性に手を上げない事を信条にしている兼一は、他の敵を倒した後はひたすら防御に徹していた。しかしそれも既に限界。足取りも不確かで、出来るのはただ立つ事のみだ。

戦いの切っ掛けは、兼一がキサラに女性に手を上げない主義だと宣言した事だ。

不良に落ちぶれる以前、キサラはテコンドーの試合で勝っても女だからというのを相手の言い訳にされた。自分が女というだけで正當に評価されない事への腹立たしさが、彼女を屈折させた原因だ。だからこそ、兼一の女性に手を上げない主義という宣言は、キサラの逆鱗に触れた。

「断る！貴女に誇りがあるように、僕にも信念がある！！」

「こいつっ！」

そこで暫し睨み合いとなった所で、不意にキサラが問い掛ける。

「お前…そんなにあの牛乳が好きなのか？」

「へえっ！？いや！そんな好きとか…付き合いたいとかそういうでは無くてですね！」

途端にしどろもどろになり、緊迫した雰囲気が崩れ去る。

ドゲシッ！

「げふッ！」

そんな隙だらけの兼一を蹴り飛ばすキサラ。

「…あ…酷い…」

キサラの側近の部下と、物陰に隠れながら見ていた新島の感想が重なった。

「はああ……コイツとやると調子が狂うな。もういい！帰るぞ！」

兼一の頑固さに呆れたキサラは、帽子を目深に被り直し部下に撤収を命じる。兼一の身体を張った説得にキサラが折れたのだった。しかし、そうとは知らずに空気を読まない乱入者が一人……

「ちょっと待ったー！！ここを通りたかったら俺を倒してからにして貰おうか！」

キサラ隊の撤収を知らない優だった…。

優サイド

「ちょっと待ったー！！ここを通りたかったら俺を倒してからにして貰おうか！」

新島のメールに記された場所へ向かうと、兼一とキサラが戦っていた。けど雰囲気がおかしい。

「あ、女装だから分からない？俺だよ天道……ってあれ？」

何だか場違いな者を見るかのような反応の一同。状況の掴めない俺に新島の解説が飛ぶ。

「このアホウ！もうキサラ隊は兼一のお蔭で帰るところだったんだよ！お前が出て来たら話がややこしくなるだろうが！」

「ええ！？もう終わってたのか！？」

新島の話によると、どうやら俺は色々やっちゃった感じらしい。

「フッフ…このまま帰ろうかとも思ったけど、消化不良だし丁度良いや。続きは天道、お前にして貰おうか。」

撤回するつもりだったらしいキサラが、再度好戦的な笑みを浮かべる。

「ゴ、ゴメンなさいキサラさん。あたくし、まだ娘の劇の途中ですの（女声）。」

「…天道…確か、次は無いつて言っただよな？」

「何の事でしょうか？あたくしは風林寺優子ですの。天道優なんて眉目秀丽、質実剛健、文武両道なナイケメンは存じませんわ（女声）。」

ブチッ！

「お前自分で天道って言ったじゃねえかああー！！！」

「キイヤアアアアアアアア！おまわりさー！！ん！！！」

俺は追い掛けて来るキサラから逃げ惑うハメになったのだった。新島あ！お前のせいだ！状況くらい報告しろ！！

兼一・新島サイド

「コラア！待て！天道ー！！！！！」

「いやああああああ！暴漢よおおおお！！助けてー犯され

るううー！！！」

「犯すかあああああ！！あたしは女だー！！！」

キサラの標的になった優は、奇声を上げながら逃げて行った。その場に残ったのは兼一が倒したキサラ隊の兵と、兼一と新島だけ。

「助ける…か？」

「いや…優君ならどうせ捕まらないだろうし…大丈夫だろ。」

わりと薄情な悪友と兄弟弟子だった…。

第二十五話 男だと暴漢。そんなじゃ、女の場合は？（後書き）

またこんなオチ。

もう少し優にも闘って欲しいのに…何故だ！？

第二十六話 バス上戦と馬師父の…ゴニョゴニョ……（前書き）

お久しぶりです。何とか搾り出してみた次第です。

では本編をどうぞ。

第二十六話 バス上戦と馬師父の…ゴニョゴニョ……

優サイド

「ふいー。やっと撒いたか。案外執念深いなキサラちゃん。」

俺は追いかけて来るキサラと、街中を小一時間ほど鬼ごっこして漸く逃げ果せた。さすがにスカートだと走り難い。思ったよりも時間が掛かってしまった。

最終的には駅の男子トイレに逃げ込んだのが功を奏したな。女装してるせいで、使用中のサラリーマンがギョツとしていたが、彼には悪い事をした。

余談だが、トイレの裏窓から脱出した際に、男子トイレの前で入るか入らないか迷ってモジモジしてるキサラがちょっと可愛かった。

「もう皆帰り始めてる頃かな。」

劇も既に終盤だったし、時間的に梁山泊の皆は帰途に着いてる頃だろう。

「俺も帰ろう。」

俺は梁山泊への道を歩きだした。すると…

ドゴン！バキッ！！

「ん？何やってるんだアレ。」

俺の歩いている方角からバスが走ってきた。変なのはそのバスの上。何とそこでは兼一と演劇部の谷本が戦っていたのだ。谷本はいつもと違うフード付きの黒ずくめの格好で、学校で会った時とは雰囲気があったく違う。

「それと……馬師父に逆鬼師匠？」

バスの後ろでは走る車の上を渡り歩く馬師父の姿が。その隣には猛烈な速度でバスを追い掛ける逆鬼師匠。

「おう！優じゃねえか！」

! : - - T T T T T T T T T T

爆走してくる逆鬼師匠が俺に気付く。

「どういふ状況ですか？こりや。」

すれ違い様に俺は逆鬼師匠の背中に飛び乗る。

「見ての通りだ！あの黒ずくめのガキが兼一に喧嘩ふっかけやがった！」

まあ、見たまんまそうだな。やっぱり谷本は猫被っていたな。ア
イツの目は一般人のソレとは違うと思っていたが。

「あ、ヤバイ。」

「ゲハッ!!」

バスの上で闘う兼一の後頭部に谷本の打撃が決まる。

「構えからして中国拳法ですかね？」

「うむ、劈掛拳ね。しかも彼のはかなり実戦的なものを学んでいるね。」

馬師父が車の上を飛び移りつつ解説してくれた。

ギリリ!

「逆鬼どん…」

「分かってら!弟子の喧嘩に師匠は出るなってんだろっ!？」

仄かに殺気を洩らした逆鬼師匠を馬師父が諫める。

「フフッ…」

やっぱり心配してる。面倒見の良い人だな。

「何を笑ってやがる優!？」

「何でも無いですよー。」

俺は苦笑しながら兼一の闘いを見守る。後頭部に打撃を食らいながらも踏み止まる兼一に、谷本は驚いている。くくっ、梁山泊に居たら嫌でも打たれ強さは身に付くもんな。

「むっ！？」

兼一と谷本の距離がゼロになり、兼一は馬師父から教えられた超接近戦用の掌底を谷本の顎に打ち込む！

互いに弾け飛び、谷本は別のバスに飛び移る。しかし兼一はバスから投げ出されてしまった。

「逆鬼師匠！！」

「おうよ優！行って来い！！」

逆鬼師匠に襟首を掴まれ、俺は兼一に向かって投げられる！

バビューン！！

「兼一！」

ドサッ！！

間一髪で兼一を受け止める事に成功。

「優君！」

「兼一い、バスの上でジャ キーこつことは中々スリリングな事するじゃないか？」

「はははは…… ホント、何処で人生間違っただろ？」

頬を引きつらせ渴いた笑い声だった。

梁山泊に帰り着くと、兼一の治療をしながら雑談する。

「ふふっ…バスの上で喧嘩とは今時珍しい元気な若者じゃないか。」

岬越寺師匠が谷本をそう評価する。

「良い経験をしたな。」

「良かないやい！」

確かについ数ヶ月前まで一般人だった兼一には初めての経験だろう。うちは兄貴や父さんが結構頻繁にそういう状況を団樂中に語るので違和感は無いのだが。考えてみれば我が家も普通とは大分ズレているらしい。

「ははっ、今回はバスの上なら次は飛行機の上かもな。」

「絶対ゴメンだよ！……あっ！」

「うん？どうしたね兼ちゃん？」

不意に会話が途切れると、兼一が思い出した様に尋ねる。

「谷本君が言っていたんです。『お前の師は馬 槍月か?』って。師父、馬 槍月って一体…?」

「……さ、そろそろ修行の時間ね。」

兼一の問いをスルーした馬師父。何処かそれ以上尋ね辛い雰囲気だった。

師匠達が去り、美羽・兼一・俺の三人になると憶測が飛び交う。

「馬 槍月って誰なんだろう?」

「馬っていうくらいだから馬さんの親戚では?」

美羽の予想に頷く俺と兼一。

「でもただの親戚の事であんな態度になるかな?」

「分かった!」

俺はある推論に達して声を上げる。

「何か分かったの優君?」

「ああ。分かったぜ兼一。これが俺の中でも一番有力な説だ。」

今、俺にかの名探偵が憑依した！！

「さすがは優君！」

「その説とは何ですか？」

期待に満ちた二人に俺は自信満々に答える。

「恐らく件の人物は馬師父の愛人だっ！！」

ドドン！！

俺はコン君が犯人を指摘するかのようなテンションで結論を出す！

「ま、まさかあですわ。」

「そ、そうだよ。優君。馬師父に愛人なんて。」

訝しむ二人。

「いやいや、お二人さんも知っているだろう？若い頃の馬師父は美形で数々の浮名を流した事を。ならば馬師父に愛人の一人や二人居てもおかしく無い……。」

「そう言われてみれば……」

「さ、最低ですわ馬さん……」

兼一は困惑し、美羽は軽蔑の眼差しを湛えていた。

「しかし、これはかなりデリケートな問題だ。部外者の俺達がとかく言って良い問題じゃない…。」

「ですが!」

「落ち着くんだ美羽君。相手の女性との関係がどうであれ、馬師父もいい大人だ。どういう形で決着するかは分からないが、ちゃんとした責任を取る筈だ。俺達に出来ることはただ見守る事だけなのだよ。それが金銭的なものか、話し合いによるものかは分からないが…な。」

「でも、別れるにしても関係が続けるにしても、相手の女性は傷付くに違い無いですわ!」

「だが、相手には妻が居る事は分かっていた筈だ!」

「それは男性の勝手な言い分ですわ!」

もう俺と美羽の中で馬 槍月は妻の居る男に惚れた悲しい女性という説が決定事項になっていた。

「お、落ち着いて!二人とも!」

「うるさい!」

「ヒイヒイヒイ!」

第二十六話 バス上戦と馬師父の…ゴニョゴニョ……（後書き）

後半、誤解に誤解を重ねていく優と美羽。

筋肉隆々のオッサンに同情するという。一応次回のフラゲっぽくは成ったのだろうか…。

第二十七話 暴漢の女性版が思いつかなかったんだよ！（前書き）

ようやく爆裂のお気に入りキャラの一人が登場です。
って、原作知ってるなら分かりますよね。

第二十七話 暴漢の女性版が思いつかなかったんだよ！

「けど、やっぱりおかしいなあ…。」

修行が終わり梁山泊自慢の天然温泉に浸かっていると、兼一が独り言のように呟く。間違いなく様子の変だった馬師父についてだろう。

「ん？馬師父の事か？」

「そうなんだ。縁側でエロ本読んでる時も、本が逆さまで上の空みたいだったんだ。」

「ふうん…」

兼一の言葉を聞きながらも俺は、温泉の魅力に逆らえずまったり蕩けていた。

俺の自宅も温泉出ないかな？今度兄さんに相談しよう。『凜ちゃんと二人で杯傾けながら入るとムード満点ですぜ。』とか言えばイチコロだろ。

「もう！ちゃんと聞いてる！？」

「聞ってる聞ってる。どうせ温泉に入るなら美羽と入りたいっていう兼一の願望だよな？」

「まったく聞いてないよ…この人。…でも美羽さんと温泉かあ……。デヘヘ…」

俺は思考を温泉から馬師父へと切り替える。兼一の言う通り槍月という名を出した後の馬師父の様子は明らかにおかしかった。今後馬師父自身が何かしらの行動を起こすかもしれない。弟子としては注意して様子を見守るべきだ。本当に愛人だったら笑い話兼、ネタとして弄れるし。そうでなくとも何かやれる事がある筈だ。

「一応馬師父の動向には注意しておこうぜ。俺達にもしてやれる事があるかもしれないしな。」

「ウヘヘ…み、美羽さんの身体つてとっても柔らかいんですね…。あつ！そ、そんな所も洗うんですかあ？デヘデヘ…」

「おい！聞いているか兼一？」

「聞いている聞いている。美羽さんと洗いつこだよね？」

「まったく聞いてねえよコイツ…。」

…しかし洗いつこだと！？

以下優の妄想にて

「優、ボクも一緒に入って良…い？」

「ええー！し、時雨さん。そりゃ不味いですって！」

チャプ…

構わず湯船に入る時雨。

「何で後ろ向くん…だ？」

「いやぁ…色々と事情が有りまして…。」

「優、背中流してあげる…よ？」

「背中！？」

「あ…でも先にココを洗わないと…ね？」

ギュッ…

「おふっ！時雨さん！ソコ握っちゃー！」

「フフ…大きくなってきた…ぞ？」

「時雨さんー！」

ガバァ！！

以下兼一の妄想にて

「兼一さーん！今日も修行ご苦労さまですわぁ。」

「み、美羽さん何故ここに！？」

「うふふ…頑張っている兼一さんに日頃の疲れを癒して貰おうと思
いまして…。さあ、兼一さんこちらに来て下さいですわ。」

言われるがまま風呂から出た兼一。すると服を脱ぎ始める美羽。

「な、何で服を!？」

「いやですわ…このままじゃ洗えないじゃないですかあ。」

「あ、洗う?」

「もちろんわたくしのオツパ……」

以下略

「デヘヘ……」

「デヘヘ……」

「おおっ! 兼一に優じゃねえか!」

「ゲッ!」

「ウエ…!」

妄想に浸る俺達の前に突如現れた逆鬼師匠。ガチムチな男の裸体の

せいで一気に萎えたのは言うまでもない。

「何だあ？一人で馬鹿面しやがつて？」

「空気読めええええええ！！」

「はあああああ！？」

温泉で不快な思いをした俺は、癒しを求めて馬師父に貰った『時雨のひみつ写真集』でも鑑賞しようとしていた。すると、

「何してるんだ兼一は？」

コソコソと門の方へ歩いていく兼一を見掛けた。今日は修行も終わって疲労は温泉で、気力は美羽の笑顔で回復した後だ。修行が嫌で逃げ出す筈はない。

「ふむ、何やらイベントの予感。」

こつそり後をつけると直ぐに理由は判明した。兼一の目線の先には馬師父が居た。兼一は馬師父を尾行しているらしい。

「おいおい兼一、多分もう馬師父は気付いてるぞ。達人相手にそんなへたくそな尾行が通用するか。」

俺は馬師父を尾行する兼一を尾行しているので気付かれて無い。多

分。

案の定、中華街周辺で師父に声を掛けられて驚く兼一。二人のやり取りを眺めて俺もそろそろ出て行くべきかと思案してたが、タイミングを逃してしまう。馬師父は兼一を伴いとある中華飯店へと入って行った。

「ぬう、もしかや二人してご馳走でも食べるつもりか？許せん！」

「何が許せないって？」

「ご馳走だよ！ごち…ってうおおっ！？」

中華飯店の入り口で様子を窺う俺に話し掛けてきた人物。何故かそいつが振り向きなり蹴りを放ってきた。

「チッ！不意打ちで私の蹴りをかわすなんてやるわね！」

「いきなり何してくれてんの！？ってか俺が何をした！？」

「惚ける気！？コソコソと白眉伯父の店を覗いてたじゃない！」

この会話の間にも数回打撃を放ってきていたりする。人違いだったらどうするんだろこの娘？

「きつと槍月の回し者ね！？ネタは上がってるんだから！」

「上がってない上がってない。」

また槍月か…。一体誰なんだろうな。

相手の仕掛けてくる打撃や身のこなしから想像するに、見た目通り中国武術の使い手だろう。格好もチャイナドレスだし。しかも超ミニ。動き易いんだろうけど生足が…ゴホン。イカンイカン…。

「使いつ走りのクセに私の攻撃を避けるなんて生意気ね！」

このまま避けていても埒が開かない。どうすんべ？

1：観念してその美脚を受け止める（顔面で）

2：寧ろその生足の付け根に受け止めてもらう（何を？勿論下半身的な意味で）

3：恐らく関係者であろう店内の馬師父に泣き付く

分かってる。1と2は無いって。1だとこのままK.O.されて誤解が解ける頃には病院だ。尾行しといて見つかるのが気絶後とかダサ過ぎ。俺の美学が許さない。よって却下。

そしてお待ちせしました。選択肢の2だが、個人的にはとっても選択したい。したいが、それを行うと漏れなく後ろに手が回る。何より一時の劣情に身を任せると、高確率で後悔すること受け合いだ。皆もそういうお店以外では良く考えてコトに望もう！お兄さんとの約束だぞ

なので俺は3を選択すべく、馬師父を追って中華飯店の中へと逃げる。

「師父ーーーーー！！！」

「優ちゃん！」

「優君！」

店内に入るとテーブルを囲む兼一と馬師父。それと知らないおじさん。

「やっぱりご馳走食ってたな！ズルイぞ！」

「そ、それよりどうしたの！？血相を変えて。」

「はっ！そうだ！二人を追いかけていたら、暴漢…いや、暴チャイナ娘が！！」

俺は店の入り口を指差す。正確には俺を襲ってきた人物を。

「逃がさないわよ！けど、わざわざ敵の中枢に入り込むなんて良い度胸じゃない！…ってパパ！？」

「…パパアーー！？」

チャイナ娘の視線を向けた先に居たのは、間違いなく馬師父だった…。

第二十七話 暴漢の女性版が思いつかなかったんだよ！（後書き）

爆裂にとっては、かないみかがナンバー１声優なんですよ。

第二十八話 パパ！？それって援k…（前書き）

短いです。

前話と繋がれば良かった。

第二十八話 パパ!?それって援k…

ガシッ!!

暴漢もとい、暴チャイナ娘が馬師父をパパと呼んだ事で、現在俺と兼一は円陣を組むに至った。二人だけど。

「どどどど、どういう事?馬師父がパパって…」

「落ち着け兼一。だが、確かに予想外だ。愛人説は唱えたものの相手が若すぎる。クッ…こいつは犯罪の匂いがプンプンするぜ!」

「そうだよね…僕も三十代…いつでも二十代だと。まさかどう見ても相手は十代…」

「いや、待て待て待て!望みを捨てるな!単に相手が童顔って事も考えられる!」

「じゃあ、確かめてみる?」

一旦円陣を解くと、俺はチャイナ娘に確認を取る。

「あのー、つかぬ事をお聞きますが…」

出来るだけ相手を刺激しないよう下手に出る俺。

「何よ?」

「貴女様はおいくつで?」

「16だけ何よ？」

ガシッ！！

「どどどど、どうしよう優君！僕、もう馬師父を色眼鏡無しで見る自信が無いよ！」

「くっ！最後の希望も断たれたか！」

梁山泊弟子緊急会議は困窮を極めた。そんな状況の最中、ようやく馬師父が一言。

「何を考えてるか知らないけど、二人とも。あの娘はおいちゃんの
実の娘ね。」

「……。」

「……。」

「な、何ねその目は？」

ガシッ！！

「この期に及んで被告は苦しい言い訳……か。」

「もう止めて……師父……。僕だけは師父の味方ですから……。」

悲嘆に暮れる俺と、ハラハラと涙を流す兼一。

「だから本当ね！あの娘は馬　連華！正真正銘神に誓っておいちやんの娘ね！」

俺達は円陣を解くと必死に平静を装う。

「分かってますよー。当然じゃないですかあ。な？兼一。」

「そうですよー。他に何があるって言うんですか。アハハー。」

「な、なら良いね（絶対疑ってたねこの弟子達…）。」

あのチャイナ娘が馬師父の娘って事は、前に見せてもらった馬師父の若い頃は真実なんだろうな。時つてのは残酷だあ。

「もうあいつはいいわ。それよりパパ！」

「な、何ね連華？」

「今日こそ連れて帰るわよ！！」

連華の標的が俺から馬師父へと変わる。おかしい。ここは感動の再開の場面じゃないのか？

「ええーい！」

ヒュバツ！！

投げ縄を馬師父の腕に巻きつける連華。

「ホーホツホツ！剣星大ピンチ！！！」

愉快そうに笑う白眉の人。兼一たちとテーブルを囲んでいた人だ。
ん？白眉？ああ、この人が連華の言ってた白眉伯父か。馬親娘のやり取りを眺め、取り留めの無い事を考えていると唐突に景色が変わった！

「あ？あれえ？」

馬師父を捕らえていたはずの投げ縄がいつの間にか俺に巻き付いている。

「あの…師父？」

「優ちゃん、後を頼むね。」

「何iiiiiiiiiii!？」

縄に拘束された俺の背を馬師父がポンと押す。

ズダダン！

俺は連華を巻き込み倒れる。

「おいちゃんを疑ったバツね。」

イイ笑顔でそう言い残し店から走り去る馬師父。くそう！根に持ってたんかい！

「待てえ！この不良オヤジ!!」

「待てえ！この禿げオヤジイイイイ！！」

馬師父が逃走した後、店に残されたのは今も笑い続ける白眉さんと右往左往する兼一。そして二人して転がる俺と連華。

「ああん！もう！絡まっちゃったじゃない！」

「俺のせいじゃねえ！…むごっ！」

俺の上で連華が絡まった縄から抜け出そうと暴れる。連華がもがく度に彼女の立派な胸が俺の顔面を圧迫する。

ムニユ…

「ふごっ！」

こ、これは…なかなか…。予想外の嬉しいハプニングだ。フッ、甘かったですね師父。これはどちらかというところ褒美ですよ。

「もう！動かないでよ！解けないでしょ！ほら、あんたも手伝って！」

兼一にも手伝わせる連華。手伝わないでも良いぞ兼一。むしろこのままで…おふう良い匂ひ…。

そのころ梁山泊にて

ピクリ…

「……ん。」

「どうかしましたか時雨さん？」

「優が、不埒な事をしている気がする。」

勘の鋭い時雨。

「ほえ？」

美羽は良く分からず首を傾げるのだった。

五分後、縄から解放された俺は兼一と共に馬師父について聞かされた。師父が鳳凰武侠連盟の最高責任者だとか。そんな話だ。

「馬師父ってそんな凄い人だったのか。」

連華の話に兼一が驚く。俺は知ってたけどな。主に師父との恋バナの中で聞いた。

「でも、パパったら『面倒臭くなったね』とか言っでどっかに消えてしまったのよ。」

「言いそうだ。」

「確かに……。」

あのフットワークの軽い馬師父の事だ。容易にその光景が目に浮かぶ。

「それで？あんな達は何者なの？」

「僕は白浜兼一。一応馬師父の一番弟子をやってます。」

「天道優だ。同じく二番弟子だ。」

「フーン……」

ドスッ！

「ぐほっ！」

不意に連華が兼一を殴る。

「ちょっと！避けなさいよ！」

どうやら兼一を試したらしい。

（（暴力娘だ！））

間違いなく俺と兼一の印象はシンクロしたに違い無い。

第二十八話 パパ！？それって援k…（後書き）

なんとか馬師父への誤解が解けました。

しかし連続投稿は辛い…。

第二十九話 たまには真剣にもなります（前書き）

今回シリアス風味。

第二十九話 たまには真剣にもなります

「うひゃー！な、何だか危なそうな人達がいっぱい居るよぉ。」

連華と絡まった縄を解いた俺達は、中華街の裏路地に居た。ぱっと見ても堅気には見えない連中がチラホラ…。

「んで？ここに何の用が有るんだ？」

「パパは槍月伯父を探しているんだから、あいつ等マフィアの下っ端に聞くのよ。」

「槍月？」

「ああ、優君は聞いてなかったんだっけ。」

兼一から聞いたところによると、件の槍月氏は馬師父の兄なのだそう。うだ。やっぱり愛人じゃなかったのね。

そして槍月氏は行く先々で問題を起こし、今はマフィアの用心棒に身をやつしているとの事。

「オイ！馬 槍月は何処だ！？」

兼一に話を聞いている間に、連華が近くの男に歩み寄っていた。

「チイツー！！」

連華が話し掛けた男が、突然ベルトに仕込んでいた軟刀を抜いた。

「フッ!!」

俺は男が刀を振り下ろす前に、背中から出した小太刀で奴の手首を打ち据える。

「ぐあっ!？」

「テヤア!!」

直後、兼一が怯んだ男を投げ飛ばす。

「ふう。初っ端から光り物とは、中々デングジャラスだな。流石は武侠の世界ってか？」

「危なかったね。」

敵を倒して一息付く俺達。

「どうでも良いけど、アンタ達が使ったの中国武術と違うじゃない。本当にアンタ達パパの弟子？」

俺達の扱った流派が中国武術とは違い連華が訝しむ。

「俺も兼一も他に柔術やら空手やら習ってるからなあ。」

「何よそれえ!片手間で中国武術やるなあ!」

「おおっ!?!いちいち殴るなよ!」

俺は連華の抗議の突きをかわしながら叫ぶ。

「それにしても、小太刀なんて良く持っていたね優君。」

「ん？いつも持ってるぞ？」

「ええ？気付かなかったよ？」

「当たり前だろ。街中で分かるように持ってたら職質でおまわりさんに捕まるわ。時雨さんに隠し方を教わったんだよ。ま、暗器使いの初歩みたいなもんだ。」

でも咄嗟だったから抜く時にシャツのエリが少し切れちゃった。俺もまだまだなあ。

時雨SIDE

「ふふ……ん……」

「あらあ？ご機嫌ですわね時雨さん。どうなさったんですの？」

「…ボクの教えが少し役立った気がする…る。」

「ほえ？」

優SIDE

「アンタ達何処まで付いてくるつもり？ここからは本当に武侠の世界よ。下手すると命を落すかも知れないわよ？」

先程倒した男を締め上げ、槍月氏の居所を突き止めた俺達はマフィアのアジトであるビルにやってきた。連華は半ば脅しじみた口調で問い掛ける。

「馬鹿言っな！そんな場所なら尚更女の子一人で行かせられるか！」

「……っ！」

命って事を聞くと思わず熱くなってしまうな。悪い癖だ。語調が荒いせいか連華が押し黙る。

「…ふ、ふん！分かったわよ。なら覚悟して付いてらっしゃい（何なのよコイツ？おちゃらけた態度かと思ったら急に真面目な顔して）。」

連華と俺が行く方向で話を着けていると、隣で兼一は小刻みに揺れて…いや震えている。

「兼一、もしやビビッてる？」

「な、何を馬鹿な！？当然僕も行きますよ！馬師父には弟子として悩みを共にすると誓ったんだから！」

ふむ…ならばここは例の手で兼一を奮起させておくか。いざって時に緊張されても困るしな。」

「兼一、目を瞑ってみ？」

「え？…う、うん…」

「良いか？強く想像しろ。今あのビルの中に居るのは誰でもない美羽だ！」

「へ？」

「想像しろ！敵に捕まった美羽がお前に助けを求めている！」

「…！？」

「縛られ床に転がされている美羽…ああと！そこににじり寄る男達！卑猥な手付きで男が美羽に手を伸ばす…」

「…っ！…！！？」

「美羽は男達に囲まれながら細い声でこう呟くんだ。」

「？」

「兼一さん…（女声）」

「うおおおおおーっ！美羽さんっ！！今助けに行きますっ！！！」

突如、眼が炎になった兼一がビルへと突貫していく。

「ちょっと！何なのアイツ？」

走り出す兼一に首を傾げる連華。

「うーん。ちょいクスリが効き過ぎたか？」

「誰よ美羽って？」

「兼一のコレ。」

小指を立てて見せる。

「成る程ね…。」

納得した連華が頷く。

「アンタは居ないの？」

「何が？」

「だから、そういう相手よ。」

「うーん…今のところ居ないな。」

「ふうん…」

何だよその目は。寂しい奴とでも思ってるのか？やめて！思春期の少年の心はナイーブなのよ！

ビルに入ると案の定戦闘になった。とはいえその殆どはハイパー化した兼一が蹴散らしているので、俺と連華が相手したのは二、三人だ。

兼一を先頭に快調にビルの中を進む俺達。

「本当にここに馬師父か槍月さんが居るのか？さっきから雑魚ばかりだけど。」

「必ずどちらかには行き着く筈よ。パパはともかく、槍月伯父には死んで貰うわ。マフィアの用心棒なんて馬一族の恥だもの。」

「オイっ！！」

俺は殺気を灯した眼をする連華の肩を掴む。

「な、何よいきなり！？」

「易々と殺すような事を言っな！」

「何よ！これは一族の問題よ！アンタには関係ないでしょ！？」

「…馬師父には関係あるだろうが！馬師父が極めようとしているのは活人拳だ。人を殺さずに導く道だ。それを娘のお前が汚しても良

「いのか？」

「っ！？」

「確かに俺は一族とは関係無い。だが俺は自分の目の前で人を死なせないと決めてる。もしもお前が殺しをするなら俺は自分の信念の為に前を止めるぞ！」

もう二度とあんな事は起こさせない！それが無関係の人間でもだ！

「…わ、分かったわよ…。本当の目的はパパだし。槍月伯父の事はパパに任せる…それで良いんでしょう？」

「あ、ああ…。」

連華が考え直した事で、俺の方も頭が冷える。そうすると少しばかりバツが悪くなってしまった。

「悪かったな。怒鳴って。」

「イイわよ…別に。」

「うおおおおおー！！美羽さー！！ん！！」

気まずい空気が漂う間も兼一のハイパーモードは続いていた。お蔭でこの微妙な雰囲気も直ぐに消えてくれた。

「兼一そろそろ戻れ！」

ドゴーン！

「何だ!？」

突然ビルの壁が破壊され、一人の大男が現れた。俺は衝撃で飛ばされた兼一を受け止める。

「おっと。」

「槍月伯父……」

連華が呻くように呟いた。

「あの人……」

発する気組で分かる。マスタークラスだ。

第二十九話 たまには真剣にもなります（後書き）

連華が飛び掛るフラグを折ってみました。

考えてみたら優のシリアスって久々だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6646m/>

史上最強の弟子！天道優！

2011年9月18日05時32分発行